

して以て事の來るを待ち、然る後に之に應せよ」と。其事を好み功を喜び敢爲鋭進に過ぎんことを慮りし也。文彦博も亦曰ひき、「陛下位に就きて以來、厲精治を求む。而して人情未だ安からざるものは更張の過ぎたるのみ」と。其憂ふる所蘇軾に同じき也。彼等は總て神宗に對しては故意に若くは無意識に保守黨たりき。彼等の説に曰く「方今天下正に大富家の上下和睦し、田園開闢し、屋宇牢壯に、財用充足するが如し。但屋宇設備を少き、器用精巧を少き、僕役樸魯遲鈍、敢て過を作さざるが如し。但だ隣舍ありて來りて相凌侮し、歳時物を以て之に贈るを免れずと雖も、其來る已に久し、自家の做したる過に非ず」と。彼等は此故に應さに改革すべきものは徐ろに改革すべく、應さに行ふべきものは靜かに行ふべしと爲したりき。されば苑純仁の所謂「道遠ければ當さに馴致すべし、任大なれば速に成り難し、人材は遽かに求むべからず、積弊は頓に革むべからず」てふ數句は最もよく當時に於ける彼等の政綱を形容したるものにして彼等は神宗を助けて其雄志を爲さんには餘りに持重に過ぎたりし也。斯の如き情態を見たる神宗は煩悶せざるを得ざりき。彼れは四夷を鞭撻して以て中國を疆ふせんことを欲したり。財用を豊かにして以て其費を助けんことを欲したり。而して之を行るに猛斷果決を以てせんとせり。顧みて舉朝の人を見るに盡く彼れの欲する所を輔けんとするものに非ず。彼れが大臣と語る毎に常に怫然として喜ばざるの色ありしは之が爲めなり。

安石は此煩悶の時期に於て神宗の望を屬したる唯一の人物なりき。彼れが操履の純潔なると其の議論の高尙なると自負の極めて高きとは神宗の看取する所となれり。而して其素論も亦頗る神宗と合する所ありき。

彼れは嘗て仁宗に上るの書を作りて時事を曰へり。而して其の論旨を要するに法度を立てて以て衰壞の俗を變じ、國本を堅くして富強を計り、人材を養成して以て時務を助けんとするに在りき。彼れは法律の有効なるを信ずるものなり。殆んど法律萬能論者なり。

「君子の政を爲す、善法を天下に立つれば則ち天下治り、善法を一國に立つれば一國治る」(周公論)とは彼れの信ずる所にして、紀綱一たび立ち法律明かに定まらば天下の事掌上に轉らずに足れりとは彼れの深く信ずる所なりき。彼れは亦法律を以て天下の貨財を調理按排するを得べきことを信せり。

「臣、財利に於て固より未だ嘗て學ばず。然も竊かに前世治財の大略を見たり。蓋し天下の力に因りて以て天下の財を生じ、天下の財を取つて以て天下の費に備へば、古より財を治むる未だ嘗て以て天下の公患と爲すに足らざる也。患る所は財を治むる其道なきのみ」。

(上于仁宗皇帝書)

彼れは急進論者なり。彼れは今日法を施して明日効を見るべしと信ずるものなり。彼れは又自ら此の如く信ずるを得る理由を有したりき。彼れ嘗て明州鄞縣に知たりし時、書を読み文を作るの際、二日に一たび縣事を始め、堤防を作り、汚地を填め、穀を民に貸し、息を立て、以て償ふて新陳相易はら

しめ、學校を興し、保伍を嚴にし共に其効を得たり。精力過絶なる彼れの監督と、操履高潔なる彼れの人品とは善く一縣を風化することを得たり。彼れは此故に其理想の必しも空言に落ちざることを信じたり。天下當さに法度を革め紀綱を振肅すべし、而して之を爲す唯斷の一字に在りとは彼れが書齋に學ぶ所に於ても、實地に經驗する所に於てもしか信せざるを得ざる所なりき。而れども仁宗は彼れの理想としたるが如き君主にてはあらざりき。大なる物を動かすには大なる力を要し、長き時日を要すとは仁宗の深く信ずる所にして其政策は寧ろ現状維持に在りき。是れ彼れの堪へざる所なり。彼れ嘗て仁宗の末年を評して曰く、

「祖宗以來、忠厚仁慈を以て天下を治む。嘉祐の末年に在つて天下の事、舒緩萎靡して振はざるに似たり。當年の士大夫、亦自ら之を厭ふ。」

所謂天下の事、舒緩萎靡して振はざるに似たりと云ふものは是豈明かに仁宗の因循爲すに足らざりしを罵り盡したるものに非ずや。彼れは北より、西より異人種の壓迫を蒙りつゝ、ありし當時に於て國家百年の大計を劃定せずして其日、其日を空しく過ごしつゝ、ありし仁宗に對して不平を懷かざるを得ざりし也。是豈神宗が最も要求したる人物に非ずして何ぞ。

神宗嘗て景福殿の庫名を改め、自ら詩を製して以て之に掲ぐ。其詩に曰く、

五季失國。獮狁孔熾。藝祖肇邦。思有懲艾。爰設內府。基以募士。曾孫志之。敢忘厥志。

彼れの志は未だ嘗て一日も富強に在らざることなし。而して滿朝一も彼れの望に添ふものなくして獨り安石ありしのみ。宜なる哉、君臣魚水の交、殆んど佛氏の所謂前生因縁の如きものありしや。

此の如くにして彼れは政府に入りて事權を一身に集むるに至りき。

(五)

彼れの新法なるものは之を要するに現時の國家社會主義なるものと其原則を同うす。其異なる所は現時の國家社會主義は其見を起す所、多くは大なる個人の横暴に對して小なる個人を保護せんとするに在れども彼れの新法は其見を起す所、國力を按排して外壓に應せんとするに在りしのみ。其法律制度を以て國民の生活を統括し、國家を化して組織整然たる自營自活の一機關とするに至つては則ち一也。

蓋し此見解たる決して新奇のものに非ず。社會の始めて形を爲すに當りてや其生活は共同ならざるを得ず。個人なくして家ありし時代より溯りて家なくして種族ありし時代に至れば人類は唯共同生活ありしのみ。彼等は同じ血に依つて結ばれたり。同じ城郭若しくは狭き地盤に住めり。此時に方りて何ぞ所謂彼此の差別あらん、何ぞ所謂個人及び個人の財産なるものあらん。一種族の財産は一種族自己のものにして種族の一股たる一人のものに非ざりし也。既にして時世漸く降りて大國を爲すに及ぶと雖も古人の心胸に浹治したる共同生活の原則は猶依然として其勢力を失はず、國民の貨財は猶國家の

自由に按排し得べきものとして認識せられつゝありし也。所謂周官の作者と前漢の財政家桑弘羊の如きは要するに斯の如き時代の思潮に育てられたるものに過ぎず。語を切にして之を言へば東西古今の歴史を通じて、此の如き思想は多少の消長ありと雖も未だ嘗て存せざるの日なかりし也。彼れは此舊き原則を當時に應用して所謂新法なるものを肇めんとしたるのみ。

(六)

國家既に異人種の壓迫を感ず、先づ要するものは兵力也。兵力の背後に無かるべからざるものは財力なり。而して安石は其國家自營論を以て國家の財力を養はんとせり。彼れは歷朝の政府が久しく行ひたる常平法なるものあるを知れり。政府の資本を以て米穀の市場に干渉し、穀の賤き時は之を糶し、穀の貴き時は之を糴し、以て市價の兩極に奔らんとするを防衛するものなり。彼れは此の如き消極的干渉より一轉して、更に政府自ら田穀に對して資本を貸すの事業を營まんとせり。所謂青苗法なるものは是れなり。彼れは此方法の決して彼れの新案に非ざることを主張したり。彼れは曰へり。是れ周禮に所謂「國服息を爲す」の説に基くものなりと。彼れは此業の古聖人に基くことを主張したる也。而して彼れは此案必ず實行せらるべきものたるを確信し得べき他の理由を有したりき。彼れが嘗て明州鄞縣に知たりしや、彼れは穀を民に貸し、息を立て、以て償ひ、新陳相易はらしめ、而して遂に弊なきを得たりき。彼れは既に之を一縣に行ふを得て、人民の之を便とするを知れり。彼れの自信に強きや

何ぞ之を天下に行ふの勇なきを得んや。聖賢の書既に之を記し、自己の經驗既に其利あるを證す。彼れたるもの何ぞ之を實施するに躊躇するものならんや。彼れは春に於て人民に錢を貸し半年の内に二割の利を納めしめ、秋に至つて再び放資し、年の終に於て更に二割の利を納めしめ、人民をして資本の運轉に依りて利する所あらしめ併せて政府の收入を加へんとせり。民間に於ける金利の極めて貴き當時に於ては二割の利息は固より輕率なりと曰ふべきものなりき。彼れは富民の高き利息が人民を苦めつゝあることを知れり。富民の高利に代ふるに政府の低利を以てするは人民の苦痛を和らげ利便を増すものなりと解釋せり。且其借るを願ふと否とは人民の自由に任ずるものなるが故に何の弊害も之に伴はざるべきを豫想したり。彼れの所謂「善く財を理むるものは、賦を加へずして常用足る」と云ふもの即ち是なり。彼れは此の如くにして先づ國家自ら人民の財囊を管掌するの方策を取れり。所謂彼れの新法は此の如き國家自營論なりき。彼れは國家と人民と各其事業を分ち、國家は主として消極的の方面に於てのみ生産事業に干渉せんとしたる當時の政策を一變し、國家自ら積極的に生産事業を營むの策を取れり。彼れは西、東、南の諸外國と交易せんが爲めに市舶司を置き國家自ら貿易に従事し、且其貿易の料として銅錢を用ゐたり。彼れは使を全國に遣はして農田水利を觀察せしめ、諸州に於ける古來の陂塘を修築して水を蓄へ田に溉がしめんとせり。是れ政府自ら農事を營むものなり。彼れは一定の官吏を諸道に置き之に給するに一定の資本を以てし、時々貨物を交易し、其地方に於て

價の貴き物に易ふるに價の賤き物を以てしめ、全國到る處に於て最も廉價なる貨物を政府の所有とし、必要に従つて之を輸送せしむるの策を取れり。彼れは之を均輸の法と名づけたり。是れ政府自ら商業を營むものなり。彼れは京州に市易務なるものを置き商人の諸道より貨物を携へて至るもの、爲めにそれを擔保として錢帛を貸すの制を立てたり。是れ政府自ら倉庫會社若しくは荷爲替業を營むものなり。所謂市易の法なるもの是也。

彼の此政策は要するに租税以外に於て國家の收入を増すべく、國家をして自ら生産業に従事せしめんとするものなりき。若し國家をして封建時代の如き小區域のものならしめ、執權者の個人的勢力をして此區域中に浹治するを得せしめたらんには斯の如き國家自營論は必ずしも空しきユトピアとして終らざりしならん。或は現代の如く交通機關の發達完全にして國家の神經中樞と其末梢との交感、極めて鋭敏ならしめば是亦必しも行はるべからざるものならざりしならんと雖も、彼の時處位に在つては其實一の大膽なる夢想たるに過ぎざりき。彼れは到底理論家也。語を切にして之を曰へば夢みる者なり。彼れは理論と事實との間には商量すべく、打算すべく、加減すべき幾多の磨擦と障害あるを知らざりしなり。若し彼れにして史家の歎賞を價すべきものあらば、そは唯彼れの企畫の極めて大膽なると、極めて論理的なりしとの二のみ。若し彼れの議論を以てアトリーの共和政治論の如き一個の假想的論文に過ぎざるものとせば、固より大なる精神的産物の一たるを失はざりしならんと雖も、經世家としては

彼れは餘りに性急に、餘りに偏理なりしなり。果然彼れの築きたる大計畫は空中樓閣として崩れ去らんとせり。彼れは青苗の法に於て富豪の兼併を抑へ、國家の金を以て人民を救済し併せて國家の利源を殖やさんとせり。彼れは當時に於ては極めて低利なる二割の利息を以て人民の肩を弛べんとせり。此法たる其主義に於ては固より取舎一に人民の自由に任すべきものなりと雖も有司の常として政府の鼻息を窺ふて強て民間に放資せんとするの傾向ありしは勿論にして、而して政府も亦た有司の多く放資するを以て其功と爲すを免れず。是に於てか人民は已むを得るに非ずして之を用ふるものあり、之を請ひ若しくは之を納めんが爲めに往來の費用を要し、加ふるに當該官吏の門戸に賄賂を要するもの少からず。是れ名は二割の利息なりと雖も、其實を算する時は實に七八割の高に上るものなり。是豈仁恤の名を假りて其實は人民を蠶食するものに非ずや。且民間に於ける貸財の集散には久しき慣習あり、放資と回資との間には一定の長日月を要せざるを得ず。今や一旦放資したる曉には容易に回收し難き資本を以て民間に與へ繼かに六ヶ月の短期を以て其回收を計らんとす。何を民間の騷擾を致すとを免れんや。而して當時の富豪たるもの餘儀なく政府の金を借りて、而して之を運用せず、單に庫中に藏し私錢を出して利息となし以て之を政府に納め、繼に誅求を免るゝもの多かりしは是れ實に已むを得ざるの勢なりき。宜なる哉、蘇軾が痛撃を此新法に加へて「出納之際、吏緣爲奸、雖有法不能禁、錢入民手、雖良民不免非理費用、及其納錢、雖富民不免違限、如此則鞭箠必用、州縣之事不勝煩矣」と曰ひ

たるや。彼れの駁撃は着々として事實に適中せり。畿内の諸縣は青苗錢を督索すると急なるが爲めに民間或は桑を伐つて薪となし錢貨に易へて以て一時の急を濟ひしものあり。其他は即ち知るべき也。青苗法の失敗此の如し。其他の諸法に至つても共に均しく失敗たりしを免れず。古陂堤を新築して水利を起すの説の如き一見甚だ有益なるもの如くなりと雖も、此等の古陂堤は久しく廢物として人民の冒耕する所となり舊形を存するもの甚だ多からず、人民皆現狀に満足しつゝありしものを舉げて遽かに其舊態に復せんとす、加ふるに訴訟を好み他人を傷けんとするものあり、乃ち名を陂堤を設くるの善きに假りて人の田園を破壊せんとするものあり。是れ實に民間の安靜を破るものに非ずして何ぞや。加之均輸の法の如き市易の法の如き政府自ら商業を營むものに至つては理論と實際の懸隔更に之よりも甚しきものあり。蓋し商業の事は一種の専門的技能を要す。蘇軾の所謂「其買也先期而予錢、其賣也後期而取直、多方相濟、委曲相通、倍稱之息、由是而得」と云ふもの實に是れなり。今や民業に縁遠き官吏をして此事に當らしめんとす。何ぞ其れ交易の機を失し、利害の略を過ち、多大の損失を國家に與ふることを免れんや。況んや政府の事業には官局あり、吏員あり、俸祿あり、何ぞ民業の簡易輕捷なるに如かんや。是れ其計善く、其算當れりと雖も之を事實に施せば即ち失敗たるを免れざりし所以なり。且市舶司を置き外國と貿易するに當りて祖宗の成法を破り銅錢を用ひて貿易の資となせしが如き、經濟政策として之を曰へば必ずしも非難すべきものに非りしと雖も、之が爲めに銅錢の缺乏を生じ物價の騰貴を來たしたるは彼れの政策を非難するものが其數多き惡政の一として數ふるに躊躇せざりし所なりき。

此の如くにして彼れの國家自營論は美事に失敗せり。他の語を以て之を曰へば交通機關の完全ならず、國家の神經組織が周密敏捷ならざりし時代に表はれたる總ての國家自營論の均しく失敗したるが如く失敗せり。然れども彼れは自ら其失敗たるを覺らざりき。彼れは自己の失敗たるを覺らんには餘りに自信に過ぎたりき。彼れは是に於て神宗を動かして己に異なるものを要路の外に排斥し、自己に黨する新進の士を擧げて以て其爪牙と爲し、直線的に猛進して其經營を行はんとせり。左なきだに黨派の弊多かりし當時の士流は彼れに與するものと與せざるものとの二に分れて相争へり。彼れは神宗の信任最も厚かりしが爲に堅く其主張を把持しつゝ進めり。彼れは其國家營業論に依りて貨財の増殖を計ると共に一面に於ては兵を強うするの策を講じ、他の一面に於ては人才を養成するの策を講じた。何となれば四夷を鞭笞して以て中國を強くし邦財を阜蕃にして以て其費を佐くるは彼れと神宗との素志なればなり。

蓋し宋の兵は實に左の四種に分れたり。

禁軍

天子の衛兵にして京師を守り、征戍に備ふるものなり。國初の時、鎮城の饒勇を選び部して闕下

に送り以て禁衛に備へ其餘は各本城に止まらしむ。是れ地方の兵權を割きて中央の兵權を増さんが爲めなり。而も後世に至つて兵徒らに多くして國財を費すこと少からず、天下の兵、耕さずして畿輔に集るもの數十萬を以て計る。此輩皆給を國費に仰ぐのみならず、三歳を一期とし、往來循環して郡縣に屯するもの數百人亦禁軍より出づるを以て平時に在りても行軍數千里に亘るものあり、月廩歲給の外、日に其芻糧を給す。其費費られず。且此輩行軍必ず家を携へて行く、其柔弱爲すことなき知るべき也。

廂軍

諸州の鎮兵なり。各其州の本城に隸し専ら使役に給す。若し禁軍を以て徳川時代の大番役に比すべくんば廂軍は即ち鎮城に隸屬したる與力同心の徒に比すべきものにして即ち土着兵也。

郷軍

戸籍を基礎として募集したる兵士にして即ち民兵なり。邊要の地に於て團結訓練して以て防守を掌らしむ。

蕃兵

是れ外蕃接壤の地に於て歸馴の夷種を訓練し隊伍を分ち、旗幟を給し、堅壘を營ましめ以て外國の侵入に備ふるものにして其法は郷軍に準ず。

之を要するに宋の兵制は兵を養ふこと多きに過ぎて訓練却つて精しからず徒らに國財を費すに在り。是れ實に安石の看取したる所なりき。然れども彼れは財政に於けるが如き根本的改革を之に向つて加へんとは試みざりき。彼れは唯外國の侵入を蒙り易き邊境に於て教場を設け日に金鼓を鳴らし、人民をして戦法を學ばしめ、且之を組織して郷黨相保護するの道を設け、且郷黨の費用を以て馬を養はしめ、馬死すれば則ち價を償はしめたり。斯の如くにして邊境の人民を慣らすに兵事を以てし徐ろに其遠征の志を遂げんとするは彼れの深く自ら意を用ひたる所なりき。

然れども彼れの事業に於て最も注意すべく最も人の視聽を聳かせしものは其兵制の改革よりも寧ろ人才養成の點に在りき。蓋し宋の士を取る、學館よりするものを生徒と曰ひ、州縣よりするものを郷貢と曰ひ、天子自ら詔して非常の才を待つ所以のものを制舉と曰ふ。而して其試むる所は多く詩賦を用ふ。彼れ謂へらく是れ其實才を得難き所以なりと。嘗て仁宗皇帝に上りて此弊を論じて曰ひき。

不肖なる者は苟も彫蟲篆刻の學を能くすれば以て公卿に進み、才の以て公卿と爲すべきものは補なきの學に困しんで此を以て巖野に老死するもの蓋し十の七八なり。

と。詩賦を主として士を取るの法が實才を得がたきは識者の當時に於て悉く異論なき所にして胡瑗の湖學が聲律浮華の時世學問に反抗して經義と時務とを主としたるも、歐陽修、蘇老泉の徒が古文を唱道したるも固より其反動に外ならず。殊に富弼の如きに至つては更に此弊習を極論し、民間に盜賊を

生じ、國家の命脈を危ふするものは實に此に在りと論じたり。彼れは曰ひき。

訪ひ得たり。多く兇險の徒あり。始めは初めて書を讀み、即ち舉に應せんと欲す。其長立するに及んで學ぶ所成らず。稍文を能くすと雖も、舉業に近づかず。仕進に路なし。心常に快々たり。頗る史傳を讀み粗ぼ興亡を知る。以て兵書を討尋して文藝を習學するに至る。是に因りて胸を張大にし、遂に權謀を生じ、災祥に遇ふ毎に、便ち竊に議する所あり。自負して圖る所は甚だ大なり。州縣を蔑視し、既に舉に應せず又別に進身を營まず。往々名を晦まし姓を詭り、跡を潜め、乃ち其徒と盜賊を爲す。云々

是れ實に一部水滸傳の説明なり。支那二十二朝革命史の源頭を探り得たるものなり。虛詞空文を以て士を取るの弊此の如し。安石は之に向つて一大醫療を試みんとせり。彼れは専ら詩賦を以て士を取るの制を改め、經義を以て士を取らんとせり。彼れは此點に於て支那の骨髓たる科擧の歴史に一生涯を開きたる者なり。後世所謂經義なるものは實に彼れの首唱に出でたり。彼れ謂へらく春秋の殘缺讀むべからざるを除くの外先王の道は經に在り、人才を養成せんとせば彼等をして詩賦に勞したる心を轉じて意を經義に用ひしめざるを得ず、少壯の時應さに天下の正理を講究すべし、乃ち門を閉ぢ詩賦を學ぶ、其朝に入るに及んでは學ぶ所用ふる所に非ず、人才を敗壞する此法に過ぎたるはなし、宜しく聲韻對偶の文を除き去り、學者をして意を經術に専らにせしむべきのみと。此の如くにして科擧の法は一

變せり。是れ實に大事業ならざるを得ず。數世紀の因習に向つて大打撃を與へんとするもの固より彼れの如き急進的手段に待つあるなり。然れども不幸にして彼れは此點に於ても理論家に免るべからざる過失を爲せり。一言にして曰へば彼れは一の極端より更に他の極端に奔りたり。彼れは獨り經義を以て士を取るの法を定めたるのみならず、更に自ら其子嬰、其徒呂惠卿、升卿と共に詩、書、周禮三經を撰び、模印して天下に頒ち凡そ士人の科擧に應ずるもの一語以上新義に非ずんば用ふるを得ざらしめたり。彼れは之に依つて以て天下の人心を統一し學風を一變し得べしと思へり。然れども事實は全く之に反したりき。科擧に應ずる書生は徒らに新義の章句を暗誦して機械的に之を摸擬するのみにして其義理の如きは殆んど解するもの少かりき。彼れは此點に於ても失敗者たるを免れざりしなり。

(七)

此の如くにして彼れの事業は大失敗に終りたり。始めは反對黨の痛撃を蒙り、後には門下生に背かれ、一たび去り再び入り、遂に意を得ずして空しく雄志を懷きて没し、宋の政策は更に舊時の微温に歸れり。外國の壓迫は依然たり。制度の壞弛は依然たり。彼れと神宗とのモルヒネ注射的の治療法は効よりも寧ろ害多くして止みたりき。然も彼れの計畫が巨人的にして其論理的統一を有するに至つては眞に後人の敬慕を價するものあり。理想は現實となるの期なきに非ず。彼れは理想を講きて現實を薙り得ざりしものなり。而も余は天下後生必ず彼れの理想を復活せしめて現實を薙り得べきことある

を信ずる也。

愛山文集

五七二

(明治三十六年六月—八月獨立評論)

尾上菊五郎を論ず

日本の演劇界は梅幸氏の死によりて其碩果を失ひたり。余輩は彼に就きて多くを知るものに非ず。されど彼の技藝に於ける忠實なる勤務に至つては以て次の時代を教ふべきものなきに非ず。請ふ余輩をして少しく彼に就て論ずる處あらしめよ。

彼は最も善き俳優たるべき系圖を有し、最も善き俳優たるべく教育せられたり。夫れ小道と雖も必ず見るべきものあり。況んや演劇の如き極めて複雑したる藝術に於て、何ぞ素養なく、教育なきもの、能く爲す處ならんや。大なる淵は深き水あり。大なる天才は祖先の勤勞を累積したるものなり。菊五郎は之を外祖父にしては所謂三代目菊五郎、世の稱して梅壽といふものあり。之を父としては四代目菊五郎あり。之を伯父としては龜藏あり。彼は此道に於ける最上の位置を占めたる家庭に生れ、此道に於ける最も嚴格なる教育を受けたるものなり。

彼は四歳にして始めて乗物町の藤間よし子につきて踊の稽古を爲せり。所謂手解きなるものなり。更に七歳にして花柳壽輔に就きて學べり。彼れ當時の事を人に語りて曰く、我等の親は師匠に囑して云ひき。我等の子はいかほど叱らるゝもいかほど謹めらるゝも、そは卿等に一任せん、要は唯藝道の十分に練磨せられんことに在りと。されば師匠も亦能く父母の意を體し、其教育は極めて嚴格なりき。彼れは五月幟に用ふる貝摺りの手槍の先きを去り鞭となし、舞臺の前に坐して子弟の踊をなすを監視し、若し意に適はざるものあれば、數ば鞭を以て弟子の脚間を割りて、其法の如くすべきことを叱りたることあり。弟子若し倦み外を顧みることあれば彼れは鞭を以て舞臺を鳴らして之を驚かすことあり。弟子の爲す處彼れの思ふ處に合せざれば、幾回も踊らしめて自ら満足するに至らずんば休せざるのみならず、其怠りて命を聽かざるものは家に拘留して歸さず、必らず其改悔して罪を謝するを待ち始めて始めて放ち去らしめたりと云ふ。其嚴厲なること知るべきなり。良工は一朝にして生れず。今や劇界の模範として世間に艶稱せられたる梅幸氏も其少年の時に於ては此の如き苦しき訓練の下に育て上げられしなり。

彼又嘗て人に語りて云ひき。文久元年余年十八の時、當時同じく青年の俳優にして嬌名江戸満街を壓したる澤村田之助と共に舞臺に上りたることありき。狂言は菅原傳授手習鑑にして余は櫻丸を演じ、田之助は櫻丸の妻たる八重を演せり。當時余等の年少にして經驗に乏しきや、徒らに俗客の喜を取らんと欲し、滿腔の匠氣禁ずる能はず、床の上のチヨボに乗じて踊の如き態を爲したり。看客は喝采したり。余等は益々得意になれり。既にして幕を下して樂屋に至れば、伯父龜藏余を罵りて「最後の醜態は、何んと云ふ醜態だ。あれちやア、阿爺の位牌を汚すやうなものだ」と云へり。依つて田之助と共に

に老功なる團藏（先代の）に至りて質すに、團藏曰く櫻丸夫妻は其主の女と齋世親王との戀を取持ちたるが爲めに奇禍を其主に被せたるものなり。之が爲めに主たる菅丞相は謀反の嫌疑を蒙りて筑紫へ左遷せられたり。これが爲めに主家は離亂せり。斯の如き奇禍を惹起したる彼れなるもの何ぞ恬然として世に在るを得んや。彼は固より一死を期したりしなり。然れども彼の遂に死せざりし所以のものは何ぞや。唯父白太夫ありしが爲めのみ。彼れは無事に老父の賀を終り、然る後自殺して其大なる過を謝せんと欲し、一夜天未だ明けざるに、人目を忍びて白太夫を訪ひ、今日の賀の終りたらば男らしく自殺して主家に謝すべきことを語れり。白太夫も之を諒とし彼れを一室に隠し置きたるものなり。夫妻の會見は實に此際に在り。彼等の情唯應に眞面目なるべし。唯應に一死を期すべし。唯應に永訣を念とすべし。猶何の演劇的にチョコポに乗じて踊るが如きの輕佻あるべけんやと。依て悉しく院本の情趣を語る。二人大に感悟する處あり。乃ち去つて三味線引き市作を訪ひ、相與に其家に於て同齣を演ずること凡そ三十回に及んで夜即ち曙けたり。二人乃ち睡らずして翌日舞臺に上る。爲す所ただ前日に異なり、龜藏乃ち首肯せりといふ。是れ唯だ一例なり。而も當時梨園の先輩、其子弟を砥礪する斯の如きものあり。魯に君子ありしが爲めに有徳の才を成就せしこと多かりしは孔子も亦嘗て之を稱せり。彼等は其交遊、族黨を以て一種の學校となせり。其俊才を陶冶して尤物となすに非ずんば止まざるなり。宜なるかな、菊五の遂に盛名を膺り得たるや。

然りと雖も菊五の成功は獨り其境遇に負ふ處ありとすべからず。余輩を以て之を見るに、彼れをして雄を梨園に稱せしめたる祕密は蓋し左の三項に外ならず。

一、彼れの自負自任の氣質

二、彼れの模倣力

三、彼れの忠實

請ふ試に之を論せん。

彼れは太夫元の家に生れたるものなり。生れながらにして第一流の俳優たるべく期待せらるべき家庭に人と爲りたるものなり。此境遇は彼れをして自負自任の氣質を養はしめたり。嘉永元年正月彼年五歳「澤瀉鐘長者」の萬壽丸を演ず。樂屋に使役する理髮師あり。渾名ガラ藤といふ。彼れガラ藤をして髪を結はしむ。ガラ藤其小兒なるを侮りて髪を結ぶ極めて丁寧ならず。爲に鬚は崩れて散らし髪となるに至れり。彼れ大に怒り、衆の止むるを聽かず、直ちに家に歸り去りしを以て樂屋理髮師の一團（彼等の所謂床山なるもの、一團）大に驚きガラ藤に代りて罪を謝し、纔に事なきを得たりといふ。

彼れ又嘗て少年たりし時當時の例に従ひ父に代りて一日町奉行所に廻禮す（當時太夫元は五節句、盆正月には兩奉行、三年寄等を廻禮するの習慣あり）時正に春色駘蕩として八百八街處として花ならざるは無かりき。彼はアンボツ駕籠の中に坐し、傍らに小爐を置きて、手を其上に載せ居たりしが藤助な

る芝居者あり。彼れの駕籠に従つて来る。所謂附添なり。彼れ煙管に火を點せんとし乃ち手を駕籠の戸に挿して爐に觸る。菊五、忽ち其手を把つて曰く「オイ藤助、阿爺おぢさんでも斯んなことをするのか」と。藤助大に驚きて罪を謝し、劇場に入るを禁せらるゝこと三日にして纔に赦さるゝを得たりと云ふ。此二話は彼れの自ら語る處なり。諺に云はずや「三つ兒の魂百まで」と。彼れは少年の時より自己の品位を愛護すること此の如きものありしなり。夫れ自信は品性の支柱なり。英雄の千軍萬馬を動かすも、其中心は一個の自信のみ。文人の筆を揮うて思想界を開拓するも、其頼つて以て指針とするものは唯自己の力量を信ずるに在るのみ。技藝の人に於てのみ何を獨り然らざらん。之を聞く彼れの少年にして舞踊を學ぶや、其稽古の仕方は寧ろ狡猾なる方にして師匠の二足にて廻る所を一足にて廻るが如き風ありしかば數ば其の叱責を蒙りたりと。其狡猾にして自己の意を以て別に新意を出さんとするもの獨闊乾坤の氣、此の時既に端緒を發すと謂つべし。又聞く彼れは少年の時より容易に人の説を首肯せざるの癖あり。其見る所を説き、其疑ふ處を質し、眞に自ら満足するに非ずんば即ち休せざりきと。カーライル曰く自信は創思の母なりと。彼れは自ら信せり。自ら自己の力量を頼めり。是れ其遂に第二流たるに甘んずる能はざる所以にして、鍛鍊百端、奇思妙想の泉の如く湧きし所以亦實に此に根ざさずんばあらず。

過を見て仁を知る。余輩は喧嘩好なりし青年の彼れを懷ふ毎に、其江戸兒なることを自負し、其第五世菊五郎たることを自負し、傍若無人、昂々焉として世上を横行濶歩したる態度を懷ふ毎に、未だ嘗て彼れ亦一個の英雄兒たるを感せずんばあらず。明治九年義兄坂東彦三郎、彼れの名古屋興行中なるを誘ひ將さに大阪に同行せんとす。彼れ曰く「私も初めて大阪に行くのに名古屋から直ぐに焼出され同様の姿で行くのは好ましくない。第一江戸兒の面汚しだから、行くなら一旦東京へ歸つて、二日なり、三日なり、東京に寢て、新橋魚河岸四日市やら各區の組合に大阪へ行くと云ふことを話して、跡からでも宜いから幕の一張づゝも送つて貰はなくは行くことは出来ない。今度の處はさういふ都合にしてくれるなら一緒に行かうが、始めて行く大阪に餘りケチな眞似も出来ない」と。昔しは徂徠先生は江戸を以て霸氣興王の地なりと云へりき。菊五の霸氣や眞に江戸に生れたる江戸兒なり。大なる水は大なる船を浮べ、大なる氣象は大なる藝術を生む。余輩は菊五が成功の眞祕訣は實に此に在りしことを疑はざるなり。思ふに倔强人に屈せざるは彼れの家系の特質なり。彼れの外祖父梅壽の若さや、露のしたゝるが如き美少年なりしを以て人往々擁護するものあり。梅壽怒りて思へらく、前髪未だ除かず、人の我を侮る所以なりと。乃ち走りて理髮師に至り直ちに自ら元服したりと云ふ。逸氣挫けず、我信じ、我爲す、他人の管する處に非ず。菊五の家系が有する血液斯の如し。藝術は末なり、氣象は本なり。余輩は所謂音羽屋の素養深くして且遠きものなるを信せざること能はず。然りと雖も彼が滿都の耳目を一身に集め、彼の技を見るものをして必ず泣き、必ず笑はざるを得ざ

らしめたるものは、彼の技藝に在り。而して彼れの技藝の特質を言へば人生の悲喜歡哀、人間の性癖慣習を寫して直ちに天然に迫らしむるに在り。他語を以て之を言へば幻影を人目に供するに在り。眞實なる模倣力に在り。均しく模倣なり。而も拙なるものあり、巧なるものあり。皮毛を寫して肉に達せざるものあり、肉を寫して神に入らざるものあり。菊五の如きは既に皮毛を寫し、更に肉を寫し、遂に寫して神に達したるものなり。彼れをして此に至らしめたる所以は何ぞや。余輩をして更に其然る所以を求めしめよ。

余輩の最も驚異する所は彼れの形像に對する強き印象なり。彼の頭腦は早取り寫眞の如し。一たび其眼に映じたるものは必ず光輝ある輪郭を以て明かに彼れの腦裏に刻せらる。此點に於て彼の頭腦は眞に近代の珍品なり。彼れは五六歳の時に梅壽の演じたる死神の戲を見たりしが六十に垂んたる今日に至りて當時の事を語りて曰へり。「狂言は多分五十三驛ぢやなかつたと思ふので死神の出る場は向ふに草土堤が有つて上手に材木が建て掛けてあるが、俗に云ふ材木河岸とでも云ふやうな所で、下手に柳の木がありました」と。彼れは又八歳の時に見たりし梅壽の模型を寫して「四谷怪談」を演じたり。又青年の時看客中に美人ありしことを、老後に至りて語りて云ひき。「何でも夏の事で高土間に御袋と二人連れで來てゐる十七八の娘の子がありました、是れが非常の美人で、其日の見物の中では一番眼立つて見えたのです。服装は大して善くないやうでしたが、白の十の字飛白のやうな物に、帯は淺黄

縋子でもありましたか、光つて居たのを覚えて居ります」と。余輩は此の如き精細にして而も久しきに堪ふる印象の強きことを驚異せざるを得ず。それ他人の眼に幻影を生せしめんとするには、自己の眼に於ては更に明白なる幻影なきを得ず。此點に於て詩人の成功は俳優の成功に似たり。彼等は其見る所に於て明かなり。是れ其の寫す所、若くは擬する所の直ちに眞に迫りし所以なり。思ふに彼の斯の如き記憶力は一部は天稟にして一部は素養に在り。彼れは其業とする處に専らなりしが爲に彼れの驚異すべき印象を攫むの力は益々發達したりしのみ。

模倣力の依つて生ずる處は印象を攫む力の強弱に在ること此の如し。而も獨り是のみを以て足れりとする可からず。彼は嘗て梅壽の逸事を語りて云へり。梅壽嘗て四谷怪談の阿岩に扮し、傍人某に問うて曰く、「どうだ怖はかアないか」と。某は常に梅壽の傍にありて其扮装を見るに慣れしを以て固より恐怖の感なし。乃ち笑つて答へて曰く「怖かアありません」と。梅壽忽ち拳を固めて某の面を撃つて曰く。「怖いと云へ」。曰く「デモ私は拵らへから何から手傳つて毎日〳〵見て居ますから少しも怖くありません」。梅壽憤ること益々甚し。既にして論すが如くにして曰く「何でも構はないから怖いと云へ」と又一拳を某の頭に加ふ。某其故を解すること能はず。梅壽夕に至り家に歸り、某を一室に招きて論して曰く「何故最前怖くないと云つた、假令怖くなくつても怖いと云へ、さうしないと化が引立たない、若し人が聞いたら毎日毎日手傳をしながらも怖くつて〳〵堪りませんと云へ」と。此逸話は眞

に善く模倣力の秘密を語るものなり。模倣の秘訣は他なし。自ら其人と爲りたるが如く感ずるに在るのみ。恰もメスメリズムを施されたる人が、卿は頼朝となれり、自重せよと言へば、自ら頼朝となりしが如く感じ、卿は今水を渡れり、裳を掲げざるべからずと云へば、實に水を渡るが如く感じて而して裳を掲ぐる如く、擬するもの自ら擬せらるゝものに化したるを感ずるに非んば何ぞ模倣の妙を極むるを得ん。小説を読むに戀人は互に其聲音態度を模するものなりと云へり。之を愛し、之を信じ、之を慕ふ、何ぞこれに類せざるを得ん。梅壽が阿岩に扮し傍人をして必らず怖ろしと信せしめんとしたるもの亦唯此中の消息を解せしが爲めのみ。彼れは傍人之を怖ろしと信じ、世人之を怖ろしと信じ、自ら恐ろしと信ずるに非んば其技も亦人を動かすに足らざることを知れり。思ふに菊五郎も亦善く此三昧に達したるものなり。彼は自ら其頭髮を染むるとを語りて云へり。僕が毎日頭髮を染むるを以て人或は六十猶痴態を脱せずといふものあらん、而も是れ僕の業務然らざるを得ざるもののみ、僕年既に老す、而して少年を扮せんとす、鏡に向ひて鬢の白きを見る、中心何ぞ忸怩たらざるを得ん、此氣頓挫す、技藝遂に振はざる所以なり、凡そ曲中の人物に扮する時は先づ自ら其人となれりと感せざる可からず、是れ技の神に入る所以なり、僕の老年猶墨を以て髪を塗らざるを得ざるもの之が爲めのみと。此點に於ては彼も亦團十郎と同じく所謂腹に於て藝を演ずるものなり。團藏が彼れに教ふるに先づ院本の大意を知り其各人物の情趣を解するに非ずんば俳優として成功する能はざることを以てせしもの此に至つ

て驗ありと謂ふべきなり。然りと雖も彼れと其唯一の勁敵たる團十郎とを比較すれば彼の主として意を注ぐ所は扮装に在り、背景に在り、色彩に在り、團外物に在り、語癖に在り、動作に在り。一言にして云へば彼れは外物に依りて中心を實現せしめんとするものなり。更に詳しく之を云へば御客の眼前に或る光景を呈し、自ら其光景中の中心的形象となるに在り。之を團十郎が餘り多く扮装に注意せず、餘り多く背景に頓着せず、餘り多く色彩に頓着せず、唯其の擬する者の意氣精神を寫さんとせるに比すれば一は物より入りて心に至り一は心より出で、物に達するの別ありと云はざるを得ず。夫れ境遇、心を作る乎、心、境遇を作る乎は哲學者の問題にして又藝術家の問題なり。余輩は日本の二大俳優がローマンチズム、リアリズムの區別を解するものに非ざるを知る。されど不思議にも團十郎は自らローマンチズムを代表し、菊五は自らリアリズムを代表せり。彼等は固より審美學の學生に非ず。而も彼等の爲す處は自ら審美學の規矩に合するものあるは蓋し鍛錬の功のみ。菊五は既に生れながらのリアリストなり。彼の重を彩粧に置き、背景に置き、色彩に置き、語癖に置き、動作に置くもの勢已むを得ざるなり。世菊五を稱して凝性なりと云ふ。凝性とは何ぞや。亦唯彼れのリアリストたる傾向のみ。彼れの舞臺に臨むや、一物も其所を得ざれば安んずること能はず。彼れの人物に扮するや其性癖態度を擬し、一舉手一投足の微も亦相似ずんば休せず。彼れ嘗て髮結藤次を演じたることを語りて曰く「髮結藤次をした時にも心易い髮結に就いて髮結の癖と云ふことが

あるだらうから、一つ教へて呉れと云ひますと、格別斯うといふ癖も御座いませんが、唯だ左の袖ををりく返へすのが髪結の癖で、是は當時の床屋の職人はやりませんが、昔し髻に結つて居た頃には襷を掛けずに一寸、髻鬢など剃りますと袖が邪魔になる處から、をりをり袖を返へすのですと云ふを聞きまして之を舞臺に用ひ、甘輝の家へ暴れ込む時などにも矢張さういたしましたが、夫れを或髪結職人が見て能くまア細かい事にも氣の附いたものだ、舞臺へ出るとすつかり髪結床の主人になつて仕舞ふとは感心だと賞めて呉れた人がありました」と。彼れの手段實に此の如きのみ。

彼れ又左官長兵衛を演せんとするの意を語りて云ひき、「私の考では長兵衛の人物は餘り意氣でなく、ト云つてグツでないのですが、唯博奕と酒とが好きで稼業が嫌ひで始終ブラ／＼遊んで居るといふ人物で遣らうと思ふのです。能く職人には斯う云ふ人物があるので仕事に掛れば至つて腕は宜いが、情けるのが好きといふ癖の奴がある者ですから、夫を寫さうと思つてゐるのです。私の知つて居る人物に四十越して居まして、夫れでも女房も持たず、酒と博奕と女郎買に許り籍つて度々人を以て詫びをしては主人の處へ歸るといふ人物があります。其男杯も至つて正直で忠實に働いてゐますが矢張りさういふ癖があるので御座います。此長兵衛杯もさういふ風な男だらうと思つて居りますが、如何な者でしやう」と。

彼は其傍に在るもの、其日夕往來する者、其途上に逢ふものを取つて悉く其性癖を學び、其通用性を知

り、直ちに其舞臺に現出せしめたり。江戸兒は彼れの殆んど自然に近き模擬に依りて自己の寫眞を舞臺の上に見ることを得たり。何ぞ歡呼喝采して之を迎へざるを得んや。近松巢林子は上方兒の長所短所を模寫して之を戯曲に上げせたるが故に上方兒は之を好んで厭くことを知らざりき。菊五が江戸の寵兒たる所以のもの亦唯是れのみ。

之を要するに菊五は其天才に於て、其修養に於て、其技藝に於て固より名を成すに足りしなり。而も彼れは之と共に技藝に對する忠實を有したり。彼れの始めて腦溢血を患ひて稍々癒ゆるや曰く、僕不肖なれども第五世菊五郎の名を冒す、今後若し徒らに老して技藝日に拙ならば何の面目ありて祖先に對せん、舌を噛みて死するに如かざるなりと。

彼れ又自ら其幕間の長かりし所以を語りて曰く、人或は僕の劇を演ずる幕間の長さを尤む、而も僕唯心を舞臺の配置に盡すが爲めに然り、若し幕を開きて後一物も其所を得ざることあれば何ぞ全齣の調和を害し看客の屬望に背くことなきを必せんやと。既に天才あり、既に修養あり、而して更に斯の如き忠實あり。天下の梅幸を艶稱するもの眞に其故なきに非ざるなり。

時人論氏曰く余多く菊五の技を知らず、明治四十四年友人と共に歌舞伎座に行き、始めて其鹽原多助に扮するを見る。前後唯一回のみ。何ぞ菊五の技を品藻するの權ありと言はんや。唯聞く所に依りて以て説を爲すのみ。

(明治三十六年三月獨立評論)

市川團十郎論

菊五郎氏を弔ひたる余輩は今や團十郎氏を弔はざるべからず。舊日本の社會に適應すべく形を爲せし舊劇社會は今や其兩大關を失ひたることに依りて時代の既に彼等に背き去りたるを自覺せり。獨り時代が舊劇社會を通り越せしのみ非る也。團十郎の死は日本社會に於ける總ての舊式なるものが遂に盡く其具體的の豪傑を失ひて、新しき様式、新しき組織及び之を具體的にしたる新しき人物の發生を待ちつゝあることを示すもの也。

蓋し今日の日本に於て舊式の人物として數ふべきもの猶甚だ少からず。伊藤侯の如きも是也。大隈伯の如きも是也。彼等の學問は文明流の秩序あるものに非ざる也。彼等の思想は一部はよし近世的なるにせよ、他の一部は戰國策士的なり。彼等はスタインの説法に隨喜し、御備教師の公法論に耳を傾け、ベルリンの教授より憲法論の講釋を承はり、門下生よりイロストレーキ博士の國際法を聞きかたりして切りに外交の通をふり廻はし、憲法論の講釋を爲せども、彼等の皮を一枚剝がんには余輩は韓非子日本政記以上の智識と聰明とを認むること能はず。彼等は亞細亞の臺に歐羅巴の鍍金を爲したるもの也。彼等の素養に於て然り。彼等の行儀作法に然り。昔しはビクター大帝は西歐文明に心酔し、亞細亞的なる露西亞を化して歐羅巴的なるものとなさんとしたるものなりき。然れども彼れは其の行儀に

於て全く亞細亞的なるを免れざりき。試に春嶽先生より憲法論の講釋を聴け、誰れか彼れの思想の西歐的なるに敬服せざるを得んや。然れども醜つて酒席に於ける彼れ、春を青樓に賣りつゝある賣淫婦との關係に於ける彼れを察せよ。誰れか又彼れの野蠻なるに驚かざるを得んや。過を見て仁を知る、彼等の舊式なる所以此に在り。而して彼等が文明の利器を應用するに野蠻の元氣を以てし得る所以のものも亦此に存す。然れども匆々にして過ぎ去らんとする時代の波濤は遂に何人をも葬らずんば止まざるなり。時代の一波一浪は層々として常に舊きものに代ふるに新しき物を以てしつゝある也。劇界は遂に最後の、而して最大の舊式的人物を失へり。秋は貴人の門にも來り、貧人の戸をも訪ふ。余輩は團十郎の死亡を弔すると共に、總ての舊式なる人物の最後の既に近づきたるを思はざるを得ず。而して之と共に日本の危機の既に到達したるを感せざること能はず。何となれば一の時代が他の時代に變じ行かんとする時期は猶ほ小兒より大人に赴かんとする身心變化の時期の如く極めて危険なるものなれば也。

希臘の時代に在りては藝術の教育は重もに家庭の教訓と徒弟組織の團結とに依りて成りき。而して幕府の中葉以後に於ては不思議にも同じ方法の下に藝術を成育せり。たとへば幕府の藝家を養ふを見るに將棋は大橋氏を用ゐ、圍碁は安井氏を用ゐ、連歌は北村氏を用ゐるが如く其道に於ける名門の家庭教育と其門下生を以て自然に構成せられたる徒弟組織の間に於て藝術家は各其道に勤めたりき。され

ば専門なる語は當時に於ては文字通りに解釋せらるべきものにして藝術には各の門戸あり、各の學問には各の宗匠ありて相世襲し相統率したりし也。此の如き制度には勿論それに附隨する弊害なきに非ざりき。則ち高材逸足の士と雖も門外漢たるが爲めに遂に槽檻の間に老し、凡庸の人と雖も門内の人たるの爲めに意を得るが如きことなきに非りき。太宰春臺は嘗て其經濟録に於て此の如き因習の無意義にして而かも學問藝術の進歩を抑ふるものなることを冷笑したりき。されど専門家を集めて一團となし、家庭教育と徒弟教育とを合して一組織となしたる當時の教育は必しも盡く失敗の結果を齎らし來たすべきものに非りき。所謂將門將を出すの語をして人事の一法則ならしめば此の如き門戸教育も亦實に或る價値を有する制度たるを失はざる也。

團十郎は此の如き教育の中に育てられたり。彼れは此道の名家に生れたり。此道に於て最も嚴しき家庭の教育を受けたり。彼れの血管に傳はりたる市川家の天才と、市川家が俳優社會に有する最高なる位置より生ずる自負心と、彼れを圍繞せる同門他門の獎勵と教育とは遂に彼れをして今日あらしめたり。彼れは固より其藝術に於て夙成の才を示さざりき。されど潜みたるものは遂に現はれざることを得ず。門戸教育の鍛鍊は遂に彼れの裏面に伏在したる先天的遺傳を挑發して市川家の血脉たる其面目を發揮せしめたりき。

蓋し團十郎をして他の俳優と殊ならしめたる第一の要素は彼れの無頓着なる自負心なりき。彼れは時として傲慢なりとの世評を蒙りたることもありき。權門勢家の宴會に招かれて翳間の如く振舞ふことは彼れの堪ふる所に非りき。彼れは所謂大名形氣を有したる一種の變人なりき。彼れは貴族の家にすら其玄關に馬車を横付けにして、而も自ら臆する所なかりしのみならず、殆んど當然の事なりと信じたるが如くなりき。彼れは又其門下生より愛憎常なく、他人の言を輕信する御坊ちやん育ちなることを識られき。余輩は信ず、此の如きは藝術家として成功すべく、政治家として失敗すべき要素なりと。何を以て之を言ふ乎。藝術家に要する第一の要素は其藝術に對する忠實に在り。而して藝術に忠實ならとせば他の總てに對して無頓着ならざるを得ず。故に詩人は簡傲にして成功し、文人は疎懶にして成功す。昔しの名優は錢の何物たるを知らざるを以て而も其名優たるを失はざるものありき。大立者たらんとせば氣格高邁にして物に屈すべからず。家に唯四壁の立つのみにして猶王侯將相的の氣概を有せざるべからずとは、劇界に通ずる批評家の言なりき。我團十郎は此點に於てたしかに合格すべき品性を有したりき。彼れは數萬の借財を負ひ嚴冬に於て身に纏ふべき下衣なかりし時に於て、其室某が借錢の言譯に其小さき胸を痛めつゝありし時に於て猶依然たる大名形氣なりき。藝術の世界は一點卑俗の念を容れず。若し外界の窮達榮辱に依りて動かさるゝが動きことあらば何ぞ其才の暢達を望むべけんや。思ふに團十郎が此の如き大名氣質を養成し得たる所以のものは實に其名門に生れたるが爲めのみ。其門戸教育の結果のみ。幕府時代に於ける専門制度はたとへ百の過失あるにもせよ、専門家を

して世事に無頓着たらしめ、其藝術に於て自負せしめ、其事業に對して忠實ならしむるの一點に至つては、今日の學校制度よりも更に有効なるものなりき。されば此の如き無頓着なる自負心は舊時代の特産物にして而して彼は最も善く之を具體的にしたるものなりと曰はざるべからず。

彼れの智識は極めて淺薄なりき。彼れは嘗て或る文士に向ひて「先生、東洋と云ふのは一體どの邊にある國です」と問ひしことありき。憐れなる彼れは其智識に於ては明治以後の人ならざりし也。彼れは又稻荷の靈驗をすら信じ得る程の執迷を有したりき。彼れは此點に於て固より時代を教育すべき藝術家にてはあらざりき。されど彼れは自ら其無學なるを知らざりき。彼れを圍める周圍の彼れよりも無學なるは彼れをして自己の無學なるを悟るの餘地なからしめたりき。彼れは自らの無學を恥づべき動機を有せざりき。彼れは恰も智慧の木を食はざりし前のアダムの如く、自ら足れりとしつゝありき。彼れに在りては是れ極めて幸福なる心的状態なりき。彼れは自己の無學なるを知らざりしかば家康に扮する時は自ら家康たり得べしと信じ春日の局に扮する時は自ら春日の局たり得べしと信じ楠廷尉に扮する時は自ら楠廷尉たりと信じたり。彼れが舞臺を我物にして横行濶歩、些の濫帶なく、些の臆病なく所謂腹藝なるものを演じて善く觀客の喝采を博し得たるもの亦實に是れに依るのみ。無學は不幸なり。されど自ら無學なるを知らざるは時としては幸福なり。彼れが舞臺に於て菊五郎のそれと異なり、形軀、摸擬の末に區々たらずして而も深き感動を觀客に與へ得たるものは是が爲めのみ。

菊五郎の摸擬は細心なりき。最も眞に迫りたりき。されど彼れは遂に自ら其摸擬たるを自覺せざる能はざりき。團十郎は然らず。彼れは自己が全く其扮する人となりたるを感じたり。彼れは摸擬に非ず自ら働くものなりき。彼れは家康となりたりと感じたる家康を表はし、春日の局となりたりと感じたる春日の局を現はしたりき。摸擬の自覺を有するものと、自ら其人となれりと感ずるものと、其の人心に與ふる効果に於て何ぞ優劣なきことを得んや。然れども余輩は是があるが爲めに團菊の間を軒輊せんとするものにあらず。何となれば菊五郎は團十郎よりも、頗る困難なる位置を撰びたれば也。何を以て之を言ふ。昔人嘗て言へることあり。鬼神を畫くは却て易く狗馬を畫くは却て難し、鬼神は常人の見聞せざる所なるが故に其形神の果して類似せりや否やは何人も之を批評するに苦しめども狗馬は人の常に見、常に接する所なるが故に其形神にして一點だも眞に遠きことあらんか無智の人も猶は之を指摘し得るを以てなりと。團十郎の撰びたる題目は史劇なり。其扮したるものは歴史的人物なり。是れ固より常人の其眞實の形神を夢想し得べきものに非る也。家康は如何の人ぞ。楠廷尉は如何の人ぞ。滔々たる矮人觀場、誰れか善く之を解するものあらんや。乃ち團十郎の扮する所、其果して史的人物の眞相を寫したると否とは固より觀客の問題外に在るのみ。觀客は唯狂言に書かれ、彼れに依つて扮せられたるものを見るのみ。是れ彼れが從容自在、所謂腹藝なるものを逞ふするを得たる所以也。菊五郎の撰びたるものは風俗劇なり。其扮したるものは常人の常に途上に邂逅するものなり。

何人も理會し、何人にも親近なる人物なり。寫し得て若し一劃だも眞に違ふものあれば何人も直ちに之を覺るを得ん。是れ菊五郎の摸擬に汲々たりし所以にして彼れの深き注意を背景に拂ひ、扮飾に拂ひ、言語の「なまり」に拂ひ、職人氣質に拂ひ、態度の癖習に拂ひたる所以なり。されば余輩は菊五郎の位置の團十郎のそれよりも難さのあるを知れるが故に團十郎に腹藝ありて菊五郎になかりしを非難するものにはあらざるなり。

團十郎の藝術に關してテクニカルの評論を試むるは固より余輩の爲し得る所に非ず。蓋し彼れは其家業としての教育に於ては勿論遺憾なかりしものならん。彼れは又之に加ふるに其身體に於て俳優に適したる二の長所を有したりき。一は即ち彼れの家の遺傳たる大目玉なり。櫻痴先生の説きたるが如く、彼れの目玉は常人としては彼れの美貌を損したるものなりと雖も俳優としては彼れの成功を助けたるものなりき。彼れは此大目玉に總ての表情を集めて觀客の心を操ることを得たりし也。彼れは又米僊畫伯の説きたる如く非凡なる音聲を有したりき。米僊氏曰く

團十郎の獨有にして他の俳優の得て企て及ぶべからざるものは彼れの音聲なり。彼れの軀幹やもと大ならず。然れども一度其口を開いて言語を吐くや、高きに失せず、低きに失せず、中庸を得て而して貫徹す。歌舞伎座の廣大を以てして遙かに三階に在つてよく其抑揚を聴取し得るものは彼れを措いて他にあらざるなり。

是れ最も善く彼れの長所を説き得たるものなり。彼れは其天然の音聲が固より人に勝ぐれたるのみに非ず、舞臺に於て惡びれざる自信力は彼れをして其音聲を聽衆の耳に最も善く適用せしむべく慣れしめたる也。然りと雖も余輩は固より藝術的に彼れを批評し得べしと信ずるものにはあらざる也。團菊既に逝けり。劇界は社會の他の系統に向つて早々舊時代の終りたるを告げたり。社會の各系統は其變化消長の律を同うす。知らず川上某をして團十郎の祭文を讀ましめたる政治世界の老豪傑、之と顔顔して譲らざる老英雄は果して何の感かある。又知らず新時代の開拓者扶殖者を以て自ら任ずる壯年有爲の人士は之に對して果して何の感かある。最後に落ちたる果實は最も大なるものなりき。世運將さに大に變せん。是豈志士の坐して而して拱手するの時ならんや。(明治三十六年十月獨立評論)

草木皆兵

謹しんで我讀者に告ぐ。我輩は血に渴くものに非ず。戰を好み、虚榮を愛するものにも非ず。心の奥を無遠慮に告白すれば我輩は人類の血の一滴だにも流さるゝことを好むものに非ざるなり。されど不幸にして我輩は今や日本國民として戰爭の傳導師とならざるを得ざるに至れり。何物か我輩をして此に至らしめたる。他なし神聖なる自保の權利則ち是れなり。

我日本の人民は其天性に於て侵略的、好戰的のものならざるなり。我輩の祖先が日本の海島に據りて平

和の生活を營みつゝありし當時に於ては平和を好める支那人すらも日本人の温和なる人種なるを賞したりき。されど日本人は其天性の平和的なるにも關はず、一たび其平和なる共同生活に向つて危害を加へんとするものゝある時は常に必ず猛然として起つて之と争ふの勇氣を有しき。他の語を以て之を言へば日本國民は其血液を同うし、其歴史を同うし、其住所を同うする兄弟姉妹の爲めには一身の利害を犠牲にして戰場に赴くの最も熱く最も切なる公共心を有しき。韓非子に謂はずや、最も慈悲あるものは最も猛烈なり、眞個の勇氣は實に眞個の慈悲に出づと。日本國民の戰に赴くは其公共の權利を貴重し其同胞の利害を愛護する最も温かなる最も柔かき情の發動に過ぎざりき。此献身的の勇氣は三韓肅慎と戰ふに於て數ば現はれ、主權者たる皇室の尊榮を危害より救はんとする時に於て多く現はれ、嘗て世界の人心を震動したる韃靼の侵掠を防衛する時に於て最も著るしく現はれたり。日本人民の戰爭に赴く動機は唯同胞の救護に在り、日本の國家と人民とが正當に享受すべき利權を保護するに在り、國家の紀綱を維持するに在るのみ。史家の稱して日本魂と云ふものは是に外ならざる也。

日本が近世史に入ると共に露西亞と日本との間には必ず決すべくして未だ決せられざる問題ありて横はりき。日本は友國として露國を信じ得べき乎、世界的精神に富み、公義と友情とに富みたる文明の國民として露國と平和の間に交り得べき乎、否乎は日本國民が近世史の世界に觸れたる始めより深くして且大なる疑問としたる所なりき。享保七年、露國商務局の支那に赴任すべき一領事に與へたる訓

令に曰く

成るべく日本の商業と其國情との真相を探り、以て我皇帝陛下が黒龍江を巡視せらるゝ時露國の貿易中、之より有利の貿易なきを證すべし。況んや露國人の往來と自國貨物の輸送並に彼國の物産を輸出するに就て費用の且安全なるに於てをや。彼處に通商を營める和蘭人に取りては此通商最も重要のもの也。

露國の當局者が日本に注意したるは是を初とす。されど當時は唯露國に於て斯の如き希望ありしと云ふのみ。其希望は實行せらるゝに及ばずして已みし也。而して、露國政府が當時に於て始めて日本に注意したるが如く日本の國民も亦此前後より始めて赤蝦夷なるものありて蝦夷諸島に往來することを知りし也。『環海異聞』の作者の説く所に依れば當時露人は緋羅紗、猩々緋の類を着たるもの多かりしを以て日本人より赤蝦夷の名を博したるなりと云ふ。相望んで而も未だ相觸れず、彼此の關係に關する問題は猶は將來のものとして残りき。されど露人の極東に於ける進歩は迅速なり。彼れは遂に寛政文化の時代を以て直接に日本帝國の利害と相觸れ、久しき太平無事の眠に耽りし日本政府と日本人民をして北方に恐るべきものあるを感せしめたり。寛政の名臣松平定信をして寶船の圖を黒船に擬し、「此船の寄るてふことを夢の間も忘れぬが世の寶なりけり」と題詠せしめたるも、奥州の奇人林子平をして日本橋下の水は直に五大洋に接すと叫破せしめたるも、十九の青年たりし頼山陽をして殆んど國民

歌にも代用すべき蒙古來を詠せしめたるも實に當時の露國が日本の人心に與へたる攪動の産物たるに外ならざりし也。されど當時に在つても露國の本色を知るべき實際の機會は未だ來らざりき。既にして日本が露國の消息を聞かざること正に四十年、浦安の國は猶ほ浦安くして、世界の隱者たりし我同胞が武陵桃源の舊夢を繰回へしつゝありし時に於て露人は遂に其爪牙を以て日本に逼るべく始めたり。彼れは其野心を逞ふるに適當なる好餌を以て日本人民を誘惑すべき好機會を攫みたりき。他なし、米國の渡來是なり。

ペルリ提督が日本政府の玄關たる浦賀を訪ひ、列國交際の禮法を以て徳川氏の官吏を責めし時、露國の使節ブーチャチン提督は遠征艦隊を率ゐて日本の裏木戸たる長崎を訪ひたりき。ペルリ提督の志は文明主義を以て日本を開發し、列國交際の公道を以て日本を教ふるに在りき。故に其吾に對するや、寧ろ辭は正しからんことを欲し、禮は嚴ならんことを欲したりき。外國の交際に慣れず常に東洋流なる矜傲の態度を以て他人を待ちたる日本政府に在つては是れ實につらくして堪へ難き教訓なりき。されば日本の官吏は數ばペルリ提督を以て不遜、傲慢、無法の徒なりと信ずるを免れざりき。ブーチャチン提督に至つては其舉動全く之に反しき。彼れは恰も日本官吏の意を迎ふるものゝ如く、辭に穩かに色は和らぎ、敢て世界普通の禮法を以て我を待たざりき。彼れが我官吏に對する態度の如何に我官吏の好む所に投じたるやは當時の使節たりし川路聖謨等の記す所を以て之を證するに餘あり。是を以て

外國人に對して最も猜疑心に富みたる當時の日本志士すら多くは露人の甘き態度に心酔し殆んど日露同盟論をすら唱ふるものあるに至りき。然れども其實は是れ露國の米國に比して恐るべく惡むべき所以なり。當時の米國新聞紙は傳へて曰ひき。露國は日米開戦して日本破るゝの時に於て日本に加擔して時局を收拾せしめ、而して恩を日本に賣りたる代償として或る利益を得んと欲するものなりと。其實に然ることは彼れのバルカン半島に對する處置之を證し、支那に對する處置之を證す。日本の人民は幸にして米國と戦端を開かざりしかば其毒牙を免れたるのみ。我輩は想うて當時に至る毎に未だ嘗て日本國の危殆なりし運命の爲めに膚に粟することを禁ずる能はざる也。

然りしより以來、露國の我に向つて加へたる所は唯輕侮と無禮あるのみ。彼れは其天然の地形に於ても其人民の營業に於ても當然日本に屬すべき樺太島を我より奪ひたり。而して彼れが交換の名義を以て我に與へたる千島群島は其實始より當然我に屬すべきものたりしなり。彼れは又日本が對島を領有し朝鮮海峽を扼するを以て其侵掠政策を害するものなりとなし數ば之を占領して自己の物とせんと欲せり。而して其途に志を達すること能はざりしは日本の權利を尊重し、若しくは日本の威武を恐れたるが爲に非ず、實に列國が勢力均衡の上に於て一指を我に加ふるを言んせざりしが爲めのみ。事實を曰へば我日本は久しき間、彼れの貪欲の下に危險なる國民的生命を保ちつゝありし也。而れども幸にして歲月は日本國民をして露國に畏嚇せらるべき危險より脱せしめたり。日本國民は二千五百年の長

き歴史の間に養ひ來りたる同化力を發揮して遽に文明國の列に入れり。日本の陸海軍は其國家の權利を保護し、其國家の正當なる主張を維持し得べきものとなれり。他の語を以て之を曰へば日本國民は今や自己の運命を信じ、此運命を作るべき力の自己に存することを知るに至れり。今に及んで露國たるもの猶は日本の實力を解せず、依然として我利權を危ふせんとす。我たるもの何ぞ一矢相報むることを得んや。

今日の事、之を要するに我より挑むものに非ず、彼れより招くもののみ。我は支那領土の保全を欲し、我人民の最も大なる市場たる支那をして分割の危険を免れしめ、我人民の最も善く其勞力を用ひ得べき滿洲に於て自由にして完全なる營業權を得んと欲す。而して露國は之を拒めり。彼れは他人の領土に之を自國の物とし、貿易と勞働とを自國人の獨占とするに非んば到底回收の見込なき巨額の金を投じ、他人の領土に大兵を出し、大なる軍事的建築を營めり。我の求むる所は世界の人の悉く求むる公平にして謙遜なる要求なり。彼れの求むる所は他人の領土を世界の市場より閉ぢ其利益を壟斷せんとするに在り。我は韓半島の現状を維持せんと欲し、彼れは韓半島を割かんと欲す。彼れの求むる所は世界の均衡を破毀するに在り、我の求むる所は世界の均衡を保つにあり。彼れの利害は世界の利害に反し、我の利害は世界の利害と一致す。我豈戰を好むものならんや。而も事此に至る、我は唯我祖先より傳承したる日本魂を事實の上に於て發揮すべきのみ。我は固より戰爭の爲に戰爭せんには一滴の血

をも流すを欲せざるものなれども我利權を維持せんが爲には總ての血を注ぎ盡くして最後の一滴をも注ぐことをすら辭せざるもの也。他の語を以て曰へば日本の草も木も皆日本の利權を保護する干城たらんとするもの也。

(明治三十七年二月日露戰爭實記第一號)

樂戰論

仁川に於て二隻の敵艦を滅ぼし旅順に於て少くも三隻に永久戰鬪力を失はしめ四隻に大損傷を與へたる上は先づ以て大勝利と申すべきことながら、是しきの事は日本軍の前途に取りては世に云ふ朝飯前の仕事に過ぎず。我國民の期する所はかゝる小さき成功に非ず、要は世界のいたづら者たる露國をして復た起つて我極東を擾さざらしむる迄の大打撃を與へんと欲するに在り。前途猶ほ遠遠なり。今に於て何ぞ小功を誇るを得んや。

日本人民の壯心雄圖を代表したりとも云ふべき豊太閣に感ずべき逸事あり。或る陣の時、太閤馬廻の兵の陣屋を見廻りたるに、小謠うたひ小鼓うつ所あり。立よりて垣の隙よりうかゞふに内に武者三人あり。一人は具足櫃に腰かけて鼓をうち、一人は扇をもちて謠うたふ、いま一人は盃をひかへ居たりける。おの／＼皆甲冑を帶したり。陣中にかゝる遊興に耽ること太閤の氣色やあしかるべしと供の人々いぶかしく思ひしに、さはなくて、あれを見よや、退屈せぬやつばらかなとて笑をふくみ、それよ、

あの奴原に酒とらせよ、さのみくらひ酔ひなどせぬやうにいへと云ひて、其儘打過たりと云へり。大敵を前に控へて諺うたひ鼓うつこと油断の様なれども、九石の弓も久しく張れば弛むこと無きに非ず、長陣の秘訣は退屈せぬに在り、太閤は戦闘の際に於て善く此秘訣を知れるものなればこそかくは振舞ひけめ。日本國民たるもの露西亞などは恐るべき敵に非ずと始より多寡をくゝり、餘り凝つて堅くならず、煙草を飲み、茶を喫し、悠々として落付き、何時まで此戦が續くとも常に樂戰の態度を失はざるやう今より其心掛ありたきものなり。それ祖先の血は子孫の血なり。昔の日本に頼朝あり、太閤あり、家康ありしは今の日本人民にも彼等の特質たりし樂戰的襟度あることを證して餘あり。我輩は日本人民の決して氣短性急ならざることを信ずるものなり。

元龜天正の軍物語に位詰と云ふ事あり。軍に勝ちても位に負けては最後の勝利は敵に得らるゝことを云ふなり。たとへば小牧の役に於て家康はたしかに太閤に勝ちたり。されど太閤は其遠大なる規模を以て家康を遠卷し、其濶大なる度量を以て天下の英雄豪傑を懐けたれば流石の家康も其遂に抗し難きを知り節を折つて聚樂に朝したり。百戰百勝は善の善なるものに非ず、眞の勝利は位に於て勝つことなり。露西亞の軍人は心にくさきものならじ。既に海戰に於て彼れに鹽を付けたる上は陸戰と雖も其結果は略ぼ知るべきのみ。我武人の向ふ所必ず克たざることなけん。されど唯戰に勝ちたるのみにて餘りに凝過ぎては或は土俵ぎはの一敗を取ること無きを必ずべからず。されば今に於て戰に勝つと共に位

に於て勝つるの策を廻らし露國をして文に於ても武に於ても我隙に乗ずるを得ざらしむることそ日本人民の心掛くべき所なれ。兵器彈藥の戰闘に缺くべからざるものなるが如く黄金も亦戰闘に缺くべからざるものなるとは今更事新しく言ふ迄もなし。漢の高祖の七十二戰悉く敗れて猶最後に敗局を挽回したるものは蕭何ありて常に糧道を絶たざりしを以てなり。聞くが如くんば今度の開戰に於ても識者の最も憂ふる所は唯此一事なりしに國民の財力は意外に豊かにして國債應募の高も忽ち豫期の三倍に達せんとすと云ふ。我輩の所見を以てするに此三倍を三倍乃至三十倍するも日本人民の財力は猶ほ之に耐へ得べからざるに非ず。軍資に於ては先以て心配なからん歟。先頃も或田舎に行きて土地の有志者を集め露國と戰ふことの己むを得ざる所以を述べたるに座中の人意氣悉く揚り、兎ても角でも日本國民は一撃を彼れに與へねばならぬ運命とはなつたりけり、此段は日本國民一人も異論あるべからず、軍費の如きも國民の心掛次第にて何程も積まるべし、斯云うては口廣き申分ながら此所に集りたるもの共は何れも其日の衣食に追はるゝと云ふ程のものならず、我等人民各其費もはぶきて國に献げんに百年露西亞と戰ふと難も軍需にはよも事を缺かじ、かくて我子弟をして戰はしめ、我財を擲ちて軍資に供せんに最後の勝利は必ず我に在るべきのみと云へり。平生ならばかゝる人々より何ぞ此英雄的の言語を聞くを得ん。今や日本國民の義憤は其各の個人を化して國の爲めに總てを擲たんとする英雄たり愛國者たらしめたり。日本の人民は其國利民福を防衛する爲には其最愛の子弟、夫婦を戰の神に献ぐ

ることだも辭せず。何ぞ況んや其財囊を開くを惜しむものならんや。我輩は我同胞が軍資を供給するの一點に於ても早く既に眼中敵國なきを知るなり。

此上は唯凝らず、急がず、退屈せず、常道を行き常規を歩み、一年にして成らずんば十年を期し、十年にして成らずんば百年を期し、恰も花見遊山に赴くの心を以て此千載一遇の國民的大競争に赴き、徐むろに我初心を貫徹せんのみ。昔しは商人某あり。風雅の友を集めて俳筵を開きたり。或は呻吟するものあり、或は默想するものあり、各々人を驚かすの佳句を得んとして一座悉く心を焦がしき。忽ち客あり店頭に來りて物を買はんと欲す。此時まで兀坐石佛の如かりし主人乃ち出で、之に接し款待慇懃平日の如し、既にして客去る。主人直に座に還り再び推敲を始む。蕉翁之を見て大に主人の態度を賞したりと云ふ。それ小技と雖も凝つては所謂思案に堪へざることあり。露西亞と戦はんとするもの徒らに戦争にのみ心を奪はれて而して其常業を忘るゝが如きことあらば是れ斷じて國家の慶事に非るなり。

(明治三十七年二月日露戦争實記第二號)

韓山紀行(抄録)

仁川より

仁川より此書を呈す。

二日門司にて船待すべき筈なりしに遽かに四國丸と云ふ千四百噸の船釜山、仁川に赴くとの報あり。午後三時半倉皇船上る。朝來の雨始めて霽れ、雲破るゝ處青天を見る。彼所に見ゆるが水雷艇、此所に見ゆるが砲臺など種々の説明を傍人より受く。今は茫々として記せず。僕は船に慣れず船暈甚しかるべしとの鬼胎を懷さしかば一等船室を借る。夜半玄界灘を過ぐ。舟大に搖ぎ眠數ば驚く。即ち蹶起して寢室を出で、甲板に上る。時に三日午前一時半なり。只見れば甲板上人無し。船の動搖甚しく而して月既に東に上る。四顧唯微暗にして波聲を聴くのみ。僕脚根底なく、身神頗る懊惱を覺ゆ。辛ふじて甲板の中央に坐し、大聲蒙古來兮を歌ひ、僅かに氣晴れ、神活くるを覺ふ。乃ち再び寢室に歸りて憩ふ。一眠曉に達すれば船既に對州の左を通過し、漸く朝鮮の島を見る。午前十時釜山港に入る。釜山港は三面山と丘陵とを以て擁し、一面大洋に連る。港内頗る廣し。唯風あれば波高きを免れずと云ふ。四國丸、荷上げの爲め多少の時間を要するを以て端舟を僱ひ釜山の市街を見、始めて韓人の生活に接す。街路に市を開きて物を賣るは越後新潟邊の朝市に殊ならずして唯其の極めて汚穢なるを異にするのみ。女の物を頭上に上せて賣あるは恰も大原女の如く、チゲを以て高く物を背上に荷ふことは京都の村民の如く、小さき車に長き物を載せて行くも三條橋上に見るものに似たり。而して其行歩の悠々閑々として恰も日月の梭の如くなるを知らざるが如き光景も亦殆んど我京人に似たり。持統天智の御詠に曰く

春過ぎて夏來にけらし白妙のころもほすてふ天のかく山

時正に春夏の交、韓人の白衣を干すこと真に此の如し。僕の眼に映じたる韓人は實に我奈良朝時代の復活なり。唯韓人の生活は精神なき奈良朝生活にして、奈良朝の生活は精神ある韓人生活なるを感ずるのみ。韓人の労働者は身幹體力共に邦人に勝る。頗るノン氣至極なるものにして餒ゆれば則ち起つて労働に従事し僅かに一日の口腹を肥せば則ち家に歸つて眠らんことを思ふ。物を蓄ふるの念もなく、自己の情慾を改良するの希望もなく、殆んど豚小屋にひとしき汚穢なる家に塾居し、其固陋の風習を守りて少しも改むることを知らずと云ふ。僕一たび釜山の地を履んで實に直ちに韓國經營の容易の業に非ざるを知るなり。途上に遇ふ所の韓人悉く長き煙管を携へ閑あれば必ず之を喫す。又メンタイ魚と稱する乾魚をむしりつゝ食ふものあり。最も蒜、唐辛しを好み、食物には必ず之を用ふ。其刺激興奮の食料を貪食すること洵に未開の本色を現はせりと謂ふべし。午後十一時四國丸釜山を出で、仁川に向ふ。同四日の一日は海上に在り。朝鮮西岸多島海外の航路を取る。同五日夕に至つて仁川に着す。

(明治三十七年五月五日夜)

京城より(一)

京城より此書を呈す。

朝鮮多島海の航海は別段面倒なることなけれども時として「ガス」(霧)の海面を掩ふことあり。さる時は航海を止め數々汽笛を鳴らして衝突を避け、しばらく一所に漂ひて其霧を待たざるべからず。但し北海道の如く十數日の長きに亘りて霧猶ほ散せざるやうなることはなし、大抵は一日乃至三日位にて更に航進するを得るなり。僕の四國丸は幸にして「ガス」の襲ふ處とならざりしかば海上の航程も大抵豫期の如くなるを得たりしかども仁川にて他人に聞けば或は七日を費したりと云ひ、或は八日を費したりとも云ふ。

四國丸は二等室に船客を載せず、唯一等室と三等室とのみなり。僕は船に弱きものなれば、嘔吐の醜態などを人に見せては恥づかしきことなりと思ひ一等室を借りたり。此船貸門司より仁川まで金二十四圓なり。これでも昨今廉になりたるものなりとの事なり。船なればこそ洛陽の一布衣も一等客となりけりと思ひて自ら一笑を催したりき。然るに案外にも弱蟲と自から信じたる僕は一等船客(四五人に過ぎず)中に於て頗る平氣の方なりしのみならず、三等船客中に於ても僕の如くむやみに甲板に上下し、夜中にはね起きて月を見、詩を嘍するなど、云ふ飛上りの連中は甚だ少なりしが如し。船客中に嘗て甲種船長となりて手腕を奮ひし井上氏あり。播磨の人なり。善談、善謔、多く甲板に在り。熊本縣の中學校より官選にて韓國習學の爲め京城に赴く學生あり。其他三四の人、僕と共に自から甲板上一社會を爲す。僕之を稱して俱樂部と云ふ。衆皆絶倒す。後には井上氏などは「やア君は俱樂部に御出席が遅いな」などと戯るゝに至れり。九州の學生は一體に質樸にして長者を敬するの風あ

り、喜んで我輩の論談を聴く。爲めに船中の寂寞を破りしこと多し。玄界は鳥も通はぬと歌はれたる位なれども其程恐ろしきものに非ず。僕は「今から玄界ですから、御飯も控へて置いた方がよろしい」と云ふものありしにも關はず、据膳喰はぬは胃の恥なりと思ひ、(君よ笑ふ勿れ)随分澤山頬張りたれども、遂に吐するに至らざりき。釜山より一等船客となりしは自ら稱して西班牙種と云へる米人にして年は二十一二なり。日本語を善くし、頗る日本下等社會の状態に通ず。僕は始め日本人の混種が、しか名乗るを好まず西班牙種なりと云ひ居るものなりと思ひしが、其佛國宣教師に多く同情し、プロテスタント宣教師を罵倒するを以て、其西班牙種なりと云ふもの、或は事實なるべしと思へり。「此方へやつて来るプロテスタントの宣教師は金もつけに來るのです、月給が百五十弗ですから日本の三百圓になります、それですから相應に贅澤が出來ますし、金をためる事も出來ます、つまり金がほしいから來るので、別段感心しない、カトリックの教師はそれに反對で女房は持たず幾か月給十六圓で満足しなければならぬ、誠に感心です」とは彼れの説法なりき。彼れは雲山の金鑛に従事するものにて、「西洋人は日本人より博奕が好きです、日本人のしない大きな博奕をします、雲山でも西洋人が三十幾人から居ますが博奕をしないものはありません、給金を取れば直ぐ始めます、そうして取られて仕舞へば、壁の方に向いて本を讀んで居ます」と云ふ。何處も青年の風習は同様なり。彼れは英譯のポツカシオを讀み居たり。僕試みに其猥褻の文句多かるべきことを詰りたるに、そう云ふ處は佛文で書いてありま

すと答へたり。彼れ横濱、神戸、馬關、門司、釜山、仁川等の荃花路柳に就て最も可笑しき經驗を有す。御蔭にて僕は多くの智識を得たり。

京城にて鬚を剃れば直に二十錢を食られ、停車場より車に乗りて日本町に至れば四十錢をねだらる。日露戦争にて最も多く金の落つる所は韓國ならん。或は之が韓國開拓の一助なるを得ば幸甚し。

京城の南、南大門外停車場の前に丘陵あり。韓人の屋後多く桃を植ゆ。今が花盛りなり。但し桃花の色日本のに比すればや、鮮かならず。以て京城の月令をトすべし。

昨日南大門外にて童蒙先習と云ふ一冊を購ふ。日本の童子經、實語經の類なり。僕は韓國教育の素養如何を知らんと欲したれば、逆旅に歸りし後燈下にて一閱したるに全體の主義は朱子學にして、恰も白鹿洞揭示の如く、例の父子有_レ親、君臣有_レ義、夫婦有_レ別、長幼有_レ序、朋友有_レ信の説法に過ぎず。而して其次に宗國(即ち支那)文運の基く所を論じ、次に韓國に論及して曰く

東方初め君長なし。神人ありて太白山檀木の下に降る。國人立て、以て君と爲す。堯と並び立ち、國を朝鮮と號す。是を檀君と爲す。周の武王、箕子を朝鮮に封じ、民に禮義を教へ、八條の教を設け、仁賢の化あり。燕人衛滿、盧縮の亂に因て、亡命し來り、箕準を誘逐して王儉城に據る。孫右渠に至り漢武帝、討て之を滅し、其地を分ち、樂浪、臨屯、玄菟、眞蕃四郡を置く。昭帝平那玄菟を以て平州と爲し、臨屯、樂浪を以て東府二都督府と爲す。箕準衛滿を避け、海に浮んで南し、金馬郡に居る。

是を馬韓と爲す。秦の亡人、避けて韓に入る。韓東界を割きて以て與ふ。是を辰韓と爲す。辨韓は則ち國を韓地に立つ、其の始祖の年代を知らず。是を三韓と爲す。新羅の始祖、赫居世、辰韓の地に都し、朴を以て姓と爲す。高句麗の始祖朱蒙、卒本に至り自ら高辛の後と稱す。因て姓を高とす。百濟の始祖溫祚、河南の慰禮城に都し、扶餘を以て氏と爲す。三國各一隅を保ち、互に相侵伐す。其後唐の高祖、百濟、高句麗を滅ぼし、其地を分ち都督府を置き、劉仁願、薛仁貴を以て、留まつて之を鎮撫す。百濟年を歴る六百七十八年。高句麗七百五年なり。新羅の末、弓裔、北京に叛き、國を泰封と號す。甄萱は叛きて完山に據り、自ら後百濟と稱す。新羅亡ぶ。朴昔金三姓相傳へ年を歴る九百九十二年なり。泰封の諸將麗祖を立て、王と爲し、國を高麗と號す。羣兇を剋討し、三韓を統合し、都を松嶽に移す。季世に至り、恭愍嗣なし。僞主辛禑、昏暴自ら恣にし、而して恭讓は不君なり。遂に亡ぶるに至る。歷年四百七十五年なり。天命、眞主に歸し、大明太祖高皇帝、賜ふて國號を改めて朝鮮と曰ふ。鼎を漢陽に定む。聖子神孫、繼繼繩々、重熙累綰、式て今に至る。實に萬世無疆の休なり。於戲我國海隅に僻在し、壤地褊小なりと雖も禮樂法度、衣冠文物、悉く華制に遵ふ。人倫上に明かに教化下に行はる。風俗の美中華に擬するに伴し。華人之を稱して小中華と曰ふ。茲れ豈箕子の遺化に非ず邪。噫爾小子、宜しく其れ觀感して興起すべき哉。

是にて一篇を結ぶ。原文は、漢文にて、韓國の讀法を注したるものなれども、讀者の便を計りて書き

下したり。其禮樂法度、悉く中華に擬するを以て自ら誇り、華人の稱して小中華と云ひたりとて揚々たること事大根性全然呈露す。其根底頗る深しと謂ふべし。此種の人物をして發憤自強せしめんとす、僕は先づ匙を投げざることを得ず。所詮は此種の文學を一掃し、書を焚き、儒を坑にする底の手段を用ひ、國民の耳目を一新するに非れば不可なるべき乎。されど今はかゝる議論を爲すべき時にあらず。何となれば僕は足を韓地に着けて猶ほ三日に過ぎざる一旅客なればなり。

僕の深く恐るゝ所は在韓の日本人が自重せず、大國の威を借りて韓人を凌辱し却て自ら韓人の不信を招かんと是なり。日本國民の韓國に在る者は人々自ら韓人の師表たるを以て任せざるべからず。

昨日は京城の祝勝會として大騒ぎなり。僕は逆旅を出で和庄臺と云ふ丘陵にて此騒を見物したり。此丘陵は京城の南に在り、城市眼下に落つ。山は禿山にして骨出で、纔かに矮松の點在するあるを見るのみ。禿山の真中に古色蒼然たる城市を見ること寧ろ悽愴の感あり。例の韓人悠々閑々として僕と共に見物す。僕其一人を捉へて筆談を試む。

(僕)先生能爲漢文乎。敢質。

(韓人)纔以記姓名而已。

(僕)僕輩亦得纔達意而已。格法所固不諭也。

(韓人)隨其山川之風氣。言語不同也。

(僕)僕輩願大韓國。發憤自強。爲眞個獨立自主之邦。請問諸先生、先如何着手。敢質。

これにて分らぬ様に感じたれば

請問、貴國發憤自強。以何爲第一着手段。

とやつたり。所が先生の返辭が奇妙なり。

(韓人)方今開化文明。世界經緯。義理堅固。然後自立之法也。

僕には其意が解せぬ故、更に一議論を試みたり。

(僕)僕所見。所謂文明開化、不_レ過_レ粉飾外面。若無_二裏面忠厚意思存_一。斷不可也。敢問_二高見_一。

と試みたり。然るに先生の答は依然として方角違なり。

(韓人)忠厚意存。各自守_二其國_一。今日筆答之席。通_二名姓_一如何。

(僕)僕大日本東京學生、山路氏、通稱彌吉。號_二愛山_一。謹問_二尊姓_一。

(僕又)寸陰可惜。徒費_二嚙舌_一。深爲_レ謝。深爲_レ謝。

(韓人)生大韓元山上里居姓池氏、名周元宗。聖_二三_一、號_二春山_一。

これにて問答を了りたり。狐が馬に乗つたやうなとは此問答の謂なるべし。一青年韓人、僕を見て漢學先生なりとも思ひたるや傍に來り英語にて僕に向ひキャン、ユー、スピーク、イングリッシュとやり掛たり。僕は英語の達人にあらず、甚だ拙劣なる方なれども、旅の耻はかき棄なりと思ひたれば、直

ちにイエス、アイ、キャンと答へ、それより鋒を此青年に向けて一二の談論を試むるに、何ぞ圖らん、彼れ一句も分らず。其後青年に逢ふ毎に英語の談話を試むるに知つた振するものはあるやうなれども實に知るものは少し。漢文も餘り分るものは無さやうなり。一旅人の雲煙過眼的觀察にて直ちに臆斷を下さんは氣の毒なれども此邊の韓人は概して

(一)生さぬ。

(二)知つたふり、其實無學。

(三)押強し、耻を知らず。

とても言ひたきことなり。

美少年の多きには一驚を喫す。聞く韓人の間には龍陽最も行はれ、男と男の間に格氣沙汰も珍らしからずと。是れ或は韓人精力消磨の一原因にはあらざる歟。

(五月七日)

京城より

京城より此書を呈す。

今日は日曜日故、隙なればとて大東新報社長菊池長風君に促され水原に遊びたり。水原は京城より韓の里程にて七十里といへば大そうなれども日本里程にすれば七里位なり。京仁鐵道を永登浦の停車場より折れ、京義鐵道に乗り換へて達す。途中に大なる池あり。一尺位の鮒が居ると韓人は語りたり。

朝鮮にては唯今芥子の島が青々たり。朝鮮人は米の耕作は念を入れざる様子なれども野菜の耕作は力を用うるが如し。漢口は水清くして且緩く、兩岸に青き柳の枝垂れたる狀、唐畫の山水めきたり。所々に草のみ生へて人力の加はらざる原あり。水利も宜しき様子なれば百姓をしたらば開拓の功あるべし。朝鮮の役人は日本農夫の來ることを勿論好まぬ様子なれども、放うつて置くよりは日本人に耕作された方が、土地若し靈あらば喜ぶべし。京城附近此の如しとすれば、其他は知るべし。

此邊の氣候は日本の信州よりは暖かなり。但し冬時北風が吹けば寒きこと非常なりとぞ。空氣は乾燥して、天氣多く呼吸病に悪しく皮膚病に善きは信州の如し。僕は何となく長野に歸りたる心地したり。梨花既に散りて纔かに枝上に残れるものあり。蕨既に萌へ出でたり。松林の小丘を縫へる田舎道を歩みて城門をくゞり水原に入る。道に杉葉生え、すみれ生ふること日本の如し。水原を韓人は稱して韓南第一の都會といふさうなれども日本の穢多村同然の體たらくなり。さりながら城門は立派なるものなり。韓國の都會は大陸流にして廻らずに城壁を以てし四門を開き望樓を設く。遠望すれば寫真で見たる萬里の長城なり。菊池氏の説に諸府の城門の内、南門は何れも特に立派なる由。僕案するに日本人でも畏嚇せんが爲めなるべき歎、それとも南王面の意歎。それは兎もあれ僕は城壁の大なると樓門の魏々たるを見、城の内外にある民家の豚小屋然たるに對比し、韓國には役人の建築ありて、人民の建築なきを感せざることを得ず。

韓人は早婚なり。男は十五六歳にて娶り、女は十七八歳にて嫁す。女房の方が年の上なるが多し。故に正室の外に側室を置くこと多し。妾と云ふ意義の語はなく妻妾混合なり。

女權存外に強し。上流社會の妻女は必ず政談家なり。此段は意外なり。しかし平安朝の季世を見るに男は意氣地なき奴計りにして女には源氏物語、枕の草紙の作者あり。足利氏の末路を見るに男子の事業に見るべきものなく、見るべきものは青女房の隱謀のみなり。然らば則ち衰世には牝雞の晨するものと見えたり。獨り韓國のみならず。

濟州島(昔しの耽羅)の人民は男女別室に居らず、女を家に閉ぢ込めず、頗る日本的なり。而して顔は琉球人に似たる由。朝鮮は女を閉ぢ込むこと支那の如し。貴婦人は人に顔を見することなし。女なれば閣内に入出入するを得。故に朝鮮の外交官は内室に腕利きあるを要す。

朝鮮人、利に敏なり。金錢上の執着力甚だ強し。一種の外交家なり。朝鮮に始めて來たるものは詩人的の想像にて此人民を鼓舞し、眞個の獨立なる人民となしくれんとて、同等の待遇をすれども、少しく時日を歴れば餘り横着なる、づら／＼しき人民なりと感得し、驚馬をたゞく積にて鞭撻する氣にならざるが常なりとぞ。其しふとぞ、不得要領さ、卑屈さ、肝癢の無さゝはとても僕輩の耐へ得る所にあらず。

朝鮮に最も多く來り住するものは曰く山口縣人、曰く熊本縣人、曰く大分縣人、曰く長崎縣人。

麩の價は廉なり。相應の大きなもの四疋を繋ぎたる人に其價を問へば曰く韓錢六十錢、日本の三十錢程なり。味は日本の程甘からずといふものあり。牛肉、雞肉共によし、雞肉最も美なり。雞卵は水原あたりにて一個一錢位なり。

韓女は物を蒙りて歩むこと足利時代の女の如し。而して皆杖をつき居るなり。此輩は中流以下のものに過ぎず。上流の女は深く隠れて出でず。

水原にて菊池氏の友人醫師某君の家に厄介となり、朝鮮の鍋にて牛肉と片とを煎、晝飯の馳走にたり。某君の室、未だ甚だ若し。外君に従つて韓人の地に入り、韓人の家に住ひ、敢て寂寥を厭はず。此點は九州婦人の長所にして關東婦人の遠く及ばざる所なるべし。

京城物價の貴さと話のやうなり。半ば日本商人の此の如く騰貴せしめたる也と非難するあり。朝鮮の流行歌を和譯すれば、

御前と一所に峙へ上り、四方を眺めりや日は沈む、歸らにやならねど眞の闇。

亡國の音に非ずして何ぞや。

(五月八日)

鎮南浦より (一)

鎮南浦より此書を呈す。

僕史癖あり、足韓山を踏むに及んで例の病氣再發して堪へ難し。人毎に一の癖はあるものを、少しく

閑文字を弄ぶを許したまへ。

仁川の前に横はれる江華島に摩尼山(一本都摩尼山)あり、是れ古朝鮮の始祖檀君の天を祭りし所なりと云へり。同島に傳燃山あり、檀君三子をして城を築かしむる所にして三郎城の名あり、古址猶ほ存すと云ふ。平安道妙香山、一名太白山は檀君初降の地にして黃海道文化縣の九月山は檀君神と爲るの地なりと傳ふ。檀君に關する遺傳は後人の僞作なりとの説もあれば僕はあながちに韓國の古口碑なりと推斷する譯にはあらざれども、僕をして若し妄斷妄言せしめば其天を祭る所の山を都摩尼山、若くは摩尼山と云ふものは、我「フトマニ」なる語と源を同するものにあらざる乎。イザナギノミコトが「フトマニ」を以て天神に奉事せられたるは古事記の記す所なり。且其三子ありと云ふも、イザナギノミコトと相類す。現に蝦夷三郎はイザナギノミコトの第三子ヒルコの事なりなど云ふに非ずや。且琉球にも始祖三子の遺傳あり。されば檀君に關する遺傳を以て悉皆後人の捏造なりとするは少しく苛酷に過ぐるの臆斷にして僕は其内には日本、朝鮮、琉球に通有する古傳の骸骨を發見すべきものにあらずやと思ふ。

されど檀君の昔話は餘りに古りにたり。史籍に朝鮮の事の現はれたるは漢武の後なるべき乎。漢武の時に至りて支那人種は非常の擴張を爲し韓半島の北半部を擧げて其郡縣となしたり。即ち江原道の濊國は逐はれて臨菴郡となり、平安道は樂浪郡となり、咸鏡道は玄菟郡となり、遼東は眞蕃郡となれ

り。照帝の時、更に此四郡を改めて二府となし、玄菟、眞蕃を合して平州都督府とし、樂浪、臨菑を合して東州都督府となしたり。

而して此漢領に沿うて南に在るものは諸韓なり。思ふに人種移動の勢此時より甚しきものは非りしなるべく、而して日本が始めて韓國と政治的交渉を始めたるも當時に在りしが如し。更に妄斷するを許さば日本開國の紀元には數世紀の違算あり。(しか考ふるに正當の史學的理由あるは學者の疑はざる所なり。)大抵人皇の始なる我先王は秦皇(漢武の事業は秦皇の經營したるもの、繼續と見て差支なし)冒頓と時を同うしたる英主にましまし人種移動、大國樹立の機運に乗じて日本島の統一を遂げ玉ひたるものには非ざる乎。かくて諸韓は北は匈奴と支那とに迫られ、南は日本に要せられ、頗る窘迫の狀態にありき。

然るに匈奴と漢とは久しく雄を争つて互に疲れ、一たび韓半島の北部を其郡縣としたる漢人もや、其強き手を弛めざるを得ざりしかば松花江岸吉林省の平野に住まひし扶餘族は白頭山を越えて國を大同江畔に建て咸鏡、平安、黄海諸道を略し、はては威力を遼河の岸にまで及ぼして所謂高句麗の朝廷を開き、同族の一枝は江原道より漢江を下りて百濟となり、今の京城、忠清、全羅の地に踏み、新羅は辰韓の一部より起りて今の慶尙道の地を略して、三國鼎立の狀態を現じ、従前の諸韓は次第に此三國の爲めに滅ぼされたり。神功征韓の役は三國鼎立の始に起りたるものにして日本の屬地たる洛東

江南の任那諸酋長を新羅の壓迫より救はんが爲めなりしなるべき歟。されど任那は遂に亡びぬ。而して百濟は一面高麗に壓せられ、一面新羅に迫られ國勢甚だ振はざりしかば常に日本に臣節を盡し、其保護に待つもの多く、日本も亦百濟を優遇して任那の恢復を計らんとはしたり。

既にして支那は隋に至つて再び其勢力を統一し、勢力の統一と共に外方に向けて開展し來り、こゝに再び高句麗と戰を開くに至れり。されど當時の高句麗は土地廣く、人種も亦雄健にして善く戰ひしかば漢人は容易に其志を逞うする能はざりき。獨り如何せん新羅は其人種を異にするが爲に扶餘族と親しむこと能はず、早く款を漢人種に通じ、内外夾攻の策を取りしかば唐に至つて百濟先づ滅び、高句麗も亦遂に滅び、日本も韓半島に關する要求を擲ち、此處に支那の勢力は再び朝鮮に及び、百濟の地に熊川都督府は置かれ、平壤の地に平壤都督府は置かれ、事大主義は始めて牢乎たる根底を韓人の腦髓に作るに至れり。

爾後の歴史は唯支那に諂事し其甘心を求むるの一精神を以て貫徹するあるのみ。

(五月十五日)

鎮南浦より (二)

鎮南浦にて郷塾の如きものを見たり。郷塾と書けば立派なる様に聞ゆれども、生徒らしきもの廿四名に過ぎず。讀む所の書は支那の歴史なり。先生は鬚の生へたる五十恰好の人物なり。僕、平野氏(同船の煙草屋なり)と共に其家に至り、一禮したる後紙筆を請ひ、左の筆談を爲せり。

(僕)先生爲本邑教習乎。

(韓人)客留此齋爲教師。

(又)敢問高姓大名。

(僕)初見通刺。士君之禮宜然。僕大日本學生、山路氏、名彌吉。

(韓人)僕大韓幼學姓盧、名敬高。

(僕)同行之友。姓平野、日本紳董。

(韓人)既曰學生。則宗教何道也。

(僕)僕年少主日本物徂徠先生之學。長而學泰西學術。頗聞愛人敬天之教。但未能深信爲憾。

此時韓人は物徂徠先生の名を解せざるもの、如く旁に日本人耶と書きて其意を質したれば、僕は直ちに首肯して其然ることを示したり。

(僕、又)請教、先生主何學、奉何教、

(韓人)僕主儒道。祖述堯舜。憲章文武。而以孔孟爲先師也。

堯舜を祖述し文武に憲章すとは扱も大きく出たるものかな。僕は彼れが徂徠先生を知らざるを癪に障りたれば、即ち徂徠學の講釋を始めたり。

(僕)日本徂徠先生。以先王孔子之教爲在乎利用厚生一途、痛排朱栲亭。日本人謂爲古學。僕

亦少年讀其遺書。

更に一轉語を下して朱子を痛撃して曰く

(僕)朱氏論性。直與佛氏不殊。僕輩所不服。先王之道。治國之要道。斷非性理之學。如何。直ちに敵の本陣に迫る。彼れ何ぞ逆戰の態度に出でざるを得ん。

(韓人)性理之學以仁義以主。仁義之中。自有治國之道。性理治國。非兩件物事。

崔知遠の、何のと云ふ日本にも評判の性理學者を出したる韓人が眼前、一書生の爲に罵倒せられて默する能はず、此位の逆襲に出でたるは當然にして寧ろ健氣なりと謂つべし。僕も更に性理學の害を痛論し韓國の今日あるを致せしは舉國悉く舟中大學を講ずるの徒にして、性理學、實に韓國を腐敗せしめたるものなることを語らんと思ひたれども、悠々閑々筆談に耽るべき旅にもあらねば、其儘切上げ僅に左の一句を残したり。

(僕)性理與治國。本有交涉。而性理非直是治國。

韓人は微笑したるのみ。此人は平安道龍岡郡の人の由なるが韓人の内にては氣骨のありさうなる顔つきなりき。

韓人と雖も全く氣骨なきに非ず。概して曰へば京畿道より北は寒氣強く冬も河水が氷り、人馬氷上を往來する位なれば、人物も稍骨頂あり。平安、咸鏡兩道に至つては下等社會などには健闘して血を流す

ものさへある位なれば弱きもの、みにあらず。京城にも弓を射る武人の一派ありて肩を怒らし威張つて歩くものあり。此輩は氣力もあり、蠻氣も多く、男色を愛するなど、一言にて評すれば韓人中の薩摩人とも云ふべきものなれども、如何せん科擧を以て士を取りし崇文の風習は久しく韓人の頭腦を壓し遂に弱虫をのみ跋扈せしめ今日に至つては臥榻の下に他人の駢聲を容れて、而も視として耻づるなきに至れり。韓人が孔子の廟に事へ、崔知遠を理想の人物とし、抵抗、努力、活動、進取の動物的元氣を鼓舞するを知らざる間は國力はとても恢復し難からん乎。

僕、京城學堂の渡瀬氏に語つて曰く日本と朝鮮とは其文明に根本的差違あり。君知らずや、日本の幕府は嘗て其憲法に於て儒者と醫者を以て制外の人物となせり。即ち學者を以て長袖の坊主に並べ、彼等を政權の門外に驅逐したり。一見甚だ残酷なるが如くなれども、之に因て日本人は思想の桎梏を免れ、外國の學問も學者の所謂異端も、相應に息をつくことを得たり。是れ維新の後に於て日本の思想界が大に自由の活動を做し得たる所以なり。之に反して韓國は科擧の法あり、政權に與るものは悉く學究なりき。されば昔し日本に來りし朝鮮の三使も大抵は詩文位ひねくらぬはなく、外見よりも文學盛んの國と見えたりども、其弊や思想の壓抑甚しく、朱子學を以て人才を桎梏し、加ふるに文弱の風を招きたりと。渡瀬氏も此論に首肯したりし也。

(五月十六日)

平壤より(一)

堀久の汽船慶尙號に搭じ、昨日午後、滿潮を待つて鎮南浦を發し、夜十時頃晚景臺にて下り更に韓人の小舟に乗り代へ、大同門外の三根と云ふ旅館に投じたり。平壤には日本人の作りたる日本風の家屋は一軒もなし。三根旅館は今の處にては平壤第一と云ふ評判なれども、それすら韓人の稍大なる家をつくろひて行李を安頓するだけに直したるものに過ぎず。

韓人の小舟に乗つて大同江を溯りし時は夜色沈々、水聲靜かにして兩岸模糊たり、唯柔櫓の聲を聞くのみ。稀れに星の如き火を見たるは是れ韓人の村落より漏るるものならん。又數ば犬の吠ゆるを聞きたり。韓人の村に犬多きこと知るべきなり。此時又所謂狐火なるものを見たり。傍人僕の爲めに舟を操りし韓人の説く所を譯して曰く、彼れは之を指して神の焚やす火なりとなし、且靜肅ならんことを舟中の人に求めたりと。狐の火と云ひ、神の火と云ふ、彼是の俗相似たるものあり。且神てふ韓語は幽靈にも化物にも通ずる由なれば暗合の妙、更に一層切なるを覺ふ。

筆の尋なれば韓人の宗教に就て一論せん。僕は既に聖廟、關廟の類を見、又賢人忠士の祠なるものを見たり。更に久しく韓國に在りし人に就て之を質すに韓人の祭る所は多くは支那人の祭る所を假り來りしものに過ぎず。所謂玉皇大帝、觀音、天合、井神、竈神、土神の類悉く支那傳來のものに非るることなし。韓國の歴史に固有したる所謂國民的の祭神に至つては皆無と云ふも可なり。従つて佛經にも本地垂跡の説あるを要せずと。僕は是に於て韓國と日本との歴史的相違の太甚しきに駭かざるを得ず。

るなり。

平壤の蠅多きは驚くに堪へたり。飯の上を集るものを見れば須臾にして殆んど椀上一面を黒くし、又飯粒の存在を認むべからず。日本にても田舎に行けば之に似たる所なきあらず。五月の蠅はうるさきことの譬論となり居るなり。

(五月十七日)

平壤より(二)

昨、舟中に於て或人の説を聞くに支那に在つても漢水の沿岸に於ては必ずしも女子を家庭に密閉せず、貴宅大戸と雖も好んで其妻子を出游せしめ、美婦艶妾を有するものは却つて之を世間に見せびらかすの風あり。花の朝、月の夕には、しやなりくとして美人の男子の間を歩むもの少からず。殆んど肩を挨し、背を擦し、目挑心招の醜態あり。他人の妻子の品定めのみして喧嘩諍浪を極むるもの少からず。支那人を舉げて悉く女子を外に出さざる者なりとするは過れり。韓女の深く潜みて稀に出づるは北清の風にして南清の風に非ず。且不思議なることは韓女は羈絆を弛め、多少の教育を與へ、稍自由に男子の間に往來せしむれば其嬌痴逡巡の體を一變して御轉婆娘とならざるは無く、殆んど始は處女の如く終りは脱兎の如き勢あり。其何の故たるを知らず。

或人、又龍陽の事に論及して曰く日本の薩摩人とも云ふべきものは支那の福建人なり。福建人之を好むこと恰も宿世の因縁とでも云ひたき位なり。其大官の如き往々自己の翫童を以て秘書記室の任

に充つるものなきに非ずと。僕曰く福建は臺灣と接し、臺灣は琉球、薩摩に連り、薩摩は兩肥の群島、濟州島と水路相通じ、而して全羅道に入る。是れを龍陽帶(美人帯の如し)と謂ふべき乎と。哄笑一番す。而して竊に薩人の傍に在りて此東人の大言壯語を怒らんことを恐れしなり。

因て思ふ、釜山より仁川に至る航路中、肥後の青年、甲板上に集りて寫本「賤のをだまき」を讀む。余戯れて曰く是れ諸君の「小三、金五郎」なることなからんや。青年羞づる色あり。既にして曰く我儕若し婦人と戯むれば同人の痛斥唾罵を免れず、男子と兄弟行を契るに至つては父兄亦多く之を尤めざるなりと。余は今に至つて惡風の死灰復び燃へんとするを歎せざる能はず。

平壤の風色は絶好のパノラマなり。余の筆之を畫くこと能はず。強て之を形容せしむれば大陸的にして又島國的なるランド、スケープなりと謂ふべき乎。其一望空濶、野水縦横し、田野多く開け、飛鳥の影を遙空に没するまで目送し得べき大觀あるは之を大陸的なりと云ひ得べきも、其眼界の空濶なるは單調なる無限の平陸あるが爲めならず。却て恰も島嶼に擬すべき諸丘陵ありて其間を點綴すること猶は我が遠州道中の光景に似たれども唯大山ありて地界を狹隘ならしむることなきを異なりとするのみ。記して此に至る、僕は平壤の山水若し靈あらば僕の勃萃理窟が此風色を妄評したるを笑はんことを信ずるなり。

僕の見るところにては鎮南浦、平壤の韓人は冠を着けたるもの京城仁川よりも多からず。悠々閑々とし

て、くわへ煙管に太平の閑人を粧ふもの多からず。足もや、早く、仕事にもや、勤むるものに似たり。

(五月十七日)

鎮南浦より (三)

平壤は唯一宿したるのみにて更に當地に引かへしたり。僕は朝鮮の行路を取ることの我軍情を訪問せんとする當初の目的に益なく、唯韓國見物に過ぎざる結果に終らんことを恐るゝのみならず、船便の意外に悪るきを以て、徒らに留連の患を爲さんことを慮り歸計を決したり。但し當地にて何時まで船待すべきやは未定なり。

さりながら韓國を見たること僕に取つては眞に一大教訓なり。僕は韓國に對する日本の位置の到底今の儘にて已むべからざるを信じ、韓國を鞭撻して秩序あり、規律あり、文明人の棲息經營に堪ゆるものたらしむるは實に大日本國民の義務なることを深く信ずるに至れり。試に思へ比屋皆淨潔にして道路も亦平坦砥の如き間に介在するに茅屋あり、獨り不潔、汚穢を極むるのみならず、破壊、危険の狀あらば鄰人たるもの公益を維持するの上よりして其主人に迫りて改築の計を爲さしめざるを得ず。是れ隣人の權利にして又義務たるに非ずや。僕の韓國に來らざるや韓人の猶ほ自ら振ひ、自ら強むるの餘地あるを信せり。足一たび韓國を履みて後は此信仰は一變せり。韓人の自ら振作するを待つは殆んど枯木の芽を出すを待つに異ならず。如かず、日本は隣人の義務として獨り其爲すべき所を爲さんの

み。此新信仰を僕の心に生せしめたるものは實に此遊の賜なり。

平壤に於ては僕は牡丹臺に上り、更に所謂玄武門を見、七星門を見、義州街道より箕子廟をも望むことを得たるのみならず。市街を縦横行し、領事にも逢ひ、靜海門城壁の上を左に廻り、更に折れて大同江岸に出でたり。是れ數時間の中に其大體を視察せんとしたるが爲めなり。總て見る所は京城と殊ならず、唯商人は京城よりも勉強し居るやうに感じたり。

平壤にて一學究の二三の少年を集めて書を教ふるものに逢ふ。此人は基督教信者の由にて其趣を紙に書きて入口に記るしあり。僕は之を訪ひて我王師は百戰百勝を以て誇るものに非ず、秋毫も犯さざるを以て誇るものなりと書きて見せしに彼れは感謝の意を表したり。韓人にはづるき者多く耶蘇信徒たるを護符として外人の保護を得んとするものなきに非ずと兼ねて聞きたるが、此人も或は其流なるやも知るべからず。

韓語は日本語と兄弟にして文章の組立も同じことなれども風俗習慣は日本よりも支那に似たり。其通邑大都必ず廻らすに城壁を以てするもの似たり。其道路の狭くして不潔なること似たり。其人家に厠なきこと似たり。思ふに諸城悉く南門を莊麗にするものも亦支那の風なるべき歟。韓人の俗に於て日本人の及ばずと思ふものは總ての建築及び器物の堅固にして長久に堪ゆる性質のものなること是なり。乃ち書籍の如き、皿、鉢の如きも日本の如きやにこきものはなきなり。

(五月十七日)

素人の兵學

記者、朝鮮よりの歸途、玄海灘を過ぎ船中窃に思ひけるは濟州島は地圖にて見れば全羅道の直ぐ近處にてしかも朝鮮第二の高山漢梁山と云ふがあり。然るに濟州と全羅道の間を過ぐる汽船の甲板よりは青天にても漢梁山の頂を見ると能はず。然らんに汽船の舷頭より目に入るべき海面はほんの僅の部に過ぎず。此大海に十艘二十艘の船を散らし置きたりとて、たとへば廣き座敷に蚤の飛ぶが如けん。兵學者の方にては海權と云ふことあり、既に敵に海權を得られたる上は手も足も出ぬものゝやうに言囉せども、浦鹽の艦隊ももう日本艦隊に見付かつたらば百年目と覺悟し運を天に任かせ、大膽にも出陣し來らば、何分廣き海の上の事なれば我艦隊の眼をかすめて太平洋に逸し去らんこと必ずしも難事に非るべき歟。詰る處は其事の成否は露艦に勇氣ありや否やの詮議にして、若し勇氣だにあらば左様の事も成るまじとは限らず。まして昨今は露國海軍の形勢、日々非にして、どうでも一奮發せねばならぬ有様故、常理を以て之を推すも窮鼠却て猫を食むの勢なり。されば今頃は露艦の對島海峡に出さうな時分なり。我船若し不幸にして金州丸同様の目に逢はば如何。日本男兒の面目として、まさかに、おめ／＼降参もなるまじければ今より其時の處置を考へ置くも敢て餘計な心配とは云ふべからざる歟と。

と、一夕思案したることあり。こは今度の事あるが故に思付きたる所謂事後の思想に非ず。其時人にも話して杞憂を笑はれたる次第なるが素人の兵法も時には當ることあり。露艦遽かに對島海峡に出で、我運送船を打沈め許多の忠臣義士をして怨を吞んで海中の藻屑とならしめしは誠に以て何共申様なき仕合なり。軍に怪我のあるは當然の事にして此れ式の事は勿論今度の大局に故障となるべきものには非ず。まして戦死の將士が健氣なる振舞に至つては却て敵をして我武勇の烈しきに恐れ慄かしむべき次第なれば、我輩と雖も其の策略に遺算ありしとて、強てそれを尤めんとするには非ず、益す其の盡力を願はんとするものなれども、唯一事の希望に堪へざるは日本の人民たるもの今少し軍事に關する智慧を研ぎ、今少し素人の兵法を講じ少しの事に騒がぬやうになると共に其筋の人も亦好んで此素人論に耳を傾けんこと是なり。何の技藝にても専門家のみ獨り善がりにして素人の批判を聞かざれば上達するものならず。野夫にても手柄の者あり。岡目は八目の徳あり。今度の軍には限らず、外國との戦争は、詰る所國運の決する大切の場合なれば、軍略兵法は専門家あれば我は知らずとして、すまして居ては相濟まぬ義理なり。誰れにても險呑なりと感したることは險呑なりと云ひ、妙計なりと思付たることは妙計なりと吹聴し、國中一體心を一にして共に國の繁昌に苦心すべきのみ。然るに兵法戰略は秘事魔法の如く心得、素人の敢て嘴を挿むべき處ならずと斷念し、見た事も、聞いた事も、思ひ付たる事も言はず、語らず、只管其筋をのみ當にして自分の耳目を軍の大事に用ゐず、それにて國

民の本分足りと思ふは僻事ならずや。其筋に於ても愚論も其心は國を憂ふるに外ならざれば其心だけは買ふべきものなりと思ひ軍機に關はりある事にも成るべく素人の發論を促し、或は其報告にして軍略に益あらば勳章を與へ褒美を遣はし勉めて耳目を開くの策を取りたらんには、少々うるさき事ながら意外の奇禍を招くが如きことなかるべき歟。十目の見る處、十指の指す所は嚴なりと古人も曰へり。關ヶ原の役、慶長五年九月十五日の朝、家康卿勝山より關ヶ原へ本陣をすゝめられ、さて一年がよりては骨の折るゝ事よ、忤が居たらばこれ程にはあるまじ、内藤四郎左が來ねば斥候に遣るべき者もなし、渥美源吾は居たらん、呼べとのたまふ。源吾參りければ敵のさま見て來よと命せらる。やがて馳せかへり、今日の御軍、かならず御勝利ならむ、早く御馬をすゝめ給へと申す。先手の方に鐵砲の音聞ゆるやと問はせ給へば誰れも未だ御答せざりしに、年頃御馬の口取にすゝと字せし老人あるが、殿よ戰はずでに始まりしと見えたり、はやしく御馬を出し給へといふ。汝何を知りてか、さはいふぞと問はる。すゝり答へて、さればにて候、さきまで鐵砲の聞へしが、今やみつれば定めて鎗合になりしならむと申したりしかばさらば関の聲をあげよと命せられけりとぞ。軍機は重き事なれば老馬丁の知る所ならずと斥けんは容易なることなれども、英雄の大將は時としてかゝる下人の云ふことも聞くなり。昔の軍に関の聲を揚ぐる潮合を定むるは大切の事にて勝負も之に依つて定まる事なるに、天下分目の戰爭たる關ヶ原に於て東軍の関の聲を揚ぐべき時機が、文にもあらず、武にもあらず

老馬丁の一言に依つて決せしことを思へば、素人論未だ必ずしも悔るべからざるに似たり。記して世人の批評を待つ。

(明治三十七年六月日露戰爭實記第十八號)

梅里先生の集を讀む

(日本文明の真相)

外國にては我日本が遽かに強國になりしとて恰も瓢箪より駒の出でし不思議の手品の如く思ひ遽かに日本を研究せんとするものあり。さりながら急ごしらえの歴史論、肯綮に中らぬこと多し。抑も日本の今日ある決して不思議に非ず。大化の昔、隋唐の制度を輸入して律令を定めたる時より日本は唯人真似を以て満足したるに非ず、朝鮮の如き奴隸的摸倣者に非ることは令の文を一讀したるものゝ直ちに看取せざるを得ざる所なるべし。何事も外國の真似をしたりと云はれし其時代にさへ、日本人は外國の文物を生吞せずして全く自國流に同化したる迹の著るしきものあり。此特性は日本の歴史に終始し、日本人種は何時にても周圍の主人となるべきものにして周圍の奴隸となるべきものならざることを表はしたりき。

外國人にして日本人に此特性あることを觀察したるは羅馬教會の宣教師フランセス、ザヴィエールを以て始とすべき歟。そは此慧眼なる僧侶は日本に派遣すべき宣教師は尋常の人物を以てすべからず、

日本人の頭腦は極めて鋭敏にして理論に長じたれば學殖ある人物に非れば到底日本人の討論研究に應酬する能はざるべきことを認めなければなり。而して彼れが此の如き認識を爲したる當時は日本に於て教育制度の甚しく破毀せられたる所謂元龜天正六雄八將時代なりしことを思へば我輩は益す日本人種の聰明に就きて自負の念なきことを得ざるなり。

日本が支那以外の文明に接觸したるは實に當時を以て始とす。而して日本人種は直ちに其非凡なる同化作用を表はしたり。元より明に及べる時代に於て支那人の泰西文明に接觸したること蓋し甚だ久しかりき。而れども支那人は纔に曆法を改革し、武器の二三を改造したる外、何の感應を其國民生活上に現はさざりき。回教徒が齋らしたるアレキサンドリアの科學も、アルメニアの宣教師が携へ來りたる東羅馬の宗教も、遂に石佛の如き無感覺なる漢人種を動かす能はざりき。然れども日本は異なりき。日本人と羅馬宣教師の接觸は支那の當時に於て泰西文明に接觸したる時日に比すれば甚だ短かきものなりき。然れども日本人民は之が爲めに殆んど其生活を一變せり。日本人民の多數は直ちに其信仰を變じて基督教徒となりしのみならず、甘んじて殉教者となれり。彼等が其宗教の政治家に迫害せられし時に於て現はしたる深き信仰と忠誠なる殉教的的精神とは歐洲の教會史に於てすら稀れに見ることを得べき熱心敬虔の例なりき。金銀鑛は新來の法式に依つて開かれたり。而して遽に黄金の產出を増加せり。武田信玄の如きは葡萄牙の制に倣ふて貨幣を作れり。而して是れやがて日本の幣制に新

式の模型を將來すべき端緒となれり。築城の法は一變せり。舊式なる山上の城は化して西洋風を折衷したる平地の城となれり。小銃は獨り輸入せられたるのみならず、模造せられ、遂には日本は當時の極東に於て精巧無比なる小銃を產出する國民となれり。大砲の輸入は少しく後れたりしも亦泰西の式に依つて作られしは當時の遺品を見るもの、首肯せざる能はざる所なり。兵器の改造せらるゝと共に操練の法も亦改められたり。而して是れ亦泰西の要素を注入したる痕迹あるは勿論なり。「カッパ」等の名が今日に残れるが如く衣服の制も變じたり。「カステラ」、「コンベイトウ」、「アルヘイル」等の名が直ちに自ら證するが如く食物も亦變じたり。醫術も一變せり。印刷術も一變せり。斯くて徳川氏の鎖國政策を取ると共に外人の足迹は日本の土地に印せず、外國の宗教は日本の國禁となりしと雖も、而も此時に與へられたる羅馬教文明の激動は遂に拭ふべからざる痕迹を日本人の生活を逗めつゝ、日本人種が支那人の如き執拗にして他國の文明を理解せざるものに非ることを證したり。鎖國の當時と雖も日本人は決して世界の文明に對して無感覺のものに非りき。新井白石の采覽異言、西川某の華夷通商考の如きは正徳享保の時代に於てすら日本人の聰明なる部分には西洋の文明を度外に置く能はざるの感覺ありしことを證せり。而して天明寛政の際に於ては直ちに蘭文を研究して蘭書を讀まんとするものを生じたり。梅里先生曰く、

天明寛政の際、才識特抜の士、月池、蘭化諸先生及び予の王父の如きあり、嚮然として輩出す。以

爲らく絶域の横文遽かに視れば蚊脚の如しと雖も、未だ必ずしも其義無くんばならず、文にして義あらば豈讀むべからざるの理あらん哉、苟も之を讀んで隆治の萬一に裨あらば則ち其功豈に風月に嘯詠し、章句を尋摘するの爲に賢らざらん邪と。是に於て斷然志を起し、此に従事す。思を彈し力を竭くして、而して僅に能く其梗概に通じ以て荷蘭文學の始を發するを得。抑も亦勤めたりと謂ふべし。(原、漢文、今直譯す、以下之に倣へ)。

梅里先生とは誰れぞ。嘉永安政當時に於て大阪の緒方洪庵と共に日本蘭學の二大家と稱せられたる江戸の杉田成卿を云ふなり。梅里先生の此に所謂月池、蘭化と云ふものは桂川月池、前野蘭化なり。其王父と云ふものは杉田鷗齋なり。而して特に注意すべきは是等の諸氏が皆獨力を以て直ちに其至難の業を創めたることなり。日本人は始より終に至るまで獨立して周圍を解釋するものにして周圍に併吞せらるゝものに非るは此處にも明かに其然ることを示しぬ。此の如くにして文學の世界に於て眞に英雄的努力と稱すべき經營は始められり。恰も萬里遠征の孤客がペピロンの楔形文字若しくは埃及の象形文字を字典も案内書も無くして讀まんと思ふが如き難事業は其長き道中の第一歩に上れり。而して彼等は遂に成功せり。直ちに蘭書を読み得たる結果より生じたる最初の翻譯書は始めて日本文學の庫中に加へられたり。

斯くの如くにして日本人は其鎖國の時代に在りても、自ら暗中を摸索して文明の絲に觸れ、此絲をたどりて早く世界の思想に達するを得たり。梅里先生、全體新論(支那に於て外國宣教師の著はしたる解體書なり)に題して曰く、

全體新論、航海金鑑、二書共に歐羅巴人の手に成る。曩に魏源の海國圖誌あり。亦概ね傳聞する所を記すのみ。直ちに洋書に就て譯するものに非るなり。夫れ堂々たる大國にして外蕃通交容るゝもの年あり。而して外蕃已に能く其の書を読み其の文を屬するものあり。而して本土は却て一人洋文を読み洋文を譯するもの無し。豈に怪しむに足らざらんや。是れ他なし、其の尊大自ら居るの弊に由るに非ずして何ぞや。皇國の人、既に荷蘭の文を讀み、又從つて之を譯するもの殆んど茲に百年なり。是を以て天文地理人體の説より以て巧藝技術の末に至るまで陸續として書を著はし、而して世に行はるゝもの鮮からずとなす。是豈人智特絶、漢土に超過するものあるに由らざらん耶。

是れ支那は久しく外國に交はりて遂に未だ外國の書を読み外國の書を譯する能はず、僅に外人の漢文を作るものに依りて外國の思想を輸入するを得たれども、日本は未だ外國に交はらざる數十年前より早く自から外國の書を読み外國の書を譯したるを曰ひ、二國の文明が全然其素質を同ふせざることを論じたるものなり。我輩は多く日本文明を論ずるものを見たり。而も未だ此論の精透なるが如きものに逢はず。日本文明の先導者たる梅里先生は最も善く日本文明の真相を解するものなり。

人或はペルリ提督の渡來を以て日本に新文明を將來したる拂曉となし、日本は急激なる速度を以て泰

西の文明を消化したるものなりと爲す。是れ史學上の大誤解のみ。日本人の胃の腑と雖も一日の消化作用には自ら分量あり。日本人は一躍して直ちに世界の文明を消化し得たるに非ず。日本人民の同化作用は鎖國時代より蘭學の溝渠を通じて早く世界の文明に及び、ベルリ提督渡來の時に至るまで常に絶へず未來の激變に應ずべき準備を爲しつゝありしなり。

日本の文明を眞面目に研究せんとする泰西史家にして若しヘルリ提督が浦賀の關門を叩きしより七十年前に獨立して蘭學を研究したる日本人の手に依りて人身解剖書の翻譯せられたることを聞き、十四年前に二十二歳の一青年が和蘭の生理書に依りて猿猴を解剖して最も錯雜したる頭腦を研究し、此青年が二十五歳にしてナポレオンを歌へる詩を作り、二十八歳にして江戸城に召されて和蘭國王の書を譯し、三十四歳にして新式の種痘法を譯述出版したることの疑ふべからざる事實なるを知らば彼等は日本の文明に對する解釋に於て、恐らくは其態度を變せざるを得ざらん。此青年は他國の文明に對する日本人の鋭敏なる消化力を具體的にしたるものにして、則ち我梅里先生に外ならざるなり。

日本の文明は猿猴の模擬に類するものに非ず。日本人の思想は獨立なり。日本人の研究は泰西人の指導に奴隸的服従を爲したるものに非ず。日本最初の蘭學者は蘭人に隨從して學びたるに非ず、蘭人と個人的關係ありしものに非ず。乃ち梅里先生の如きも生涯一たびも蘭人と面晤したること無かりしなり。而も彼れは善く蘭文を作れり。玉川紀行を蘭文を以て草し、赤壁の賦を蘭文を以て譯したり。彼

は心を以て心を読みしものなり。日本人の心を以て泰西人の心を解釋し、而して更に泰西人の心を以て日本の文明を解釋したるものなり。其遠西扶歇蘭醫誠を讀むと題する詩の如きは讀むものをして彼が其心術道德に於てすら既に泰西文明の眞髓を會得したるものなるを想はしむ。彼は亦時として酔て「フレイヘイド」の語を口にしたることありと云ふ。「フレイヘイド」は即ち蘭語の「自由」なり。誰れか知らん泰西政治の警語たる「自由」の觀念も亦鎖國以前に於て日本青年の心に胚胎したることを。日本國民は其文明の根底を培養したる先輩に對して忘恩者たるべからず。戰勝の原因は文明の優勝に在り。文明の優勝は素養に在り。我輩依つて梅里先生の事を捻出して以て現代の少年に告ぐと云爾。先生名は信。字は成卿。安政六年歿す。年四十二。墓は西久保天德寺中に在り。

(明治三十七年七月日露戰爭實記第十九號)

人文上、道德上の優勝

我輩は戰爭の未だ始まらざりし殆んど一年前より必ず露西亞と戰はざるべからずと主張したり。當時我輩の説く所を以て過激なりとするものあり。甚しきは一種の攘夷論者なりと云ふものすらありたれども、我輩は戰は決して避くべからず、避くべからざる戰なれば寧ろ早く戰ふに如かずと信じたるが故に、時人の嗤笑を顧みずして盛んに主戰論を唱へたりき。

其頃なり。例の大國病は一部の人士に浸染し、露西亞の恐るべきことをほめかすものあり。我輩は其決して然らざることを論證せんが爲に幾たびも露國の寧ろ悔るべき所以を論じたり。當時の論旨は武力の優劣に至つては我輩の知り得べき所に非ず、されど人文の上、道德の上より推測して露國の兵は決して我國より強きこと能はずと云ふに在りき。今日と雖も我輩は戦争に就て専門家の如く何をも判断し得るものに非ず。されど智識、人文、道德、法制の上より其國力の優劣を論ずることは即ち爲し難きに非ず。我輩は猶ほ此點より依然として露國の必敗を卜せんと欲するものなり。

既にして戦は始まれり。幸にして我輩の豫言したる所は着々として事實となれり。然るに戦端の開かるゝと共に一種の極端なる儉約論者あり。しきりに消極的の收縮策を唱へ、其勢將さに國家を誤らんとするものゝ如し。我輩は之を見て窃に憂に堪へず、即ち非儉約論を唱へて其時局に適應せざる愚論たるを説破したり。其後、世間に於ても我輩と略ぼ同意見の議論盛んにして愚かなる儉約論は幽霊の如く亡びたり。

然るに其頃海軍の成功著るしきと共に陸軍は未だ其活動を始めざる時なりしかば、しきりに陸軍の効力に就きて杞憂を懐くものあり、露國は世界第一の陸軍國なれば日本軍の陸上に於ける成功は海上に於ける成功に及ぶべからずなど云ふものなきに非りき。されど是れ全く我輩の所見に反せり。我輩は日本の寧ろ陸軍國と云ふべく、日本海軍の如きは日本陸軍に比すれば猶ほ改良進歩の餘地あるものな

るを信じたるが故に更に陸軍必勝論の一篇を舛して江湖に訴へたり。當時の論旨も亦専門的の觀察よりは寧ろ人文、道德の上に重きを置き、日本陸軍の必勝すべき所以を斷じたるものなりしに此觀察も幸にして多く違ふこと無かりしは爾後の戦記を読む人の必ず首肯せらるゝ所なるべし。

今や露西亞は其罪惡を悔悟する乎、然らざれば罪惡の結果なる滅亡に赴くべき悲境に在り。露西亞に取つては眞に氣の毒の至なれども他國に在つては以て殷鑑とすべきなり。露西亞にして始より内は自由の政を布きて人民の權利を尊重し、外は平和の政策を守りて他國の利害を犯すことなからしめば何ぞ今日あらんや。彼れ唯人民を壓して人民背かず、ポーランドを併せてポーランド抗せず、土耳其を侮りて土耳其屈し、支那を辱かしめて支那怒らざりしを以て、内は治國の法則を蔑視し、外は國際間の德義を守らず、遂に今日に至りしのみ。彼れにして若し始めより道德的優勝を以て世界に溢まば列國何ぞ彼れを侮るを得んや。我輩は露國をして今日あらしめたるは實に其道德的墮落に在ることを疑ふこと能はざるなり。道德的墮落は露西亞をして今日の悲境に沈ましめたり。同じ原因は何の國をも墮落せしむるなり。

我國の連戦連勝を以て單に武人の勇氣、武備の整備にのみ歸して其原因たる人文、道德上の優勝を度外にするものあらば、そは事理を解せざるの甚しきものなり。人文、道德上の優勝を外にしては天下眞に誇るべきものなし。我輩は今に於て我同胞と、我政府とが深く此の理を取せんことを望むや切

なり。何となれば人文、道徳に於て優勝なるもののみ最後の勝利は歸すべければ也。

(明治三十七年八月日露戦争實記第二十二號)

戦時に於ける青年訓 (録一章)

蠻風保存論

北魏の道武帝、賀狄干をして秦に至らしむ。姚興の留むる所となつて長安に在り書を讀む。尙書論語に通ず。舉止儒者に似たり。後歸る。道武其中國の人に類するを見て遂に之を殺す。

是れ賀狄干傳の記す所なり。人或は道武帝の舉、甚だ殘忍なるを惡む。而も竊に國家盛衰の迹を見るに風俗の變直ちに士氣の消長に關するものあり。アレキサンダー大王の波斯に克つや、自ら亞細亞の風俗に模倣し、更に亞細亞人をして希臘の禮文に嫻はしめんとせり。其意は之に依つて軍隊が爲したるよりも更に大なる同化作用を亞細亞と歐羅巴の間に成就せんと欲するに在り。王は此趣意を以て波斯より三萬の小兒を選び出し希臘の文學を學び兼ねてマセドニア流の兵式を訓練せしめたりき。而してかゝる風俗交換の結果は波斯をして希臘のならしむると共に希臘をして波斯のならしめたり。史家曰く斯くして希臘は戰に於て波斯に克ちたり。然れども風俗に於て波斯に破られたり。自由を崇び公徳を重んじたる希臘の士風は卑屈にして奴隸的なる東洋の風習に染みたり。而して希臘は遂に羅馬の

爲めに亡ばされたりと。

同じ風俗の傳染病は更に希臘より羅馬に移りたるもの如し。羅馬の未だ希臘と交はらざるや其人民は哲學を有せず、詩歌を有せず、美術を有せざりしかども、而も其道徳的、實際的なる國民の性格は優に四海に雄たるに足りき。然れども羅馬は遂に希臘に勝てり。而して希臘を通じて移り來れる淫猥なる東洋の風習は羅馬の心髓を腐敗せしめたり。羅馬の未だ希臘的感化を蒙ること少かりしや、其人民の家庭は清潔にして其母儀は模範的なるもの多かりき。たとへば愛國者グラツカス兄弟の父は平民の種姓に出でたれども、母たるコルネリアは有名なるシビオ、アフリカナスの後なりき。コルネリアの常に其子を誡しめたる言語は眞に其子をして愛國者たらしめざるを得ざるものなりき。彼女は曰ひき、我子よ何故に妾はグラツカス家の母と呼ぼるゝよりもシビオの女と呼ばねばならぬ乎と。彼女は貴族にして英雄たりしシビオの女として世に傳はらんよりは平民たるグラツカス家の母として名を青史に刻まんとを切望したりしなり。果然、此嚴格なる教育の結果は其二子をして身を國家に獻じたる愛國者たらしめたり。一事は萬事なり。我輩は此一話を思ふ毎に當時に於ける羅馬の家庭の清潔にして、而も雄壯なる教訓を存したるを思はざるを得ず。既にして希臘風は次第に羅馬人の家庭に入り。羅馬の盛んなるや婚姻の結びは最も神聖なるものとせられたり。而れども一たび東洋風の浸淫する所となるや此男女の大禮は最も輕きもの、最もゆるきものとなれり。シセロは其妻の老いて性情

の悪しくなりし時に之を離縁して若き女子を娶れり。小カト^rは彼れの爲めに諸子を生みたるマルシアを友人ホルテンシアスに與へ、ホルテンシアスの死せし後富みたる寡婦として再び彼女を迎へたり。ポンペイはシルラの命に依りて其最愛の妻を去り、既に他人の妻たりしものを娶れり。風俗の壞敗此の如し。羅馬の士氣は之が爲めに銷沈し、其國運は之が爲めに傾けり。而して其本く所は東洋風俗の傳染に在りとせば、我輩は道武帝の賀狄干を殺したるもの眞に其謂あるを感せざるを得ず。何となれば風俗の淵源は一家に在り、先づ惡習を將來したる一人を嚴罰するは是れ惡草を萌芽の中に刈るものなればなり。

エメルソンは十九世紀の文明に心酔するものに非りき。彼れは文明の光明なる一面を認識するを辭せざると共に其犀利なる眼光は早く既に文明の暗黒なる一面を見たりき。彼れは文明の人類に及ぼしたる結果を論じて曰ひぬ。社會は新しき技藝を得たり、而も之と共に古き本能を失へり。文明なる人民は車を造れり、而も之と共に脚力を失へり。彼れはセネカの時計を得たり、而も日影を見て時を測るの熟練を失へり。グリーンウィッチの星曆は發行せられたり、而れども彼れは星に就きては無智となれり。彼れのノートブックは彼れの記憶を失へり。彼れの文庫は彼れの智慧を弱くせり。基督教は基督教的の徳を建てたり、然れども之と共に天真爛漫なる自然的道德の力を失へり。野蠻人をして書を讀ましめよ、彼等はプルタークの英雄を解する能はざるに至るべしと。文明の結果は人をして柔弱ならし

め、人をして餘り多く専門的ならしめ、人をして餘り多く社會の助力に依頼せしめ、人をして餘り多く器械的ならしめ、人をして餘り多く物質的の包圍に厭かしむ。而して其結果は社會の顛覆に終るものなきに非ず。昔の羅馬人は其威力を以て世界を征服せり。羅馬人は勉強して世界に勝てり。世界の富は羅馬人を養へり。羅馬人は懶惰となれり。其體力は衰へたり。其生齒は減せり。而して羅馬は遂に北狄の亡ぼす所となれり。我輩は世人が此事實を見て單に過去の歴史とせざらんことを希望す。試に今の西歐文明なるものを見よ。何ぞ夫れ其本體に於て羅馬の文明に類するもの多きや。羅馬に於て分捕物の累積に飽きたる豪族は是豈今日に於て富の累積に飽きたる富豪に非ずや。彼れは劍を揮つて富み、是れは資本を應用して富む。其富を得るの手段に至つては固より同じからずと雖も、而も其一身に不相應なる便宜を吸収し、之が爲めに奢侈を極むるに至つては則ち一なり。羅馬に於て土地と自由とを失ひ、唯豪族の恩恵に衣食すべき位置にまで墮落したる市民は、是れ豈今日に於て資本と土地を失ひ、僅に賃銀に依つてのみ其生計を營みつゝある多數の自由民に非ずや。我輩たとひカール、マルクスならざるも此の如き現象を見て西歐文明の根底に一大醫療を加ふべきものあるを感せざるを得ず。此の如き文明の結果は唯奢侈あるのみ。唯人民の神經衰弱あるのみ。唯生齒の減少あるのみ。聞く所に依ればアングロ、サクソン人種の如きも近時の精細なる統計に依れば人口の増加復た昔日の如くなること能はずと云ふ。同じ原因は同じ結果を生ず。我輩は西歐文明の末路が、或は羅馬文明の末

路に類せんことを恐るゝものなり。

「来て見れば聞くより低くし富士の山」西歐文明の半面此の如し。我輩は日本人民の徒らに之に倣ふの要なきを見るなり。昔しはサイラス王時代の波斯人とメデヤ人とは同じ人種なりき。而も波斯人は山多き地に住み、メデア人は平地に住めり。メデア人は平地に住みて早く物質的の恩恵に浴せしと共に物質的の咒咀を蒙り、其平民は柔弱となり、其貴族は奢侈に習ひたり。波斯人は山地に住みしが故に物質的の恩恵に浴することメデア人の如くならざりしと共に物質的の誘惑を蒙ることも亦メデア人の如くならず、其人民は獸皮を着、水を飲むを以て満足し、絶へて所謂奢侈なるものあるを知らざりき。而して其結果は他なし、野蠻なる波斯人は文明なるメデア人に克てり。此事實は是れ一幅世界歴史の縮圖なり。ポロランド人と露西亞人とは均しくスラブ人種なり。しかもポロランドは早く西歐の文明に浴したるが故に其短所を學ぶことも早く露西亞人は後れて文明に接したるが故に久しく蠻氣を保てり。而して露西亞の世界をして畏怖せしむるものは實に其蠻氣に在り。其人民の粗食に堪へ、疲勞を知らざるに在り。支那の歴史を見るに其統治者たり、征服者たるものは學藝に於て詩賦に於て常に優等ならざる北方の人種なり。印度に於て嘗て盛なる朝廷を樹立したる人民も亦其北方の山地に住する蠻民なり。然らば則ち知るべきのみ。漫りに西歐の文明を摸倣するは決して日本人民の長策に非るなり。草鞋を穿ち、梅干と黒米とに満腹し、而して善く歐洲式の兵を遣るは日本人民の世界に重きを爲す所以なり。今や然らず、西歐風の家に住み、西歐風の料理を喫し、西歐風の寢室に眠るに非んば以て文明世界に伍し難しとなす。是れ日本をして其長所を失はしむる也。是れ日本をして其立國の基礎を破毀せしむる也。是故に我輩は今の所謂高襟者流に對して輕侮の念なきこと能はず。何となれば彼れは現代の賀狄干なればなり。但し我輩を以て西歐文明の結果を採用するを否定するものなりとせば、そは甚しき誤解なり。昔しは元人は無學の人民なりき。然れども彼等は他國の文明を採用するに於て少しも惜しむ所なかりき。元の曆法はトレミイの曆法にして實に支那の天文學を一新したるものなりき。元の巨砲は亞拉比亞人の創思に成りしものにして、元は此利器に依つて世界の征伐に従事したりき。史に稱す。

元の西域の人亦思馬因、善く礮を造る。世祖の時阿老瓦丁と同じく京師に至る。従つて襄陽を攻む。亦思馬因、地勢を相し礮を城の東南隅に置く。重さ一百五十斤なり。機發して聲天地に震ふ。撃つ所摧陥せざるとなし。地に入る七尺なり。宋の呂文煥遂に城を以て降る。元人江を渡る。宋の兵南岸に陣す。舟師を擁して迎へ戦ふ。元人北岸に於て礮を陣して以て之を撃つ。舟悉く沈没す。後戦ふ毎に之を用う。皆功あり。

元人何ぞ他人の長所を假るを厭ふものならんや。長篠の役、信長、家康に謂つて曰く甲州の人は騎戦に長ず、且勝頼は勇にして謀なし、必ず騎兵を馳せて衝突を試みん、我軍宜しく柵を列して其馳突を禦

ぎ銃を放つて之を斃すべきのみと。かくて織田氏の銃手三千、徳川氏の銃手三百は舊式なる甲州の騎兵を破毀したりき。是れまた日本の英雄が西歐文明の利器を應用したるものに外ならず。我輩何ぞ日本人に教ふるに世界の文明を輕蔑するを以てせんと欲するものならんや。而も他人の利器を採用すると他人の風習に化せらるゝは所謂人を致すと人に致さるゝとの別あり。我輩は日本人が世界の文明を用うることに於て常に自ら主人の位置を維持せんことを希望す。常に自ら他人の長所と短所とを看取して一概に模倣をのみ事とせざらんことを希望す。李斯の始皇帝に上るの書に曰く

夫れ甕を撃ち缶を扣き、箏を弾じ牌を搏つて歌ひ、鳴鳴として耳を快くするものは秦聲なり。と。秦人の音樂、何ぞ夫れ清楚にして且單純なるや。秦人の六國を威歴したる所以、蓋し此の如き質朴なる風習に在り。既にして南方淫靡の音樂は秦人の間に行はるゝに至れり。李斯の上書又曰く

鄭衛、桑間、韶虞、武象なるものは異國の樂なり。今や甕を撃つを棄て、鄭衛に就き、箏を彈ずるを退けて韶虞を取る。是の若きものは何ぞや。意の當前を快ふして觀に適するのみ。

秦人は既に其音樂を變じて南人的ならしめたり。其次に来るべきものは唯士氣の變遷あるのみ。我輩は李斯の上書を讀んで秦祚の短き所以、此處に徴すべきを知る。

我輩は獨逸皇帝に依つて發明せられ、我敵國に依つて今や盛んに唱へられつゝある所謂黃人禍なるもの、固より一種の政略に出でたる無根の妄言なるを知る。而も我輩黃人が自ら白人と殊りたる一種の

特性を有し、面して此特性の光明なる半面が今や日本人種に依つて發揮せられんとするは否定すべからざる事實なり。我黃人種は猛烈なる氣候に對する彈力に於て、欠乏に堪へ、飢寒を忍ぶ忍耐に於て今の白人が企及し得べからざるものを有す。人類分布の地圖を開きて之を見よ。總ての氣候と總ての境遇に適應し得るもの我黃人の如きは無し。此事實は露人の西伯利亞と滿洲に於て經驗し、蘭人の瓜哇に於て經驗し、人種問題に心を潜むるもの、總ての方面に於て看取する所なり。日本の文明は此の如き素質の上に立ちたるが故に世界の驚異する所たるのみ。されば我輩は自己の國民性を尊敬し、之を發揮せんことを欲す。徒らに文明の假粧に焦思し西歐式の生活を輸入せんとするは我輩の斷じて取らざる所なり。夫れ古今東西の風俗何ぞ必しも一ならん。スバルタ人の妻るや、先づ人の女を竊んで之を妻とし始めは其妻たることを隠し、男子は依然として公共の房室に眠る。其妻と遇ふを得るは唯秘密の會合に在るのみ。既にして妻、子を生むに及んで始めて公然夫となり、父となりしと云ふ。其俗何ぞ奇なるや。而も此の如き不思議の風俗を維持したるはスバルタの強き所以なりき。ケンプルの日本紀行に曰く

日本人能く勤勵し、又能く艱難に習へり。鮮小を得て足れりとし、賤者は諸草、諸根、龜鼈、螺蚌及び海草の類をもて生を養へり。裸頭足跣にて歩行す。水を以て常の飲とし、褌衣を着することなし。頭を置くに柔かなる長枕なく平面に寢て、長枕の代に木の小斷こざん、又は木筒もくとうの中徹く窪める上

に其頭を置き、又よく終夜寝ることなくして有ゆる艱難に堪ふ。

と。是れ貞享元祿時代の日本人民を観察したるものなりと雖も、現時に於ても日本人の生活が西歐人種に比して質粗、淡泊なるは疑ふべからず。所謂菜根を咬めば百事爲すべしと云ふが如き物質以上の鍛練は日本人民の特質なりと謂はざるを得ず。我輩は此の如き特質の永く保存せんことを願ふものなり。

之を要するに物質の累積は衣粧の累積の如し、益々人身を弱からしむるに足るのみ。昔しは大ナポレオンは其性情の素養に於ては固より時代潮流の粹を聚めたる者なりしかども其身體に於ては眞に一個の完全なる動物なりき。彼れは馬背に在ること十五時間にして猶は疲るゝことを知らざりき。彼れは薬餌を信せず、且之を用ゐざりき。彼れは若し病めりと感ずる時は自ら一流の醫療法を用ひたり。彼れは自己の當時の状態と極端に相反することを爲して以て其病を救へり。たとへば久しく何事をも爲さざりし後なれば、彼れは遽かに馬に乗つて六十哩を馳せ、若しくは終日獸獵せり。彼れは之を稱して自然の平均を恢復するものなりと云へり。彼れは又曰ひき、余の醫薬は斷食と溫浴なりと。其身體の剛堅、鐵石の如くなりしことを知るべきなり。彼れは其身體に於て野獸なり。其心情に於て文明人なり。之を野蠻の元氣を以て文明の主人たりと云ふ。我輩の日本國民に望む所は亦唯此の如きのみ。

(明治三十七年四月出版「戦時に於ける青年訓」)

孔子論 (録一章)

中庸信ずべからず

孔子既に歴史的人物ならば吾人は史的研究の方法に依つて先づ孔子論の材料たるべきものを調査せざるべからず。吾人は成るべく孔子の時代に接近したる書籍を撰んで、而して其内容の價值を定めざるべからず。此點に於て昔人の研究は固より吾人を裨益するものなり。されど吾人は昔人の研究が止まりたる所に止まるべからず。吾人は更に進で自ら無遠慮に古書を批判せざるべからず。吾人は獨り昔人の研究したる結果に満足せず、更に最も進歩したる近世的研究の方法を以て古書の原野を耕さるべからず。

從來孔子の傳記及び思想を研究すべき材料として、吾人に殘されたるものは所謂四書(大學、中庸、論語、孟子)五經(詩、書、易、春秋、禮記)左傳等なり。而も細かに之を批評して其眞に歴史上の孔子に達し得べきものを求むれば僅かに論語の一卷あるのみ。何を以て之を言ふ乎。請ふ余をして説を盡くさしめよ。余は先づ中庸の史的價值を定めんと欲す。何となれば中庸は孔子の孫たる子思の教訓を記載したるものなりとせらるゝものなればなり。

中庸は如何なる書ぞや。

今の中庸の世に出でざりし前に子思書若くは中庸と稱するもの、存したるは或は事實ならん。何となれば漢書藝文志に子思二十三篇ありと記し、又中庸説二篇ありと記し、後漢書王良傳に子思子、累德篇の名あればなり。されど其果して今の中庸と同性質のものなりや否は疑問なり。而して孔子家語の後序には子思中庸の書四十七篇を作るとあれば即ち魏晉以來中庸なるもの、篇數亦一定せざるなり。藝文志、中庸説の下に顔師古註して曰く「今の禮記に中庸一篇あり、本の禮經に非ず、蓋し此の流なり」と。即ち顔師古も亦藝文志の中庸説を以て直ちに今の中庸なりとせざりしなり。然らば即ち中庸が果して眞に子思の書たり、若しくは子思の學流を受けたるものなるや否を論究せんとせば先づ其内容に就て之を精査せざるべからず。

讀者は先づ中庸が、大學と共に禮記中の一篇として傳へられしことを記憶せざるべからず。(禮記の信ずるに足らざることは後章に於て之を詳にす)。

試みに中庸の首章を見よ。

天命之謂性。率性之謂道。修道之謂教。道也者不可須臾離也。可離非道也。是故君子戒慎乎其所不睹。恐懼乎其所不聞。莫見乎隱。莫顯乎微。故君子慎其獨也。喜怒哀樂之未發。謂之中。發而皆中節。謂之和。中者天下之大本也。和也者、天下之達道也。致中和。天地位焉。萬物育焉。

余は此一章の内に左の三思想の存在するを見る。

- (一) 天道と人道とを混一せんとするの傾あること。
- (二) 顯微、體用を一にするの傾あること。
- (三) 性と情(若くは欲)との區別を認むる傾あること。

黄老の學は一種の凡神論を唱ふるものにして始めより天地の大原因を論じ、宇宙の生滅流轉を説きたり。されど此の如き思想は仲尼の徒と稱するもの、言はざる所なりき。孟子に至つて始めて盛んに人性の善を唱へたれども、而も孟子の全篇を通じて未だ黄老の學に觸れたるの痕を見ず。唯だ中庸に於てのみ始めて天と性とを結合せんとするの意あるを以て之を察すれば其孟子以後の書にして黄老の凡神論(即ち天道)と儒生の性論(即ち人道)とを調和して此に組織ある一種の哲理を作るに至りたるものなること知るべきに非ずや。

中庸の記者が人道を以て單に人間の徳義たるに止めずして必ず之を天地の流行に調和せんとするの意あるは中庸を読むもの、看過する能はざる所なり。たとへば前に引きたる文に「致中和、天地位焉、萬物育焉」と云ひしが如き、詩の鳶飛魚躍の語を假りて道の流行を論じたるが如き、「能盡人之性、則能盡物之性、贊天地之化育、與天地參」と云ひしが如き、「君子之道、本諸身、徵諸庶民、考諸三王而不謬、建諸天地而不忤、質諸鬼神而無疑、百世以俟聖人、而不惑」と云ひしが如

き、「大哉、聖人之道、洋洋乎、發育萬物、峻極于天」と云ひしが如き、是れ人道を以て必ず天道に結合し、宇宙と人間とを打つて一丸とせんとするに非るはなし。其の哲理は則ち黄老に假りて、而して儒教の性論を以て之れを潤色したるものに非ずや。而して此の如きは禮記全卷の傾向にして中庸又其一篇なりしとせば即ち中庸が禮記と共に漢人の手に成りしものなるや疑なきに似たり。淮南子は黄老の流なり。而して曰く「率性而行、謂之道、得其天性、謂之徳」と。其語殆んど中庸と相似たり。是れ其同時代の思潮が生みし産物なることを證するものなり。

蘇子由、老子道德經に題して曰く、

予年四十有二、筠州に謫居せり。筠は小州なりと雖も古禪刹多し。四方の遊僧聚る。道全なるものあり、黄蘗山に住す。南公の孫なり。行高くして心通せり。喜んで予に従つて遊ぶ。嘗て予と道を談ず。予之に告げて曰く、子の談ずる所のもの、予、儒書に於て已に之を得たり。全の曰く此れ佛法なり。儒者何ぞ自ら之を得ん。予曰く然らず。予道を聞くことを忝くせり。儒者の無き所、何を苦んで、強めて以て之を誣るん。顧みるに誠に之れあり。而して知る莫きのみ。儒佛の相通せざる胡漢の相諳んせざるが如きなり。子も亦何に由て之を知る。全の曰く試に我が爲めに其の略を言へ。予曰く、孔子の孫子思、子思の書を中庸と曰ふ。中庸の言に曰く、喜怒哀樂の未だ發せざる、之を中と謂ふ。發して皆節に中る、之を和と謂ふ。中は天下の大本、和は天下の達道なり。中和を致し

て天地位し、萬物育すと。此れ佛法に非ずして何ぞ。顧みて從言する所の異なるのみ。全曰く何を以て之を言ふ。予曰く。六祖言ふあり。善を思はず、惡を思はず、方に是時を云ふなり、孰れか是れ汝本來の面目なると。六祖より以來、人此言を以て悟入するもの大半なり。所謂善を思はず、惡を思はざるは則ち喜怒哀樂の未だ發せざるなり。蓋し中は佛性の異名にして、和は六度萬行の總目なり。中を致し、和を極めて天地萬物、其の間に生ず。是れ佛法に非ずして何を以て之に當らん。

(下略)

是れ子由の慧眼善く中庸を看破したるものなり。老莊の道は宇宙の道なり。孟子の道は人性の道なり。中庸の首章は宇宙の道と人性の道とを打つて一丸としたるものなり。其議論の深遠にして哲學的なるは是れ思想の圓熟に達したるが爲めなり。史記の大史公列傳に曰く、儒者の道は博にして要寡しと。當時の儒家者流が其學問を統一すべき哲學に乏しきこと、老莊の哲學的なると全く相反するを譏れるなり。されど中庸を見れば何を要なしと曰ふを得ん。其一貫の哲理を有し、而も老莊の及ばざる所を補はんとするもの、如し。宜なる哉禪の哲學に感染したる宋儒が中庸を得るに及んで恰も飢餓を醫せられたるが如く感じ、之を孔門傳授の教訓なりと誇揚したるや。是れ中庸が時代を以てすれば禮記の他書と同じく後代の著作たらざるを得ざる所以なり。

中庸に曰く

子曰誠者天之道也、誠之者、人之道也、誠者不_レ勉而中、不_レ思而得、從容中_レ道、聖人也、誠之者、擇_レ善而固_レ執之者也。

此れ天道と人道とを調和するものなり。而して中庸の記者が誠の字を解釋して自然なりとするの意あるは「不_レ勉而中、不_レ思而得」の二句に依つて知るべし。而して自然の具體的なるものを以て聖人なりとするは中庸記者の哲理なり。夫れ自然を尊び、自然の化現を以て至人、若くは聖人と稱するは即ち黃老の意たるに外ならず。孟子にも亦「誠者、天之道也、思_レ誠者人之道也」の一句あり。且其盡心の篇の如きは往々にして中庸の説と相似たるものなきに非ず。而も中庸の説き得て精微なるが如くならず。且中庸の如く自然を以て聖人を説かず。中庸をして果して子思の書たらしめば孟子の之を説く更に相似たるものありしならん。而も孟子の全篇を通じて天道と人性との連絡を明かにすること中庸の如くならざるを見れば孟子の時、中庸の説なかりしこと知るべきなり。

中庸既に人性を以て天道の發現とす、即ち顯微、體用の論なきこと能はず。何となれば發展の教理は原因結果を一にするものなればなり。是れ其「莫_レ見_レ乎隱、莫_レ顯_レ乎微」と説く所以なり。而して其結論は即ち慎獨の説ならざるを得ず。故に中庸に曰く

君子之所_レ不可_レ及者、其唯、人之所_レ不見乎。詩云、相_レ在_レ爾室。尙不_レ愧_レ于屋漏。

是れ其教理なり。慎獨の教理は眞に倫理學上の貴重なるものなり。而も是れ論語の説かざる所、孟子

の言はざる所なり。何となれば孔孟の志す所は濟世に在り。人の中に在つて人の爲めに勞するに在り。慎獨の工夫に至つては未だ深く思ふに隙あらざればなり。獨り黃老の徒、盛んに内聖外王の説を唱ふるに及んで儒者又之に化せられざること能はず。是れ遂に慎獨の説を生じたる所以なり。されば慎獨を説くものは盡く後出の書なり。即ち大學の如き、荀子不苟篇の如き是なり。是れ亦中庸の孟子以後の書たるを證するものなり。

孟子は性善を説きたりと雖も、而も未だ性と情欲との區別を論せず。性と情欲との區別を論ずるは孟子以後の事なり。即ち荀子解蔽篇に道經を引きて人心惟危、道心惟微と云ひ、淮南子に人之性安靜、而嗜欲亂_レ之と云ひ、文子の語を引きて人性而靜、天之性也、感_レ於物_レ而動、性之害也と云ひ、白虎道に性者陽之施、情者陰之化也と云ひしが如し。蓋し黃老の學は靜寂にして天と一たるを其教理とす。莊子の所謂純粹而不_レ雜。靜一而不_レ變。淡而無_レ爲。動而以_レ天行。此養神之道也。(刻意篇)

棄_レ事則形不_レ勞。遺_レ生則精不_レ虧。夫形全精復。與_レ天爲_レ一。(達意篇)

水靜則明燭_レ鬚眉。水靜猶明。而況精神乎。聖人之心靜乎。天地之鑒也。萬物之鏡也。(天道篇)

と云ふものは善く此教理を明かす。夫れ眞如を説くものは必ず無明を以て之に對せざるを得ず。靜寂を以て性とするものは即ち感動を以て情慾とせざるを得ず。是れ人心道心と云ひ、性と嗜欲と云ひ、性と情と云ひ、漸く二心を分ちし所以なり。中庸の首章に喜怒哀樂の未だ發せざるを中と稱し、發して

皆節に中るを和と稱したるものは是れ明かに此の如き未發、已發の二作用を認めたるものにして二心論の感化を蒙りたるを證するものなり。

余は此等の理由を以て中庸を以て孟子以後の書なりとし、斷じて子思の作、若くは直ちに其學を承けたるもの、書に非ずとす。

然らば則ち中庸に依つて孔子を論せんとするが如きは所謂、木に據つて魚を求るの類のみ。

(明治三十八年二月出版「孔子論」)

富士につきて思出ることども

僕は信州に二の感心すべきものを得たり。一は味噌の味なり。一は紅葉なり。信州は豆のよき處にて味噌も従つて甘し。殊に寒國の故にや土人の味噌汁を用うること甚だ多し。即ち朝夕三度の食事に三度ながら幾椀を喫するなり。僕も同地客游の折は自宅にて味噌を作らせ、盛んに喫したり。窃かに味噌汁を甘しとする人民ならねば國の礎にはなりがたしなど、自慢せり。近頃は人の口が奢り、料理の書籍なども善く賣れる様子なれども、足利の末世にも同様の事あり。細川勝元などは淀川の鯉と外の鯉とを食ひ分けるほどの通人となりたれども、其代りに天下は陪臣陪々臣に歸し、鹽辛き料理を好みたる田舎者の信長に久しき榮華を奪はれたり。天下の權衡は遂に必ず味噌汁に鼓腹する人民に傾くべしとは僕の

窃に信ずる所なり。味噌の話は此位にして次に僕の信州にて感心したるは紅葉なり。今の弊家近邊は武藏野の一部にて秋色悪しからず。百舌の啼くなる林間の道を獨歩し、高く晴れし青天の末に稻の黄に、芒の白さを見れば詩人ならぬ僕も何やら詩中の人となりしが如き感を催さるるに非れども、日本の東海を洗ふ暖潮は此所に霜露の早く墮つることを妨ぐる故、草木の葉の秋に染まること少し。之に反して信州は土地高く、空氣は乾き、霜は繁き故か秋に至れば草木悉く美觀を呈し、或は黄に或は紅に或は紫に、遠所の山々恰も五色の毛氈を敷きつめたるやうにて、何とも形容し難き風情あり。土人は見て以て常とする故別段感心せざるやうなれども、僕は終日之に對して猶ほ飽かず思ひたり。中にも落葉松の紅葉は最も美事にて嘗て蘇峰君と共に佐久郡を演説し歩きし時、孤烟直上する淺間山の燒原に其林の連れるを遠く望みたる時の幻影は今も猶ほ追懷の種となるなり。さりながら信州の味噌汁は甘く、紅葉は美しくとも僕は猶ほ駿河の方を戀しく思ふ。駿河は僕が二十年の間暮したる所にして第二の故郷なり。僕は東京淺草の天文屋敷に生まれ、間もなく維新の騒動に會し、祖父母と共に駿府に徙り、其後殆んど二十年其所に育ちたれば、江戸兒と云はんよりは駿河の田舎者なり。信州も善けれども幼なじみの駿河には如かずと思へり。されば一年、駿河の故人に文通の端に

我戀は人にはあらじ駿河なる富士の高根の雪のあけほの

と書き付けたることあり。歌にはなるまじけれども、真情は此通りにて詐なし。就ては僕が富士に對

する初戀の惚氣を語るべし。僕の駿府に移りたる後、祖父と祖母とに連れられて、駿府より一里計り海の方に近き所に住みし伯舅某氏を訪ひたることあり。時に僕は六七歳なりしと覺へたり。駿府の町を離れて、祖母に負はれ、祖父にあやされながら田舎道を行くに、蓮華草など道端に咲き、暖日背に在り。祖母は其頃まだ五十にはならず、しかも氣丈の女性にて善く笑ひ、善く語りたれば道々も始めて田舎の氣色を見たりとて大いに喜びたる様子なり。時に祖父は僕を撫で、左衛門、あれを見よとて富士を指し示したり。これは僕がかの山につきての記憶の最もふるきものなり。伯舅の家には僕と同年輩なる従兄弟多かりしは僕は彼等と共に其日は終日遊びくらしたり。家の後に小川の流れて、それに大木の根の現はるゝを従兄弟等が馬の名を負はせ左衛門さん馬を見やうと云ひ、あの馬、打つてやれとて石を投げたることをも記憶す。其日は夕方に町に歸りしに途中にて溝水の路上に溢れ出で、草履の濡るゝを恐れたりしを、祖父の僕を抱きて飛越へたることなど今も眼の前にちらつくなり。外祖母は歌よみなりしかば従つて自然の風光を愛するの念も深く常に従兄弟と僕等に向ひ權現様は富士と茄子と鷹とが御好なりき、御身等不幸にして先祖以來の家業を失ひ邊土に人と爲りたれども田舎に住めば芋は畑は生り、富士は何時も目の前に在り、野邊の鶯、我ものにして暮らせば何の不足なしと教訓したり。左様なる人の訓董にて僕等も自然に富士が好きになりたり。それより十年ばかりの後大崩と云ふ處に遊びたることあり。此處は斷岸、絶壁の下を一條の道にて縫ひ、見上れば恐ろしき大きな

岩の僅かに蔦羅に支へられて墜ちざる計なるさま恐ろしく、僕の如き臆病者はとても落つきては居られぬ程なり。此斷岸絶壁の前は即ち駿河灣にして、崖の海中に落ちて島となれるものゝ上には松生ひたり。折節風強く怒濤岸に激して霧を爲す。其間に夕日をあびたる富士を見しは眞に美しく常には百倍も優りて見へたり。其後四五年目に駿河の加島と云ふ處にて英語の教師を爲し居りし友人方に一泊し、翌朝、玲瓏玉の如き井水をくみて顔洗ひ、思はず頭を廻らせば八朶の芙蓉、直ちに我眉に迫れるを見て是は又格別の景色なりと思ひたり。駿府の近處は山多く、徳願寺山、有渡山、清水山、賤機山久能山、三保の松原、清見寺皆僕の足迹到らざる所なし。而して皆富士を以て其風色を添ふ。村松村の瀧華寺は曲亭馬琴が富士を見るに日本一の處なりと稱し、高山林次郎の墓も近頃立ちたる所なり。惡しき景色にはあらねども僕に最も強き印章を與へたるは寧ろ大崩の富士なり。抑も人間と自然とは同じ太素より分かれたるものにて元來同根なり。自然に靈なしと言ふべくば人間にも靈なしと言ひ得べし。人間に靈あらば自然にも靈あるべし。何となれば陰陽未だ分れず天地未だ割判せざる根本に溯れば固より一體なればなり。されば人に戀することが若し道理あることならば自然に戀することもあるが如き嬌情とのみは云ふべからざる歟。されば僕は自ら富士に對する自分の惚け話が必しも痴情のみに非ずと信ずるものなり。

(明治三十八年十二月獨立評論)

エメルソンの智慧

萬物は默示なり。自ら語るものなり。

萬物は皆、自ら自己の歴史を書く。轉岩は山に其痕跡を残し、河は土地に其溝渠を通じ、動物は地層に其骨を遺し、蕨は石炭に其葉形を逗む。人間の各の動作は其同輩の記憶に記載せられ、其容儀と其顔とに記載せらる。智者は總て之を讀むことを得るなり。

自然なれ。(非巧論)

人は尊き内長質エンデレトリスなり。甜くあることは砂糖には容易なり。鹹くあることは硝石には容易なり。

自然より出で、他人を顧みざる者は「グレイト」なり。

野蠻人若し一たび書を読めば彼れは亦ブルタークの英雄を懐ふ能はざるなり。

活動するものは其活動の奴隷となる。

記者の意思以上なる思想より來れるものは神聖なり。諸々の記者の最も善き部分は其中に個的の何物をも有せざる部分なり。其自ら知らざる部分なり。其身體の自然より溢れ出づる部分なり。其自己の發明創意より來らざる部分なり。

自信論

自己に信任せよ。何人の心も此鐵線に觸るれば鳴る。

爾の中に在る者を擴張せよ。

人の中に人を導く指針あり。

最も神聖なる法律は我中に存する自然なり。

俗世に於て俗世の説に従つて生活するは容易なり。野外に於て自己の説に従つて生活するは容易なり。英雄は之に反す、俗世の間に於て綽々として野外の獨立を有する者なり。

(一) 社會の説に従ふこと勿れ。

(二) 過去の自己に支配せらるゝこと勿れ。

(三) 誤解さるゝことを恐るゝこと勿れ。

人は何ぞ怯懦なるや。人は「余は思ふ」「余は此の如し」と云ふ能はずして數ば聖賢の語を引照するなり。何ぞ野花潤草を見ざる。彼等は自然の儘にして咲ふに非ずや。

總ては一の中心に集る。我等をして動搖せしむること勿れ。

人心の中に大なる海あり、人は之を知らずして、他人に一杯の水を求む。

歴史論

此心歴史を作り、此心歴史を讀む。人心は同一なり、永遠の一部なり。

歴史は主観的ならざるべからず。

歴史の要は古人を今人の如くならしむるに在り。其處に及び其時を此處に及び今に易ふるに在り。歴史は一人の中に在り。

グアチカンに行くも、ネーブルスに行くも、人は唯人間の同一を見るべきのみ。
フィデアスの鑿、埃及人の鍔、モセス、ダンテの筆皆我内に在り。

萬有神教論

我れ萬物の中に在り、萬物我の中に在り。

我れは宇宙の一部なり、宇宙は我の全體なり。故に我の智慧は宇宙の智慧なり。宇宙の本源より流出するものなり。

花は落ち、花は開く、花は之に満足す。

自己は即ち最大原因の一性格に過ぎず。

祈禱は自己の内に在る神の靈が自ら其事業を善しと宣言するものなり。

人は神と一と爲りし時他に願ふ處なし。

總ての作業は祈禱なり。農夫の地を耕すも、舟子の楫を執るも。

流轉論

昨は笑ひ、今日は哭す、一人の我れに非ずや。昨は死人の如く眠り、今朝は立ちて走る、一人の我れに非ずや。

勢力は安息の瞬間に於て止む。而して一の過去より新しき状態に至る間に靜止す。水煙の灣中の上るが如く再び一の目的の爲めに進み出づ。——人の外に自然の勢力あり、人の中に自然の勢力あり、是れ永遠に亘るものなり。

我船は沈めり。是れ他の海に行かんが爲めなり。

本能論

智慧は宇宙の本源より流れ來るものなり。

時間と空間に超越し死生苦樂の羈絆を解脱するものは天地の奥より人心中に顯はれたる本能なり。

人間の行爲は二なり。「ダイレクト」(直接)と「レフレクト」(思慮)と。而して其最も人心を感せしむるものは「ダイレクト」の行爲なり。

宗教論

宗教は今の宗教ならざるべからず。我が宗教ならざるべからず。滾々として宇宙の本源より流れ來れる今日の宗教ならざるべからず。

神と人との間には中間物あるを要せざるなり。神と共に今日生存せよ。野花洞草の現在に咲ふが如くなれ。

萬物我に備はる

鳥の羽翼が空氣を豫定する如く人は天地を豫定す。天地の心は一也。

差別無差別論

差別を見るもの、事實と表面とを見る。——才能及び事業の人。(此世界の人、實際の方の人)。無差別を見るもの、萬物の一體を見る。——信仰及び哲學の人。天才の人。(理想に住む人)

精神と形式。目的と方法。

河は自己の岸を造り、各の理想は自己の溝渠を造る。活動の程度を計るものは、之を生じたる感情の程度なり。

人は活動す、而して其活動の奴隸となる。

第一の活動は經驗なり、第二の活動は禮式となる。向上、敬虔の念は禮典を生ず。而して禮典は向上敬虔の念を殺す。

原因は結果と分つべからず。方法は目的と分つべからず。種子は果實と分つべからず。結果は原因の中に存し、目的は方法の中に在り。

豪傑論

豪傑は大なる人なり、幅と長さの大なる人なり。必しも創意の人に非るなり。

英雄は凡人の累積なり。事功の堆積したるもの也。

最も大なる天才は最も多く他人より恩恵を蒙りたるものなり。

詩人は彼れの時と彼れの國とに一致するもの也。

天才は彼れの同時代の理想と必要とに驅られ、思想と事件の海に浮ぶものなり。

彼れは總ての眼の見る所に立つ。彼れの行く所は總ての手の指す所也。

天才は自己の動くよりも、自己を通じて大勢の動くものなり。

彫刻者が其同時代の神殿より學ぶが如く天才は其同時代より學ぶもの也。

戀愛論

人生の「エンカントメント」(恍惚、失魂)を生ずるもの。

或る時期に於て人の心を捕へ、其心と體とに革命を行ふもの。

彼れを其人種に結ぶもの。

萬物に新しき興味を與ふるもの、創思を開くもの、英雄的の行爲を鼓舞するもの。

非文明論

社會は新しき技藝を得たり、而も之と共に古き本能を失へり。
文明なる人民は車を造れり、而も之と共に足の力を失へり。
彼れはセネバの時計を得たり、而も日影を見て時を計るの熟練を失へり。
グリーンウィッチの星曆は發行せられたり、而れども彼れは星に就きて無智となれり。
彼れのノート、ブックは彼れの記憶を傷りたり。
彼れの文庫は彼れの智慧を弱くせり。
基督教は野性的道德の力を失へり。
野蠻人をして書を讀ましめよ、彼等はプルタークの英雄を解する能はざるに至るべし。

非社會論。非教會論

社會は合資會社なり。其株主は麵包を得るを目的とするものなり。自由を此目的の爲めに賣るものなり。社會の最大なる道德は一致なり。ピタゴラス、ソクラテス、イエス、ルイテル、コベルニカス、ガリレオ、ニウトンは非一致家なり。

人は説教者が教ふるよりも多くを知るものなり。

人は其神學よりも善き者なり。人は其知る處よりも賢きものなり。

(明治三十九年一月獨立評論)

カーライルの智慧

英雄論

總ての傳説、總ての處置、信條、社會等總て人の作りたるものは沈み去るべし、残るものは唯英雄崇拜のみ。

我等は偉人なしに何事をも爲し能はず。

群集の注目を以て其棲息する囿圍氣となすものは眞の英雄に非ず。英雄は其偉大なるものを彼れ自身の中に有するなり。英雄は自然が彼れの中に置きたるものを發展したるもの也。

英雄なき國は根なき林なり。葉と枝とのみなる林なり。枯稿すべきものなり。

英雄とは實在の生活を有するものなり。虚榮の爲めに生活せざるものなり。

臣下なき王は或事を爲し得れども、王なき臣下は何事をも爲し得ず。(人は案内者を要す。)

英雄は事物の内部に於て生活する者なり。一時的のもの、煩瑣のもの、下に潜みて多衆の見る能はざる眞實なる、神聖なる、永遠なるものに於て生活するものなり。

彼れの生涯は自然自身の永遠の心情の一部分なり。英雄崇拜は何處にも何時にも存在す。人は人の中に在る神聖なるものを敬す。

總ての英雄は秩序の子也。彼れの天職は秩序なり。彼れは秩序を作りつゝある者也。治者に人物を得よ、總ては得られしなり。之れ微つせば憲法も議會も何の要なきなり。自由平等を唱へて偉人の權威を敬せざる世は侏儒の群塊に過ぎず。虚偽無力の權威あるを見て世に偉人の權威なしと信ずるものは賈貨あるを以て眞貨なしとするものなり。

英雄は不定形なる呻吟に一の聲を與ふるものなり。人民の呻吟を化して意義ある聲となすものなり。形式とは英雄の開拓したる道路なり。適當なるものが適當なる位置を得、尊敬せらるべきものが尊敬せらるゝは神の法なり。眞の王を求めよ、彼れは神聖なり。人間は彼れを得るまでは満足せざるなり。革命とは何ぞ、眞の王を求むる動作なり。

處世論

年齢と疲勞とが將來せし平和は外見的幸福にして眞の幸福にはあらず。戦争を續くるは、敗北し、若くは捕虜となるよりは善し。

貧乏論

人間は金錢の萬能力に就て聞くに厭きたり。余は寧ろ曰はんとす貧は有害に非ずと。文士は貧ならざ

るべからず。其純粹と雜駁とを明らかにせんが爲めには貧なるを要す。メヂカント派の桑門は乞食を以て其教規となせり。是れ基督教の主義より發すべき自然にして必要なる發達なり。基督教は貧乏と困難と衝突と、十字架に懸けらるゝことゝ、此世に於ける種々の不幸と汚辱とを基礎として起ちしものなり。余は曰はんとす、貧困を知らず、貧困より貴重なる教訓を學ばざるものは教育の好機會を失したるものなり。

金錢は或事を爲す、而れども總ての事を爲すものに非ず。

活動論

最も眞實なるものは是也。賢き人の我等に教ふる所は是也。如何なる種類の疑惑も活動に因りての外散すべき道なし。……最も爾に近き義務を爲せ、爾が義務として知る所のものを爲せ、第二の義務は次第に爾に明らかなるべし。而れども人一たび其義務を爲せば更に前路に理想と義務の横はれるを見るべし。實際の前には常に理想あり。此故に活動せよ、信せよ、生活せよ、而して自由なれ。事情は理想に達すべき材料のみ。

宗教論

余若し萬物の中心に智慧あることを信せずんば地上に於ける余の生活は堪ゆべからざるものなり。上帝は一たび萬物を造り、其後は之を自然法に附し去りて顧みざるが如きものにあらず。

世界は機械に非ず。輪と小齒輪の動機、自利、防禦、平衡に因りて動くものに非ず。其所には齒輪の響き、議會の多数よりも遙かに偉大なるものあり。

眞理は喝采に非ず、投票に因りて計られ得べきものに非ず。

「セルフ」(自己)を愛するは總ての悲哀の根原也。

「セルフ、デナイアル」(自己を否定する)は無限に達する唯一の道なり。

人若し思ひ死に至れば人生の秘鑰は與へられたり。人生は神靈あるもの、驚くべきもの、恐るべきものとなるなり。

此世界には神あり。神の許しなきものは成立するを得ず。人は其胃を満足せしめざるべからざるが如く其靈魂を満足せしめざるべからず。

人は或る物を信ずるに因りて生活す。多くの事物に就きて議論し討論することに因りて生活せず。

詩人論 (文學論)

詩とは人の中に存する不朽の眞理に賦するに五官に因りて知覺すべき形を以てするものなり。

詩人の功業と性格とは論理學に因りて定むべからず、其個人性を研究するに因りて定むべきなり。

詩は人をして大膽なる目的を起さしめ、善き戰を戰はしむ。

今の文學者は大抵思想界の王に非ずして人民の寵人なり。忽ち揚げられて、忽ち抑へらるゝものなり。

り。

詩人は思想界の暗黒を照す太陽なり。詩人の死は太陽の没したるなり。

戰爭論

戰爭とは槍と鐵砲とを以て或る問題を解釋するものなり。

正直論

心にして死せば眼は見ることを能はず。死したる心の中に残れる智識は狐の智識カラスの知恵たるに過ぎず。

信任すべき人を發見せよ。誠實なるものゝみ誠實を認識することを得るなり。

智識は談話に非ず、論理を用ふることに非ず。見ることなり、たしかむることなり。

名譽論

名譽は價値の確證にはあらず。瓦石も光ることあり。

(明治三十九年一月獨立評論)

新公論社の問に答ふる書

啓上。僕少年の時西國立志編を讀みて天地の間僕の如きものと雖も脚を着くるの地あるを知り、頼襄、新井君美の著作を見て始めて史學文章に志し、英書を解するに及んでマコレイ集及び英國史を耽

讀し、カライルに依りて人生の戦闘に加はらんことを欲し、エメルソンの依りて安心立命の地を學びたり。僕は耶蘇教徒にして十餘年前一たびは傳道師の生活を送らんと欲したれども當時に在りて所謂神學の書は僕に何の興味をも與へざりき。僕は神學書よりも寧ろ世界の聖典（聖書六經、佛教藏經道藏諸書等）を讀破するを以て我宗教的經驗を養ふべきものなりと信せり。故原抱一庵一日僕を訪ひ勸むるにユイゴの哀史を讀むべきとを以てす。僕則ち之を坊間に購ふて讀下一番眞に卷を釋くことを知らざりき。僕が社會問題に注意するに至りたるは實に哀史に依る。僕は又物徂徠の著作に於て多大の興味を感じ徂徠先生若し今の世に在らば僕は必ず其弟子の一人たるべしとすら思へり。徂徠集を讀みたる後の僕は前の僕に比すれば確かに一進境を劃したりと信ず。近頃伊藤仁齋父子の書を読むに及んで仁齋の更に徂翁よりも高さ一等なるを知りて愉快に堪へず。趙翼二十二史劄記も亦最も多く僕を益したるものなり。熊澤蕃山の集義内外書は其有名の書たるに關はず僕の興味を催すこと少なかりき。僕は左氏よりも史記を愛し、道德經莊子の解し難きよりも淮南子の讀み易きを愛す。漢詩に於ては杜甫よりも李白を好み、李杜以後に在りては最も韓蘇を好み。明清の詩に至りては僕の如き門外漢の窺ふべからず、解すべからざる所なりと諦め居れり。小説は日本に於ては紫氏、近松、馬琴の外見るに足らず、支那に在りては唯水滸傳一篇眞に天地間罕に見る所なり。現代の名公鉅匠に於ては僕は福澤、福地、田口、徳富四君を好み。其次には竹越三又を愛す。國民之友第一號は僕之を越前福井

の足羽山上に讀み、山に上り山を下るの間途に山光水色の何たるを知るに及ばざりき。是れ其之が爲めに心を奪はれしを以てなり。小説家は紅葉の作多く見るべし。但し其金色夜叉は僕窃に以て傑作に非ずと爲す。蘆花君近時の作、津々として滋味あり、卷を開けば遂に卒業せざること能はず。廣津柳浪、其多作疲れざる處氣力畏るべし。僕最も之を愛讀す。故に貸本屋の僕を知るもの僕を謂つて柳浪黨となす。小杉天外も亦僕の好んで讀むところ。其一篇出づる毎に僕は必ず之を讀まんことを欲す。露伴に至つては僕始めより未だ其可なるを見ず。駿河の風光、最も愛すべし。大崩の富士、眞に絶奇となす。右貴問の趣意に適するものなるや否やを知らざれども有の儘に所見を述べ申候。不一。

（明治三十九年一月新公論）

福地櫻痴

國民新聞記者足下。僕は櫻痴先生起たざるの報を足下より得たる時、或る殘酷なる勢力の來りて遽かに僕を打撃したるが如く感じたり。ルーテルは曾て其友人の雷に撃たれたるを見て人生の無常を感じたりと云へり。文壇の老将櫻痴先生に對して僕は固より同輩行にあらず。而も籍を文人の末に列するものは先生の死、悉はしく云へば奇才を懷きて、而も大に其才を伸ばすを得ず、末路の極めて蕭條たりし文豪の最後に對しては眞に同感の情に堪へざるものあるなり。

僕を以て見るに先生は自ら自己を批評して過らざるものなり。僕嘗て先生を訪ふ。先生曰く余を過ま
りしもの二あり、瘠我慢一なり、涙もろきこと二なりと。先生は多く語らざりき。僕又多く其門に趨
りて教を聴くを得ざりき。されど僕は窃に謂へらく、此二句實に先生を評して過らずと。世或は先生
を目して輕薄才子と爲すものあり。されど先生は其實一種の傲骨を有しき。薩長の諸元老と相交るこ
と最も久しくして面かも遂に其寵兒として終らざりしは、唯此傲骨ありしが爲めなり。門生故人多く
顯榮の地に上りて先生獨り洒然として文界に止まりしも之が爲めなり。

若し通鑑網目的の嚴正なる批評をして先生の一生を論斷せしめば先生は必ずしも正人君子の倫に非ら
ん。されど人情を以て標準とし恕察を以て原則とするテインの所謂佛國批評家の繩墨を以て先生を論
せば先生は實に其情に於て綿の如く善良なる人なりき。

諺に曰く才人薄命多しと。何が故に薄命の才人に多き乎。先生の一生之を證す。

明治の初年に於ける先生は、其眼實に一世を空ふせり。乃ち福澤翁と雖も其識見に於て或は一著を輸
せざるを得ざりき。故を以て當時の顯人は先生を誘致して其幕賓としたり。先生を以て其最も便利な
る「語る人」と爲せり。之れを待つに布衣昆弟の交を以てして先生を誘へり。多情多感にして知己の恩
に感激し易き先生は其全力を盡くして之に應せり。噫實に其全力を盡くして之に應せり。斯くの如くに
して先生は當時の政府の爲めに最も有力なる闘士となれり。此時に方りて先生の「涙もろき」や實に自

己を没して知己の恩の爲に戦へり。

既にして時勢は一變せり。先生は政界を退かざる能はざりき。先生の生涯は頗る落窶たるものとなれ
り。「瘠我慢」を本性とする先生は此に至りて閑雲野鶴を以て自ら居り、久しく戯曲、小説に隠れて
遂に熱に著き冷に離るゝ世に出でざりき。其最後に議院の一席を得たるが如きは幾かに夕日の雲を破
りて其幽光を漏したるに過ぎざるのみ。僕は先生の爲めに寧ろ之を悲しみき。僕は先生の死したる報
に接して才人の運命遂に甚だ薄かりしを感じ、「瘠我慢」と「涙もろき」の二事を以て先生の余輩に残し
たる意義多き訓戒となさんとす。

(明治三十九年一月六日國民新聞)

伊勢崎、足利巡遊の記

正月五日。兼ねて伊勢崎に赴く約束あれば例日になき早起を爲し、澁谷停車場より汽車に乗る。赤羽
にて車を換へ本庄に下車す。朝來天氣悪しく今にも降りそうなりしが意外にも天晴る。木下尙江君に
逢ふ。君も伊勢崎に招かれしが早起をすることがつらいとて昨日より家を出で熊谷驛に泊り今朝はゆる
く朝寝をなし同所より乗車したりと語らる。甘くやられたることかな。それより二人して三里の
間、がた馬車を備ひ伊勢崎に赴く。固より借切りと云ふ譯にあらず、されど乗客なければ自然借切り
の體となる。利根川の舟橋を渡る。途々木下君の顔を熟視するに少々御同苗の太閤様に肖て老猿の趣

あり。心竊かに可笑しくてたまらず。木下君知らずすました者なり。伊勢崎に着く前にいやな心地す。腦貧血なりと自診したるに、伊勢崎の宿屋白水樓に着き晝飯を喰ひし處病氣忽ち癒る。腦貧血にあらずして腹の減りたるを自覺せざりしに由りしことを知る。午後演説場に赴く。同地出身の法學士齋藤虎五郎君、日本法律の特質を演説し、原逸郎氏、運命自覺といふむづかしきことを説き、僕は日本現代史總論を講じ、木下君は矛盾論といふを談せらる。齋藤君の態度は溫和、原君は奇矯、木下君が例の剃刀のやうな雄辯を揮はれしは申す迄もなし。僕は唯下手演説の長談義たりしに過ぎず。木下君は此邊に同志者多しと見え、前橋の深澤利重君等君を追ひ來り色々談論す。夜に入りて白水樓に於て木下君と僕の爲めに有志諸君の親睦會あり。廢娼論、社會主義の評論など出で、僕の論鋒數ば挫け殆んど孤城落日の觀あり、大に迷惑す。聞く所に依れば吾妻郡の教育家連中木下君を招待して演説を聞きしとき、君の演説が教育勸語を批評したとやら、せぬとやらにて教育社會の大悶着となり、其爲めに郡長は進退伺を出だし、基督教の信者たりし教育家は他郡に轉任せしめられたりと云ふ。男兒世間を騒がすこと此に至れば亦榮なりと謂ふべし。宴散す。木下君と共に同樓の一室に眠る。

正月六日天晴れ風稍強し。僕先づ目が覺めたり。機聲四隣に起る、其聲嚙虫の啼くが如し。兼て機聲は蟋蟀の聲の如しと聞きつるに、がちや、の如くなるは何ぞやと訝る。後に主婦の説明に聞けば昔しの機は、蟋蟀の如く今の機は、がちや、の如し。今もかすりの類を織る機の如きは其昔さりとすの

如くなりと承はる。自ら世事に迂なりしに驚く。朝飯を喫し、車に乗じ停車場に至る。僕は小俣村に至らんが爲め、木下君は歸京せんが爲めなり。十時小俣村に着す。白石彌太郎君に導かれて其家に到る。君昨日わざ／＼伊勢崎まで來りて僕を居村に迎へらるゝことを約せり。足利の早川、鈴木二氏の紹介に依りて僕の下手演説を聞かんが爲めなりと云ふ。午後小俣村小學校に演説す。此學校は丘陵を以て風を避け、日光窓を射て頗る温かなり。「人の力」なる一題を演ず。其夜白石氏宅に於て再び晝間の續きを演説す。聴衆の質朴なるを感ず。此日始終白石君の厄介となる。晚餐に「けんちん」を饗せらる、甚だ甘し。同家離座敷の樓上に睡る。

正月七日、天晴れ、風微なり。朝餐を喫して白石君に案内せられ同村の木村凍雲書伯を訪ふ。長野に在りし時一面したる人なり。飄逸仙人の如し。書伯たま／＼在庵せず、已にして歸り來る。少々酒くさし。相見て大笑して久澗を序す。長野の舊遊を談ず。辭し去る時書伯僕の歩いて足利に至るを聞き自製の杖を贈らる。太くして犬ころしの携ふる所のもの、如し。僕は太き杖を愛し數ば之を購ひ、數ば之を失ふ。書伯の賜最も謝すべし。白石君に分れて足利に向ふ。左には遠近の丘陵屏風の如く並び、汽車其下を走る。街道は其右に在り。右は則ち一望限なき關東の大平原なり。後を顧みれば赤城屹として立つ。山頂の雪甚だ白し。此街道は三島通庸の作りたるものにて平坦砥の如し。しば／＼自轉車の往復するを見る。當時は苛政などとしてやかましく言はれたる由なれども今は人民之を便とす。遺澤人

に存すと謂ふべし。路傍に左の張札あり。

戰後國民教育演說會

講師 山路愛山先生

來一月六日午後一時

會場 小俣小學校

(赤く)傍聽無料

白石君の説に始め僕に演説を頼む相談のありし時肩書が無くて困るとの評議もありし由。之に依りて愚案を廻らすに講師と云ふは同君が僕に賜はりし學位にして戰後國民教育演說會とは諸君が人寄せの思付なるべし。僕に於ては戰後は猶ほ戰前の如し。唯平生人に告げたとしと思ふことを語るの自由を得んと欲するに過ぎず。此邊所々水車多く、機聲、茅屋より泄る。冬枯れの光景と配合して趣きあり。又

一膳めし
ひもかわ
天ぶら

等の看板を見る。僕始めてひもかはの名を知る。されど其何たるを解せず、足利に着きたらば知る人

に質したしと思ふ。二重坂を越ゆれば足利町なり。鍋島縣令の時開整したりとの趣を刻みたる碑ありて阪の右に立つ。當地の演説は夜分なり。それまで、いそがしき人の邪魔をするも氣の毒なりと思ひ、街道を左に折れ、友愛義團の標札を懸けたる家の右側より山に上る。「山内の樹木折るべからず興保社」の札あり。此山は足利町の公園とでも云ふべき所なるべし。櫻を植う。但し山上の道は岩の碎けたるが多くして歩むに難し。見下せば足利町一帯渡良瀬川に添ひ、堤と市街と相迫りて殆んど餘地を残さず。屋皆瓦葺にして全體頗る淨潔自から富饒の觀あり。機業の産額伊勢崎は三百萬圓、足利は之に三倍すといふ。關東の一富源たることを知るべきなり。右を見れば淺間山烟を吐きて丘陵の間に隱顯す。故人に會するの感あり。更に勇を鼓して進めば柵を以て圍みたる所に達す。「山内樹木折取るべからず明治三十三年延壽樓主」の標札ありて、茶寮らしき一構あり。之を窺へば白き西洋種の雞あり、余の來りて其寂寞を破りしを驚きたるもの、如くしきりに鳴く。人影なし。獨り紅梅一株盛んに開くを見る。山懷にて氣候温かなれば花信此の如く早きなるべし。上州にて今日紅梅を見しことは眞に意外なりき。それより左に折れ一叢祠の前に至り、枯草の上に座し眺望に耽る。覺えず睡を催す。午後二時山を下る。途中遙拜所の如きものあり。

百村百社參拜

祈出征軍人健全

山田郡毛里田村大字丸山村一同

清水千三郎

清水常吉

拜禮
祈出征軍人

小島三郎

君安全

清水初五郎

明治三十八年

齋水文次郎

一月十三日

清水彌三郎

中野村千原田青年

等の紙札の多く貼付せられたるを見る。僕は戦勝の原因實に此の如き質朴なる信仰に依るを感ぜざる能ざりき。世にはニイチエを説き、無政府主義を唱へ、非戦論に口舌を勞する青年あると共に此の如き無邪氣にして信心深き青年もあるなり。經世家須らく楯の両面を見るべし。何とか云ふ牛肉屋に入りて飯を喫し、外に出づれば早川君に逢ふ。鈴木君等亦至る。早川君の宅に休むこと少時、原田定助氏を訪ふ。世の所謂栃木鎮臺田中正造氏の甥にして容貌魁梧音吐朗々一癖あるべき面魂なり。さぞ喧嘩力の強き先生なるべしなど、想像す。(想像だけなり間違候は、御免を蒙るべし)夜に入りて何とか云ふ劇場に演説す。演題は本能論なり。聴衆も割合に少く演説も後にて聞けば分り兼ねたる所ありとの

評判なりき。演説者の方に於て追々修業が積まば分るやうになり申すべし、唯今は稽古中の下手演説なればと御ゆるし下され候へかし。其夜諸君と旅亭に於てひもかはを喫す。名古屋のきしめんきしめんの如きものにして矢張り饅頭の類なり。僕四碗を食ふ。一碗は二杯分との事なれば即ち八杯を退治したる譯なり。夜十一時。諸君散じ去る。寢に就く。

正月八日。旅館を發す。未だ館林を見ざれば歩いて同所に至り川俣にて京武鐵道に乗る。早川君館林まで同行す。渡良瀬川沿岸は例の名高き鑛毒地なり。毒塚など云ふものを見物す。得る所少からざりき。午後四時川俣發の汽車に乗じ九時兩國に着す。

(明治三十九年十一月獨立評論)

九十九里濱雜觀

(一) 避

暑

去年の八月山妻病に臥して九死に一生を得たりしかば、評論の發行も二月を後れ、さては評論社も草臥れて雜誌も中絶したりやなど云ふ人もありたり。今年是天我家に福して病むものも無し。去年の八月七日を以て此世の日月を見たる我家の三郎もいと健なり。一月主人笑ふこと幾回ぞ。人間はいそがしきものなり。打くつろぎて笑ふは稀なり。弓も久しく引けば弛み、人も多く勞すれば老ゆ。兼ねて上總國片貝村は九十九里の中央なり、地僻にして魚鮮しく、而も海上遠淺にして游泳に可なりと聞

きつれば八月一日我夫妻、四子、婢を合せて七人、兩國より汽車に乗りて片貝に往く。是より先き村の人岩柳勝一君に文通して避暑の地を撰び置かれたき由依頼したりしかば君は心に掛けて世話せられ、片貝村字北の下と云ふ所に預じめ一間の茅屋を借り置きくられしかば此に居を占めたり。八疊と六疊の二間にて表は西に向ひ里道に接し、南と東とは廻縁なり。東の椽を下れば芝生あり。中間一條の小川を隔て、直ちに東海に達す。家の椽に坐して白波の立つを見るべし。固よりいふせき草の屋なれども、風通よければ暑を覺へず、山妻などは單衣の上に羽織をまとい猶ほ涼さに過ぎたりと喩くこともあり。此夜月善かりき。

(二) 片貝村の歴史

例の史癖の已み難くて、此地に着くと共に村の歴史を尋ねばやと思ひ起したれども、これと云ふ手が、りもなし。九十九里の岸うつ浪は千年萬年依然たり。沙上を漂游する小河は幾度か瀬を換へて英雄豪傑の興亡を閑したれども、簡單なる生活に満足して、過去を懐ふことなく未來に悩む所もなき此村の樂天の民には歴史も傳記も要なければ誰れとてそれを知らんと勉むるものなし。系圖は貴人の虚榮を誇るものに過ぎず、傳記は人の人を殺したる迹なり、左様なるものは我に要なし、我は唯親切なる友人、從順なる人民、單純にして善性なる人として此世を終れば可なりとは思ふに此村の人の哲學にして、かゝる人々に對しては傳記、歴史を尋ぬるは耻づべき業なるに似たり。されば昔を知る人も

少く、それ知らねばとて村人の罪にもあらざるなり。さるを我好事の已み難くてあながちに問試み村人の我熱心に驚きて切れぐに語り出でたるを集めて其大略を案するに、古の事は暫く置く、足利時代より東金に近ければ其の地の城主に従ひしものと見えたり。東金は享徳四年(一四五五年)濱式部少輔、將軍の近臣、東下野守常縁と共に京都より下向し、常縁は東の庄に居り、式部少輔は此處に籠りて上杉に加勢し、古河の公方成氏の方人たる馬加陸奥守の千葉に在りしと雌雄を決せんとて、しばぐ戦功をさそひたる所なりと聞きぬ。片貝村も土地の近さが爲め其頃は濱氏の指揮に従ひし歟。未だ詳ならず。其後多くの變遷を経て東金は千葉家の陪臣酒井家の領分となりたり。戰國の世の習にて尾大不掉の弊多ければ、千葉は主家なれども知行する所、其臣原の十分一にも足らず。原は千葉家の長臣にして門葉いと繁かりしかども、知行する所は却て其臣酒井に如かざりしといへば、酒井家の一時に雄視したること知るべきなり。然るに酒井の當主に小五郎某と云へるものあり。當時の政策たる一國一宗の主義を守らんとて、強て其領分の信仰に干涉し、寺院を脅迫して悉く妙宗たらしめたり。世に云ふ上總の七里法華とは即ち此時に改宗したる村々を指すものにて片貝村は所謂七里法華の北端なり。そは小川を隔てたる北隣の村には今も眞言宗の寺などあれば酒井氏の領分ならざりしを知るべし。吾昔し信濃に在りし時、北佐久郡の山中にて或寺に宿りたる朝、僧の昔語に依りて信玄が一國一宗の主義を取り、寺の宗旨を改めて天臺宗たらしめしことを知りぬ。宗教に依りて人心を固結せんと

し、若くは宗教の分離は則ち人心の分離なりとなし、家中の武士乃至平民を擧げて悉く一宗教の信者たらしめんとしたるは其頃の世に流行せる政策と見えれば、片貝村も此餘り賢からざる政策の犠牲となりしものと見えたり。かゝる壓制なる干渉が良心の自由を重んずる自然の人情に逆ひたるは固よりにして、此時北村にも信仰の爲めに殺されたものも少からざりしとぞ。酒井氏は天正十八年北條氏の滅亡と共に全く其土地を失ひ、其子孫は小祿を以て徳川氏に扶持せらるゝに終りたれば、此地は更に主を換へ、近き頃に至りては備中松山の城主板倉内膳正の領する所にして其陣屋は東金に在り。内膳正時代の末は即ち幕府の末路にして東國は水戸浪士などの跋扈する所なりしかば、此處にも浪士の小さき梁山泊ありて板倉氏より征伐の沙汰なども聞えたり。既にして世は王政復古の天下となり、遠江掛川の藩主太田備中守、松尾に移りしより此所も其領地となりき。されば松尾には今も猶ほ遠州士人の住むものありと云ふ。而る後廢藩置縣となりぬ。片貝村は近き世まで近村の親村と云はれ粟生、不動堂など云ふ村の人も、他所に往けば我は片貝村に住めりと稱せしとかや。慶長六年一宮より不動堂附近まで海嘯の災ありき。當時海上遠く干瀉となりしを見て人々不思議の思を爲し、早く遁れたるものは災を免れたれども後れたるものは溺れたり。今も千人塚として残れるは當時不幸にして災に罹りたるものを葬れる所なるべしとのことなり。或はさに非ず、妙宗改宗の時、領主の命に従はず、信仰の爲めに戦ひしもの、俠骨を埋めし迹なるべしとも云ふ。往事茫茫尋ねべからず。千秋依然たる東海の

浪は天を蹴りて白く、萬古易ることなき中天の月は沖を照らして澄めども、歴史は亡び、傳説は逸す。知り得たる所は僅に是のみ。

(三) 魚の寡くなりし沙汰の事

此地に來りて古老の説を聞くに昔しは此濱の漁業と云へばそれはそれは繁昌のものにて魚も多かりしかど今は魚減じて昔の如くならず。さればもしほ草、海士の煙も次第に細ふなりぬと云ふ。其仔細を尋ねるに或は潮流に變化ありしが爲めなりとも云ひ、或は漁具の進歩して魚の子さへも取盡くせば自ら種子を減じたるものならんとも云へり。いづぞや農商務省より官人來りて其理由を穿鑿したれども未だ分明ならずとぞ。昔もかゝる例あり。江戸灣は大なる入海にて、大魚ども其所を善き住所と知りて集るといへども、關東の海士は無智にして取ることを知らず、磯邊の魚を小網にて取り、或は釣を用垂るゝ計なりしに、徳川氏府を江戸に開きしより、西國の海士悉く關東に來り地獄網と云ふ大網を用ひしかば、天地開闢より關東にて見も聞もせぬ海底の大魚、砂底の貝を取あぐる程に、次第に魚の數を減じたりと古き書に記せり。昔は東海に鯨多く出沒したれども是亦關東の海士の愚なるが爲めに、誰れもそれを捕ふるものなかりしを元祿の頃、尾州にて鯨つきの名人と聞えたる間瀬助兵衛と云ふもの相模國三浦郡三崎に來りて、其業を始めたりしより、鯨の近海に寄ること漸く減じ今は甚だ稀なるに至りぬ。昔は初魚、初貝とて期節ならねば取らざりし魚貝も今は何時にても人の膳に上れり。天物を

愛惜せざるは近代文明の弊なり。人々餘り智きに過ぎて唯目前の利に急なれば、さてこそ今日の結果を見たるものなるべき歟。東海道の大井、天龍なども昔しは鮭鱈多かりしと聞きたれど、今は殆んど其影もなし。西國の海士の智なるは關東の海士の愚なるに如かず。一時の成功は永遠の失敗なり。かくて文明の進歩、漁業の發達と共に魚は減じ、漁場は次第に日本の海岸を去りて遠き異域に向ふべし。此濱に魚の減じたるは獨り此濱の罪ならじ。畢竟は偽文明の成功が日本に蒙らしめたる禍なりと謂ふべき歟。

(四) 博 奕 論

八月の五日と十一日とは事ありて澁谷の村舎に歸れり。十一日に歸れるときは東金より夕汽車に乗る。勿論赤切符なり。車中に三人の男あり。其一人の語るを聞けば嘗て金四圓五十錢の帽子を蒙りたることありとの事なれば此あたりには先は中流以上の人なるべし。其語る所を聞くに、思ひきや博奕の興に乗じ夜をふかせし話なり。片貝村にても袁元道は意外に流行し、煙中の景たる茅屋の中にも時として夜半に砧ならぬ不思議の音を聞くことありと云ふ。吾昔し上野、北總の地に旅して關東の博奕國なるを歎じけるが、此所も亦其の例に洩れざる歟。我居村は東京の近在にして今は殆んど東京の一部なれども、村の青年には時々、茶畑の中に隠れて鬪雞の賭を催し、空しく日を過すものありと聞きたり。西洋諸國にも博奕の流行するは、吾も知れり。あながち日本のみの弊習なりとは云ふべからざ

れども、關東の博奕國たるには別に理由ありと見へたり。北條時代に八州の内博奕盛んに行はれ、僧俗男女の別なく皆おしなべて行ひしを、徳川氏に至つて嚴斷し、板倉四郎左衛門勝重を以て嚴令を出させ、博奕するものは見及びしまゝ追捕して死刑に行ひしことは君臣言行録と云ふ書にあり。されど其後も關東は猶ほ博奕の本場なりき。凡そ關東の博徒たるものは自から主従、兄弟の義を結び、國中を分ちて其勢力範圍を定む。所謂繩張なるもの是なり。されば慶長の頃、下總國向崎に甚内と云ふ大盗人あり。甚内が被官、甚内が眷族として八州に其類多かりしと云ふも、今の博奕の親分と云ふものに類したる歟。徂徠先生、少年の時、本納に在り。近在に悪黨の首領四郎左男と云ふがありしを知れりと政談に記したるも其類ならん。徳川時代には關東は幕府直轄の地若しくは諸侯の飛地多く、代官は所謂腰拔役にて唯年貢の取立にのみ急がしく教令全く備はらざりしかば博徒此隙に乗じて四方に蔓延し、稼穡を實とすべき農民を誘惑して投機を喜び、僥倖を冀ふに至らしめたり。舊習は容易に洗ひ去りがたし。今も猶遺風あり。經世の志あるもの斷じて拔本塞源の策なかるべからず。

(五) 片貝村の自然

波聲。時としては其聲騒がしくして声の葉の風にすれ合ふが如きことあり。然る時は多く晴る。時としては鈍音すこく地底に響くことあり。然る時は多く雨なり。或は北に鳴り、或は南に響く。時々刻々、其方角を同うせず。或る朝、波の音、極めて靜かにして恰も數里を隔て、聽くもの、如し。戸

を排して海の方を見れば霧いと深かりき。

草木。萩の盛りに蝶のとまれる、唐もろこしの風に騒げる、無花菓の實の青さ、月見草の夕に咲きたる、日まはりの花の黄なる、甘薯蔓の這ひたる、低き松の生へし芝生に河原撫子の獨り笑みたる、百日紅の燃ゆるばかりなる、木槿の花の質朴なる、池の蓮の静かなる、豆の花の莢となりて茅屋の垣を飾れる、茄子の花の盛なる、何れを見てもやさしかりき。

片貝村より南白龜川まで。八月十六日、午前獨り寓を出で、海岸に至り、浪打ぎはを南に歩むこと三里。南白龜川の岸に至れば正午に近し。其間蠡斯の沙上に飛ぶを捕へ、千鳥の水際に立つをおどし、蟹の穴に入らんとするを追迹す。一身天地の間に在りて、而も人間萬事忘却し、機心も消え、野心も亡び、吾は久能山の下、駿河灣の岸に立ちし頑童の昔にかへりぬ。夢の如き淡き景色の中に、憂患もなく、嫉妬もなく、得色もなく、街氣もなき野水の縦横たる、州渚霖雨と共に數ば其深淺を變じ、自ら生せる緑の澤に外國種の牛の静かに眠れる、森の中に油蟬の鳴きたる、限もなく、際も知らぬ太平洋の煙波に鯉釣る白帆の遠く又近き、天、ウォルズウォルスの詩集を活躍して吾をして其秘訣を貪り見せしむるに似たり。南の方霧の中に模糊たるは大東岬なり。白波の或は昂り、或は下される、時としては影を没し、時としては現はる。漸く近づけば即ち知りぬ、東海に突出したる一帯の丘陵なることを。一宮町は其よりも此方でありたりと聞きたり。南白龜川のはとりに旅館あり。立寄りて晝食し、そ

れより歩して歸途に就く。

(六) 小説の題目としての里見氏(一)

緒言

吾は復讐に期せり、五十にもならば吾或は小説を作るの日あるべしと。其故如何。論語に五十にして天命を知ると云へり。孔子の聖人を以てすら五十に至れば人力の必ず窮まる所あり、天命の終に如何ともし難きものあるを諦めたり。まして凡夫に生れたる吾、四十の境は猶は驚に鞭ちて功名の途に奔走もすべし。五十に至りて、爲す所なくんば是れ脚力既に盡くるなり。功名の途を歩みて既に其涯畔に至れるなり。即ち功を實世界に樹つるの念を絶ちて、まさに須らく平生做さんと欲することを擧げて之を小説の筆に驅り出すべきのみ。諺に云はずや、戀人は歌を作ると。戀とは何ぞ。遂げんと欲して未だ遂げざるものなり。青年の時、膽大才疎、事多く志と違ふ。即ち其希望と想像とを傾けて詩歌小説に寓するものあり。五十に至つて遂げんと欲したるものは既に之を遂げて全く戀愛の興味を失ひしものあり。是れ所謂功成り名遂げたるの士なり。或は遂げんと欲したる所、遂に全く遂げざるものあり。做さんと欲したる所、遂に全く做さざるものあり。是れ白頭まで戀人たるなり。夫れ得んと欲したる所のものを得たるものは之と共に想像の興味を失ふ。經に所謂既に望を達すれば則ち望なきものなり。然らず、得んと欲したる所のものを終に得ずして止むものは實質に於ては毫も手中に把

持する所のものなしと雖も、希望と想像の興味は却て大ならざるを得ず。天は一人を偏寵せず、報償論に説きける如く天地の經濟は此處に潮あれば彼處に汐あり。一方に満ちたるものは必ず他方に缺けたる所あり。輝けるもの、一面は暗く、虐げらるるもの、心に望あり。得失を乗除すれば人間は一切平等のみ。達人の心には芥蒂なし。人生、何時にても、何處にても煩悶すべきものなし。我も五十までは猶ほ甘んじて地上に一事業を建てんと試むべし。その事業なるものが蛛の巢の如くなるものなりとも、蟻の塔の如きものなりとも、そは天下後世の批判に一任せん。されど、もし五十にして我運命の花、未だ開かず、我事業の礎石未だ置かれずんば、我は我が爲さんと欲する所、我想像する所、即ち我が未だ遂げざる戀を寫して小説となさんのみ。是れ我が五十にして小説家たらんと欲する所以なり。斯様の言草は所謂純文學より見れば大俗説にて、かの「技藝の爲の技藝」と云ふ主義を輕蔑したるものには相違なかるべけれども、人各好む所あり、何ぞ人の好む所を以て我好む所を妨ぐるの要あらんや。公等若し所謂純文學の繩墨を以て我を律せんとせば是れ亦強て人性を矯めんと欲するの愚のみ。何となれば戀を遂げざる破れたる心の、此世を辭するまで樂しき幻影を追ふは是れ自然の情なればなり。

(七) 小説の題目としての里見氏 (三)

日本の梁山泊

小説家とて一概に論ずべからず。井原西鶴の如き浮世の助もあり。瀧澤馬琴の如きすね者もあり。執拗なるミルトンあり。樂天家なるジッケンヌあり。讀む人亦其趣好を殊にし必しも我を以て人を律すべからず。要は各好む所を好みて他人の嗜好を是非することなからんのみ。暫く我が好む所を語らんに、我は梁山泊を有する小説を好む。梁山泊とは何ぞ。昔し宋の世に山東の水郷、蘆荻の茂る所、政教の及ばざる所、時勢の浪の激せざる所あり、名けて梁山泊と云ふ。水滸傳の豪傑は此處に籠りて世俗と戦ひき。此世には二個の天地あり。一は即ち人の天地にして、二は即ち我の天地なり。我は理想を有し、主義を有し、主張を有す。我の天地を以て人の天地を開拓せんとするは英雄兒の業なり。此の如くにして成らざれば即ち靜かに我の天地を守り、其關門を堅くし、其鎖鑰を嚴にして以て自ら安んぜんのみ。所謂之を放てば六合を覆ひ之を收むれば芥子の内に藏するものなり。馬琴氏の八犬傳は房總を以て梁山泊とするものなり。其鬱勃たる理想は里見氏の名を借りて日本の東南端に埋伏せり。彼れは房總を我世界とし其所より人の世界に進撃し、波瀾多き犬士の傳記を作りたり。若し事實上の房總を論せば、其處も亦世俗なり、固より理想の境に非るべし。されど其日本東南の半壁にして中原の感化多く及ばざるは是れ馬琴が取つて以て其想像を逞うすべき境としたる所以なり。房總は馬琴の視界に入りて詩化したり。彼れは之を自己の世界として、人の世界の弊風汚俗を反映せしめたり。而して八犬傳は翼なくして天下に飛べり。たとひ家康の武家諸法度を知らざるものありと雖も、馬琴の八

犬傳に至つては如何なる僻村の讀書生も亦其名を聞かざるもの無きに至れり。かくて里見氏の其領地たりし房總は世人の心に詩題として残れり。八月二十一日、余片貝の僑居を出で歩いて東金に至り、東金より汽車に乗り一宮に遊ぶ。一宮は里見氏の臣正木某の住みし所なりと云ふ。余因て附近の形勢を察し、忽ち里見氏の事業を聯想し、余にして若し小説を作るの日あらば余は馬琴氏の轍を踏んで一たびは里見氏を書きて見たしと思へり。かくて一宮より川船に乗り一宮川を下りて海水浴場に赴く間も、海水浴場を去りて松間の徑を歩み一宮に歸りし間も、余は里見氏を詩題としたる小説の腹案に耽りて、殆んど我を忘れつゝありき。

(八) 小説の題目としての里見氏 (三)

歴史上の里見氏。歴史と小説の調和。

歴史上の里見氏は如何なるものなりや。余は未だ里見記を讀まず。房總史料を讀まず。里見氏の傳記に就ては固より多く知る所なきなり。されど我が小さき文庫に存する他の舊記に依りて其大概を案ずるに馬琴の八犬傳に記したる里見義實は歴史上の人物と少しく其行徑を殊にするものに似たり。里見は新田の類にして上野は其本國なり。足利氏の始には固より其敵とする所なれば本國にも居たゞまれば諸國に流浪したりしなるべし。ざるを鎌倉の氏滿暫時京都に不快の事ありしとき、新田、足利は元來一族なれば執念く敵とすべからずとて、里見、烏山、世良田、額田、大島、大館、堀口、桃井の人

々を憐愍し、一所懸命の地を與へ安堵せしめたり。それより里見氏は上野に居りしならん。里見氏の安房に於て氏族の盛を誇りし頃に上野仁田山に里見藏人と云ふ一族ありしを以て其然ることを知るなり。かく鎌倉公方は里見の爲めには恩義深き家なりしかば持氏滿貞京都と中違ひして永享十一年、自害の事ありしときも、滿貞の被官に里見治部少輔と云ふものありて難に従ひしのみならず、翌年安王、春王、結城籠城の時も里見修理亮と云ふものありて結城、今川、木戸、宇都宮、小山の徒と共に城中に在り、嘉吉元年落城に及んで修理亮の首は中條判官分捕して上洛したり。或は云ふ里見刑部少輔家基と云ふものは伊賀守義成より九代なり、結城に籠り、落城の砌自殺す、安房源氏の祖たる又太郎義實は即ち其子なりと。所謂修理亮は刑部少輔と異名同人なりや、若くは均しく里見の一家にして別人なりしや未だ詳ならず。唯里見氏の結城に籠城したることだけは疑ふべからず。借又義實が果して父と共に結城に在りしや否やは疑問なり。或は義實は父と共に城に籠りしにはあらず、上野の所領に在りしが結城落城を聞きて其所に居たゞまれば、安房に落行きたるものとも云ひ、或は安房には里見氏の所領あり、義實は兵糧徵發の爲めに相模國三浦郡より同所に向はんとしつゝありし途中にて結城の落城を聞き、即ち安房に遁れたるものなりとも云ふ。義實若し父と共に結城に居らぬことが事實ならば八犬傳の名文たる結城城中退散の一條は全く架空の談なり。義實安房に遁れし頃は安房上總は無下の邊土にて他國の侍を見たる人なき程なり。此處に安西、金鞠、丸、東條とて四家あり。安房

を四分して各其一を有ちたりしが義實は安西家の被官たりき。元より故實の勇士にして、軍の節に及んでてだてをいふに一事としてはづるゝ事なし。安西之を感じ摩利支天八幡大菩薩の來現かと信じ軍配を預け軍の大將とし、懇情傍輩に過ぎたり。是より安西の家は自ら里見のものゝ如くになりぬ。長尾氏の上杉氏に於けるが如く、原氏の千葉氏に於けるが如く其頃の世は事實上の主人と名義上の主人と并び存したるが例なりしかば、里見氏も義實の時より事實上安西家の主人となり、安西家は唯虚器を要したるに過ぎざるべき歟。さればこの義實は安房源氏の創業者として後世に傳へられたるならん。されど義實は安西の懇情に反かず、一生主従の禮を取りて敢て其家を亡ぼさざりしものゝ如し。

かくて義實既に事實上安房の諸侯たるに及んで、安王、春王の弟、永壽王は鎌倉の主となり、名を成氏と改めしかば結城に籠城したる關東武士の子孫再び時を得て鎌倉に參れり。義實も房州を根據として鎌倉に出仕し、舊誼を述べて成氏に仕へたり。成氏、乃父の怨を忘れず上杉氏と戦ひし時、義實も亦結城の怨を返さばやとて成氏に黨し、鎌倉に押寄せ上杉憲忠を殺したり。それより上杉氏は京都の加勢を請ひ、成氏は結城の殘黨及び、上杉氏の專横を憤れる關東武士に助けられ、八州再び戦亂の衢となり、享徳四年分陪河原の合戦に里見、世良田深入して打死し、同年今川上總介、京都方の大將と成り鎌倉に亂入せしとき木戸、印東、里見等は離山に待掛け防戦したれども遂に敗軍したり。分陪河原に戦死したるが義實なりしか、或は上野の同族か、離山に敗軍したるはそれか、あらぬか、未だ詳

ならず。かくて成氏は鎌倉に居る能はずして古河に移り、古河公方と稱せられき。千葉家の分れて兩流となりしは此時に在り。其頃千葉に於て事實上の主人たりしは原氏にして、始めより成氏の黨たり。千葉義胤死して家督の争ありしとき原は主人家の庶流たる馬加の千葉家を擁して主人とし千葉に入城せしめしより、原の處分に同意せざるものは上杉氏の加勢を請ひ實胤兄弟市川に據りて自ら千葉の正統と稱しき。是に於て房總の形勢は大凡左の如くになりぬ。

成氏の黨

安房 里見氏（名義上より云へば安西氏の被官。事實上より云へば安西家の實權者）

下總 原氏（名義上より云へば千葉氏の被官。事實の上より云へば千葉家の實權者）

上杉方（則ち京都方）

上總 東金に濱式部少輔（京都より下る）

下總 東下野守（京都より下る）

其外諸侯の向背は詳ならず。最初は上杉方勢よくして里見氏もしばらく安房に蟄伏したりしが、甲州武田の一族勝某、（武田入道と稱す）上總の國に打入り應南、丸ヶ谷の兩城を築き成氏の加勢を爲すに及んで里見氏も此に力を得、十村の城より起り、國境を越へ兵を出し所々押領せり。此處に土岐右京太夫と云ふものあり。濃州土岐氏の一族なりしが本國を出で關左に下り、安西三郎に寄食し里見氏の先

隊となり上總國に働き夷隅郡を伐取りて萬喜に城を構へたりと云ふは其頃の事なるべき歟。斯様の次第にて里見氏は義實の時より既に事實上安西家の主人たりしかども、義實は安西氏に對して君臣の義を易へずして其身を終り、息男左衛門佐義成も亦安西の家長として始終したり。其年歴は未だ詳ならず。關左の形勢は長祿四年京都より沙汰あり、東野州常縁を召上し更に澁河左衛門尉義鏡を大將として武藏國に發向せしめ、將軍の弟僧香嚴院還俗して伊豆に下り堀越御所に居り古河の成氏に對抗したりしより、名義上成氏、政智の戰となり、文明三年三月成氏方進撃的態度を取りて政智を攻め、却て武藏の五十子に敗軍し、逆まに古河城を攻められて古河を落去し、しばらく千葉に來りて孝胤を頼めり。此時里見氏は上總の武田氏小金の原氏と共に千葉城に馳せ參じて成氏を助け、翌年の春に至りて古河城を恢復し成氏をして再び同所に居らしめたり。かくて房總一帶は依然として成氏黨なりき。此時まで山内の上杉家は上杉一門の統領にして成氏に黨せざる關東の諸家悉く彼れの旗本を守り尊敬比類なく其勢二十萬騎と稱し、扇谷の上杉家はわづかに百騎ばかりの大將分にて見る影も無かりしが、扇谷の家臣太田道灌不思議の器用を以て名を天下に揚げ譽を八州に振ひ諸家心を寄せ、萬民頭をうなだれしより扇谷此に勃興したり。道灌は上杉氏の遺傳的政策たりし公方成氏との確執を抛ち、専ら其歡心を求めしもの、如くなりき。されば此時より成氏と上杉氏とは自ら合體の姿となり、伊豆の政智は寧ろ餘計の邪魔物視せられたるが如くなりき。千葉、里見、武田の徒も成氏が扇谷の上杉氏に一味した

る上は、兵を齒して北の方上杉氏と争ふに師名なく、形勢此處に一變して人心一致せざりしかば道灌は此勢に乗じて南侵の計を決し、先づ下總鴻の臺に陣城を構へ、市川より石濱に移りたる千葉自胤と共に文明十一年下總國臼井の城を陥れて原氏を惱まし、漸く千葉の本據に迫らんとせしかば上總廳南の城主武田三河入道は道灌の威に恐れて自胤に歸伏し房總半島の地圖は此處に一變し、里見、武田の連絡は絶へたり。道灌若し長く生きたらんには里見氏も或は彼れの旗下に馳せ參ずるの日ありしやも未だ知る可らざりしに、文明十八年扇谷定正、道灌を殺せしより關東忽ち將星を失ひ、一轉して兩上杉の確執となり、箱根以東何人も人心を嚮導すべき標準となるものなく、京家對鎌倉公方家てふ遺傳的の旗色を混じ、上杉一家の調和もなく、世は紛々擾々として亂れたる絲の如くなりぬ。今川氏の食客たりし伊勢新九郎が駿河國興國寺の城を出で夜中に黃瀬川を渡り伊豆の北條に亂れ入り、政智の子茶々丸を殺し、伊豆を一統し、更に兵を進めて相模國に討入りしは實にかゝる時に在り。扇谷小家に起りて山内と對立し、道灌、扇谷の家宰として八州に威を揮ひ、尋で伊勢氏浪客を以て豆相を取る。關東の風氣此に全く一新し、門閥と遺傳とは殆んど人の顧みる所とならず、實力の在る所是れ權利のある所なりとするに至れり。此時里見氏は義成の子喜太郎義豐の世にして父祖と同じく猶安西氏の家長と稱したりしが、義豐の英武父祖に劣らず、金鞠、丸、東條の三家を打平げ、房州一圓悉く安西氏のものとするに及んで更に主家と確執を生じ、明應五年安西の館を襲ひ、即時に迫りて腹切らせ、國中

を押領し、稻村に居城を構へ、安房の源氏と稱し、安西家に於て久しく事實上の主権者たりし里見氏は此處に名義上に於ても亦主権者となれり。義實の安房に遁れしより此に至りて正に五十年、恩澤既に房州の民に遍く、一國の英雄皆其の爪牙たりしかば革命の事業も比較的圓滑に運びけるなるべし。事實上の主権者と名義上の主権者とは遺傳の上に於て往々混じ易きが常なれば里見氏も義實の時より浪客を以て一躍直ちに房州の主人となれりなど稱せられ里見記の作者も左様に聞傳へたるものなるか。されど嘉吉より文明までは關東猶ほ古き傳説を守り、一國の名門名族も多くは系圖の舊きを誇りたれば英雄の士と雖も、當時に在りては彼等の名義を尊重し自己は唯事實上の権力者たるを以て満足せざるを得ざりしなるべし。我等は時勢の潮流を察して必ず然ることを知るなり。されば馬琴の八犬傳に記したる義實の成功談は全く根據なき臆説なり。此に至りて一議論を生ず、歴史と小説とは如何にして調和すべき。小説家は全く歴史を無視す可きや。小説家は唯名を歴史上の人物に藉るのみにして時代にも事實にも頓着せず、單に自己の想像に寫りたる幻影を其儘描き出すべきや。我等はしか信ずること能はず。我等は歴史と小説とを左様に絶縁すべきものに非ずと信ず。我等の信ずる所に依れば歴史は生理學なり。小説は彫刻術なり。彫刻家は固より生理學者たるを要せず。されど生理、解剖を無視したる彫刻は果して完全なる印象を觀者に與ふべきや否や。生理解剖の學說に拘泥したる彫刻は生氣なきものとして美術家の退くる所ならん。されど全く生理解剖の原則を度外にしたる怪物も亦美術家の造るを好まざる所ならん。小説家の書かんとする所は何ぞ。運命乎、戀乎、人事の波瀾乎、是皆史學の材を例する所に非ずや。我等は此故に史學を輕蔑したる時代小説の見るに足らざるを知るなり。馬琴氏と雖も、其志す所は正史と違ふことなきに在りき。彼れが里見氏を畫きて全く歴史上の事實を顛倒したるは彼れの好んで犯したる過に非ず、彼れの史學が未だ深く里見氏の事に徹せざりしが爲めのみ。

(九) 小説の題目としての里見氏 (四)

里見氏を詩題として書くべき小説の筋書。

小説は戀物語なくして書き得べきや。我等は然りと云はんと欲す。水滸傳は即ち是なり。水滸傳の作者は蓋し戀に對しては厭世家なり。戀を輕蔑したるものなり。されば彼れは未だ嘗て才人佳子を畫かざりき。彼れが畫きたる諸豪傑の中心は實に宋江なりき。宋江の人と爲りは如何。彼れは色黒く短身にして人呼んで黒宋江と云ひたりき。彼は婦人に愛せられざりき。其妾は彼を厭ひて他の風流才子に通じたりき。水滸の記者其の英雄を畫くこと何ぞ其れ戀愛趣味なきの甚しきや。されど水滸を讀むものは胸中猶ほ火の焚ゆることを感じ一たび巻を開けば卒讀せざること能はざるなり。我故に曰く戀物語なきも猶ほ小説を作り得べしと。結城敗將の子里見の一青年が親戚朋友には白眼を以て見られ、面目寒酸にして凌雲の志氣を伸ぶるに所なく、江湖に流浪し、安房に至り、暫く身を清澄の寺院に潜め

時機を窺ひたる光景は戀物語なしと雖も猶ほ是れ好個の詩題に非ずや。運命は雲の忽ち生じ忽ち消ゆるが如し。上野の一隅に舊家の榮華を誇りたる里見の家が、轉眼の間に露と消え氷と解け、家破れ人亡びたる感慨は戀愛以外に人の感情を動かすべき光景ならずや。我等も昔し之に似たる境遇を見た。元祿以來我家の主たりし徳川氏は一朝にして征夷大將軍の威を失ひて江戸より駿河に移れり。此桑蒼の變化は我家をして殆んど枕する所なからしめたり。榮華に誇れる江戸兒は忽ちにして駿河の土民となれり。古き系圖を有する名家の子が見る影もなき賤の男となりて魚を賣り鮎を賣りて駿府の町を彷徨したりしは我が幼き眼にも悲しく映じたる現象なりき。小説は或る意味に於て主觀的ならざるべからず。我は窃かに信ず、里見の家の破産は我も亦個中の消息を解し得べき經驗を有すと。斯くて當年の青年里見又太郎義實は零落の子となりぬ。たとひ死灰は再び燃るの日あるも、たとひ枯木は再び花を着くるの時あるも零落の底に落ちたる里見氏の子が再び父祖の榮華を恢復すべしとは唯神のみ知ろしめしたまひけん。されど人の世界には内部の世界あり、外部の世界あり。義實の外部の世界を見れば彼れは天地に定まれる家なきものなり。狐は穴あり、空の鳥は巢あり、されど彼れは安住すべき所を有せず。花は笑ひ、鳥は囀ず、天地の光景は依然として春なり、依然として秋なり。されど彼れの眼には花は零落の符徴にして鳥は嘲笑の使者なり。而も是れ彼れの外界のみ。若しそれ彼れの内界に至つては彼れは英雄の心血を其血管に傳へたるものなり。彼れは失望の子に非ず、彼れは厭世の客に

非ず。彼の心は境遇の爲めに悲まんには餘りに大なり。彼れの希望は目前の榮枯の爲めに心を動かさんには餘りに高し。人は屋中に居れども我は天外より來る。英雄兒は何處に在りても運命を制して運命に制せられざるなり。我等は彼れを英雄兒として寫さんことを欲す。それ日の思ふ所は夜の夢みる所なり。夜の夢みる所は遂に事實となりて現はるゝの日あるべきなり。畫工は數ば未來の妻を畫くとありとはエメルソンの我等に教へし人生の哲學なり。我は悲酸の境遇に在る樂天家として義實を寫さんと欲す。況んや運命は天の秘密なり。否極まれば泰來り、塞がれば遂に通ず。才人、時として不運なりと雖も、好運の機會は晴天の雲の如く忽ち生ず。天道知なきが如くにして又知あるに似たり。應報相反するが如くにして又相反せざるに似たり。花を植ゑたる人必しも花を見るの人に非ず。計畫したる事は却て破れ無心の業は逆まに成功す。智者何處に在るや、此世の論者何處に在るや。命運は人間を醜弄して窮りなきに似たり。我等は此理を小説に寓せんと欲す。我等は小説の世界を眞實の世界の如く描かんと欲す。善は必ず榮へ、惡は必ず亡ぶると云ふが如き小倫理學の繩墨は人生を律せんには餘りに狹隘なり。人生は哲學よりも深遠なり、運命は倫理學よりも不思議なり。我等は義實を支配する不思議の運命を描かんと欲す。彼れは此運命の導く所となりて安房の四分一侯たる安西三郎の知る所となり其家に仕へぬ。當時の形勢を案ずるに嘉吉以來、關東の平原は戰亂の衢となりて優勝劣敗のダルウキン主義が極めて露骨に行はるゝ世となりぬ。安房は關東平原の南端にして山海の勢自ら

一廓を爲し頗る世と疎なりと雖も、時勢の波は激せざる所なく此所にも蠻蜀の争はあり。東條、丸、金鞠、各一方に割據して安西氏をして眠を安くするを得ざらしむ。斯かる時に於て最も多く要するものは何ぞや。兵糧か、武器か、黄金か、何ぞ其れ然らん、如何なる世に於ても物質は萬能に非ず、最後の問題は英雄なり。試みに此事情を現代の時勢に翻譯せよ。此所に一地方に富を誇れる豪族あり、其富の力を以て地方の政權を一身に集めんと欲せしめよ。彼れは單に其富を以て成功すべき乎。我は斷じて否と云はんと欲す。彼れ若し新聞紙を作りて地方人民の心を動かさんとするか、彼れは金を散じて印刷機械を買ひ、工場を作り、編輯局事務局を作り得べし。されど黄金は遂に記者を作り得べからざるなり。而して記者は新聞事業の中心なり。良心を其筆に發揮せざるを得ざる記者なき新聞紙は一日百萬枚を賣ると雖も猶是れ鳴る鐘や響く鑼の如きのみ。遂に人心を捉ふるには足らざるなり。是に至つて萬能力を誇れる黄金も其實は砂礫に均しきのみ。彼れ又人心をして彼れに感謝せしめんと欲し百萬金を投じて慈善の事業を經營したりとせよ。彼れは果して黄金を散じたるのみにて人をして泣かしむべき乎。彼れは遂に慈善の事業に要するものは志士仁人にして、志士仁人を中心とせざる慈善事業の危険なることを覺るの日あるべし。千秋萬古、此理は依然たり。安西氏は善く其地を守らんが爲めに何を要したる乎。兵糧に非ず、兵器に非ず、黄金に非ず、彼れは唯英雄を要したり。夫れ人類は同等に非ず。鳥に鳳凰あり、貝に眞珠あり、人に英雄あり。英雄を發見して而して之に權力を委するに

至つて人間は始めて満足す。是れ人間の自然性なり。安西は必しも此理を知れるものに非ず。安西は必ずしも英雄を其幕中に得んとしたる寛大の長者に非ず。安西を以て文王が渭濱に獵して大公望を得たるが如く義實を得たりとして描くは餘りに人爲的なり。我等は寧ろ安西と義實との遭遇を以て運命の波に搖かされたる一個の偶然に歸せんと欲す。否安西を以て物質的に飽きたる貴族の模型として畫かんと欲す。彼れは物質主義の信者なり。彼れは彼れの倉庫の富と、彼れの幾百騎の家士とを以て其四分一俟たる位置を永遠に持續せしめ得べしと信じたる者なり。彼れは貴族の家に生れたる貴族の子にして固より平民を愚弄すべき先天的の傾向を有するものなれば彼れの罪惡も貴族的なりき。彼れは多數の妾を有しながら猶ほ其の家臣の妻を偷めり。彼れの女色に對するや螞蝗の血を見るが如くなりき。彼れは其家臣をして都より善き妓女を買ひ來らしめて其後宮に置きたりき。我等は此の如き人として安西を寫さんと欲す。彼れは近世の語を以て之を言へば一個の富兒俗漢たるに過ぎず。此の如き富兒俗漢と英雄兒たる里見又太郎義實と果して何の合ふ所かあるべき。されど彼等は君臣の誼を結べり。是れ運命の奇なる所以なり。而して生存競争の露骨に行はるゝ當時の形勢は人物鑑識には其眼力甚だ鈍き安西をしてすら漸く義實の必要なる物件なるを認めしめざるを得ざりき。人或は曰はん良禽は木を撰みて棲む、義實何ぞ其主を選ばざるの甚しきやと。されど是れ義實の心事を解するものに非るなり。光陰箭の如し、日月梭に似たり。人生幾日ぞ。何ぞ座して徒らに呻吟を事とすべけんや。諺

に曰はずや遠水近火を救はずと。理想高しと雖も之に達するは近きよりせざるべからず。安房は日本の東南端なり。其一國を得ると雖も必しも英雄の心を満足せしむるには足らざるなり。況んや其四分一侯の臣たるをや。されど大河も其分水嶺に溯れば小溪に過ぎず。千里も一步に始まる。義實に取りては是れ自己發展の第一歩に過ぎず。英雄は芝草の如し、平原下土に在りと雖も猶ほ靈あり。義實の眼中、何ぞ安西氏あらん。何ぞ東條、丸、金鞠あらん。唯自己の大なる心あるのみ。醉翁の意、終に酒に在らずんば何ぞ濁酒と惡酒とを論せん。王侯將相固より種なし。英雄は自ら崇拜者を作る。見よ水滸の宋江は官、渾城縣の押司に過ぎざりしかども天下の豪傑之を仰ぐこと泰山北斗の如くなりしに非ずや。我等は此點に於て曲亭馬琴の甚だ没見識なるを笑はざるを得ず。何となれば彼れは義實をして事實に於ける安房の主たらしむるを以て満足せず、必ず名に於ても安房の主たらしめんとし、神餘、安西、丸の家を絶ちたればなり。我等は義實の英雄たるは其氣品に在り、其内部の價に在りて、其外部の名義に非ることを主張せんと欲す。かくて安西は時勢の必要より義實を登庸し、安西氏の家中と百姓とは英雄崇拜の誠心を瀝ぎ盡くして義實を仰戴し、東條、丸等は義實の武略に威服し安房は再び太平に歸りぬ。而して義實は始めて兵を中原に出すに至れり。而る後天下の英雄豪傑は義實の人物を景慕し、安房は衆心の向ふ所となりぬ。是れ義實は安房の一民として没すと雖も、其氣は既に天下を蔽へるなり。我等は安房を梁山泊とし、義實を其中心的人物とし、此處に天下英才の不平、煩悶を

埋めんと欲す。是れ我が小説の筋書なり。されど五十には猶ほ遠き我なり。今は唯、後日若し小説を作らば斯る筋にと思ふ計なり。

(一〇) 眼前の小景

我は詩人に非ず、何ぞ天地の美を語るの才ありと云はんや。唯眼前の景は自ら口頭の語とならざるを得ず。左に記したるものは即ち是なり。

風に騒ぐ芦の葉ずれか波の音か闇にはいづれ分くよしもなし

田舎道、墨のあせたる衣きていがぐり頭誦して行く

夏草の茂みに置ける露を分けて歸省の子等が家路にいそぐ

停車場に客待ちをする車夫も田舎はさすが人柄の善き

肌ぬぎて子に乳のます女あり色の白きを誇り顔ぞうき

唐きびの實のれる畑に竝動き姉と妹の語り合ふらし

里の子に安房は何處と尋ねれば雲の南を指さしてけり

此處も亦浮世なりけり炎天にいんばねす着て行く男あり

いろ／＼の花の赤きを鉢に植へて椽に寝ころぶ老樂の人

宵闇に火影のひとつきらめくは鯨よるてふ鮎子なるらん

たそがれや野中に立てる草の屋の垣根に白し十六さゝげ
 豆の花白く咲きける垣の下に大きく黄なり唐なすの花
 せんだんの影のくらしきを仰ぎ見れば實は青くして油蟬啼く
 朝顔は自らなる大輪の賤の垣根に咲きたるがよし

此里は村の政治家隙にして榜示の文字もまばらなりけり
 日の内はあつしと人も吾も云へど秋は流石に虫にしれけり
 さりくす、蛙に蚯蚓、かふろぎの聲ばかりして闇を汽車行く
 無爲にして治まる御代を田の中の案山子の鳥のおそれざりけり
 蛙啼き蟬なく野らに吾來ればしほから蜻蛉其所此所に飛ぶ
 氏神も都に遠き此里はかやぶき屋根に鎮坐まします
 やいと花それを摘まみて頬にあてし昔のわれは今の里の子
 よし切かそれかあらぬか葦の中にびびびびびとなく鳥はなに
 夏艸のしげさが中に水ありて白く浮きたり澤潟の花

方言

客人は三里の路を徒足にしてひどかッぺいと里人はいふ

一宮にて

十錢の茶代に辭儀をせぬ里は人の情も薄かりぬべし
 舟つきに酒うる家を建てたるは軒に蚊をまつ蛛の心か

題しらず

世の中よ芦間の風のいたづらに音ばかりして騒がしきかな

九十九里

濤聲古今依然鳴。 黒潮白波無限情。
 氣象雄偉可策驚。 日從千尋海中生。

(一一) 小學校の小集會

我が下手演説は避暑にも祟をなしたり。八月三日は東金の小學校にて同窓會の爲めに演説し、同九日は片貝村向上會員の爲めに村の小學校に於て演説す。折しも山武郡教育會の講習會ありし時なりしかば郡中の教員諸君多く來會したり。同十六日には同村婦人會の爲めに演説せしが、同二十一日には左の諸君子余を同學校に招き、酒なき小宴を開かれたり。

片貝村 小川莊三郎、古川與三郎、吉井革司、鈴木喜雄、宮本 觀、戸田靜一、
 中西忠吉、岩柳勝一、古川 徹

鳴濱村 行木實作、山田徳治郎、海保竹松、鷺見道堅、小松兎一郎、久保田勉之助
東金町 高智尾叔治、片岡政助
千葉町 柴田豊造
正氣村 渡邊英三

主客歡を盡くして散ず。此日も余は社會主義と國家社會主義の相違に就きて演説したり。其翌二十二日は成東中學校英語教師手塚君の招に應じ成東に行き成東中學校生徒三十餘人の爲に演説す。手塚君、余を成東館に慰はし其鑛泉に浴せしむ。諺に曰く口は禍の門なりと。眞に然り。余の辯を好むや、實に閑日をして忙日ならしめたるの感あり。されど持つた病は終に醫し難きものなり。

(一一) 樽酒相逢十歳前

明治二十八年日清戦争の既に終りし後、予は江原素六翁と我徳富蘇峰君とに従つて東金に行き、其八鶴湖畔の旗亭に於て一場の演説を試みたることありき。當時余等の演説を聞きたる紅顔の青年にして今は縣會議員たるものあり、一郷の長者として聲名既に縣下に鳴るものあり。片貝村長古川義郎氏の如き其一人にして、當時は猶ほ二十にも足らぬ人なりしが今は四人の子ありて膝を廻ると云ふ。余は、樽酒相逢十歳前の杜詩を懐はざること能はざりき。古川君鯉一尾を贈らる。好意眞に感謝すべきにあらずや。

(一二) 天下知己多し

我獨立評論微なりと雖も到る處に讀者を有す。岩柳君が未見の友にして余の爲めに周旋の勞を取られたるも、其讀者たるが爲めなり。東金の片岡君も亦我評論の讀者にして慶應義塾出身の青年なり。君の家は呉服商にして君は自ら荷物を負て近在の顧客を訪問す、毫も讀書子らしからず。片貝の藥劑師中西月華君は風雅の人なり。氏亦余の著書を読む。數ば余の僑居に往來して相語る。廿五日、此地天候險惡にして、波怒り、風激す。既にして月華君の書あり。

先日の暴風雨には定めて一驚せられたること、存候。

此秋を漁村に送る野分哉

店が忙しいので先生の宅へ遊びにも行けず。今日も行商、明日は一日在宅。御都合の善き時間に拙宅へ御來遊願度待居候。

からふとの志賀先生より近作の詩を送り來り候。

からふとの國境越えて秋の風

一日は行商し、一日は花を植う。君の境遇は理想的なりと謂つ可し。

(明治三十九年九月獨立評論)

現代日本教會史論（録一章）

新島襄論

若き教會が日に發達して、各地に新しき信者を加へたる時に方つて新島襄は米國に於てアマスト大學を卒業し、組合教會の宣教師となり、其寤寐に忘るゝこと能はざりし日本に歸りて傳道の業を始めたり。

新島襄は上野安中の藩士なり。彼れは日本の人心が世界の氣勢に覺醒せられ「いでや身を挺して海外に赴き、觀國の壯舉に従事せばや」との慾望、有爲なる青年の心を挑發しつゝありし維新前に於て當時の進歩的政治家板倉勝靜（備中松山藩主）の周旋に依り、藩主と父母の黙諾を得て脱藩潜航の手段を取り、米國に航したるものなり。彼れ自ら當時の事を語りて云へり。

予一日江戸の市中を散歩せし時、偶々玉島航海中（是より先き彼は舊侯の親戚松山侯の持船なる小蒸氣船に乗じ江戸と中國玉島の間を航したることあり）の一友に邂逅せしが、彼告ぐるに君公の汽船三日を出でずして箱館に向ひ拔錨すべきを以てし、且つ予に同行を促せり。こは唯一時の情誼的勸誘なりしと雖も、予に取りては決して興味なき問題にあらざりき。かくて友人と袂を別ちし後、新なる望の光は電の如く我心に閃めき終に箱館渡海を好機として年來の宿志たる海外に出づるの企望

を實行せばやと、心竈に決する所ありき。然れども如何にして此志望を達すべきか、舊侯に謀るも到底此行を許さるべくも見へず。故に余は先づ予の胸中を松山侯に告げ、舊侯及び父母には此事を知らしめずして今回の企圖を成就せんと欲し、直に松山侯の寵臣某を訪ひ事情を明かして懇願せしに、嘗てより相識れる間柄なりしかば、大に其企圖を賞賛し、予の請を容れ即刻藩邸に赴き藩侯に告ぐるに實情を以てせしかば松山侯も深く予の志を嘉みせられ、予の藩主に使者を送り、予をして自由の身たらしめんとし給へり。かゝる懇切なる使者に接して藩主も否むに由なく、終に予を許して自由の身となし給ひければ、茲に始めて予の計畫も漸く其緒に付き、箱館航行を妨ぐべき何等の障礙をも見ざるに至れり。父は此報を耳にするや親子の情として予の航海を欲せざりし者の如くなりしと雖も既に舊侯の命令ありたる後なれば今更予を留むるに由なかりき。此事の決定後二日にして祖母及び愛姉の盡力に依り旅装全く整ひしかば祖父は予の知己朋友を招きて此行を壯んにせんが爲めに小宴を張れり。主客席定まるや、祖父は先づ酌むに水盃を以てし再び相見ることの難きを語る。一座愁然として頭を擧ぐるものなく、唯予と祖父とのみ呆然として相對せり。祖父は胸中涙を以て塞がれん斗りなりしと雖も尙ほ強て笑を頬邊に湛へ、予も亦敢て悲哀の情を表さざりき。宴終るや祖父は予に告げて曰く、爾の將來は恰も百花爛熳たる山頂を攀るが如し、其快や名狀すべからず、何等恐怖の念を抱くことなく其志す所に向つて勇進すべしと。予は祖父よりかゝる忠言を

耳にせんとは夢想だもせざる所なり。然るに今や此勇壯なる別辭に接して予の勇氣は茲に一倍し感恩の情を以て祖父を拜し、父母愛姉及び一座の知己友人等に別を告げ宿昔の希望たる世界を見ずんば再び家郷に歸らずとの決心を以て多年住慣れたる我家を後にして萬里孤客の身とはなれり。

是れ正に成島柳北が、半生志業一難成、怒氣如兵夜有聲、墨海風濤紅海月、偏舟何日載吾行」と歌ひ、慶應義塾がウエプスターの大辭書を得て之を珍藏したる時にして彼れは候禽時鳥の四圍の光景に感ずるが如く時代精神に感じたりしなり。彼れは斯くの如くして成功したる吉田松陰となりて始めて米國の地を踏みたり。發する時歌ふらく

武士の思立田の山楓錦着ずして歸るものは

一襲弊衣三尺劍。回頭世事思悠悠。男兒自有蓬桑志。不涉五洲一都不休。

是豈宗教巡禮者の口吻ならんや。彼れは維新前の所謂志士の心を以て五洲觀國を思立ちたるなり。されど斯の如き壯心雄圖も故國の革命を見ては何ぞ憮然たらざるを得んや。彼れの米國に着して未だ久しからざるに彼れは幕軍の薩長二藩兵に破られたる報知を得たり。安中藩の首鼠兩端を懷きて爲す所なく空しく人後に落ちたるを聞けり。彼れの保護者たりし松山侯の悲惨なる運命に就きて聞きたり。彼れは早く既に功名心の氷の如くなるを感じたり。而して彼れを保護し、彼れを教育したるハーデー氏の家庭は心寂しき彼れをして深く耶蘇教徒の溫情を感せしめたり。自由と民政の耶蘇教國たり

し當時の米國的感化は彼れをして自由の使徒、民政の使徒、耶蘇教の使徒として其新運命を故國に試むべく決心せしめたり。

彼れが日本耶蘇教會の傳道者中に於て特に異彩を放ちたる所以は彼れが有志家たる木地に耶蘇教の訓練を加へたるに在り。彼れは耶蘇教の訓練を受けざる前に於て既に日本武士の醇乎たるものなりき。彼れの初めて米國に航せしとき、船中に在りて自ら武士の品位を害すべき羞辱を蒙れりと感ずるや、彼れは憤慨して刀を把り面目の爲めに死せんと欲したることあり。船中の賤役を課せられしとき過つて船長の食匙を海中に投じたることありしに彼れは毫も隠す所なく、船長の室に至り形容を以て自己の過失を謝し、自己の携帯せる金錢を盡く出し賠償として受領せんことを請ひしことあり。上海に於て支那譯の聖書を買はんと欲し船長の許に所持の短刀を携へ行きて之れを米貨入弗にて購求せんことを請ひ其の快諾を得て始めて欣然として之れを買ひしこともあり。其已むを得ざる境遇よりハーデー氏の庇護を受くる時に當りても彼れは成るべく自己の武士的體面を維持せんと欲し、恩に狎れて必要以外の物を請ふが如きこと無かりき。此の如くにして彼れは其素質に於て既に雄心烈志の壯士なりき。面目を重んじ、獨立を尊び、氣節を挫かざるは彼れが日本に在りし昔しに於ても、其交友に於ても、主として把持したる道德にして、此道德は米國に植ゑらるゝに及んで熱心なる耶蘇教徒となり、之れと共に熱心なる自由の信者となり、之れと共に熱心なる民政の信者となりたり。是れ彼れが他の傳

道者と撰を異にする所以にして、又其歸朝して少しく手腕を伸ばすに及んで耶蘇教趣味の青年が渴仰尊信して置かざりし所以なり。

果して然らば怪しむこと勿れ、彼れが始めて日本新政府の使節たりし岩倉、大久保、木戸等の一行に會せし時、日本在來の慣習に依りて此等の長上の前に平伏頓首するの禮を取らず、却て米國風なる平民的の禮法を取らんと欲したることを。是れ彼れの如き性格より自然に生ずべき決心なりき。此時彼れは又日本政府の公金に依りて留學し居れる十二名の書生と同様に取扱はるゝことを欲せざる旨を公言したりき。そは彼れは自ら自由の國に育ちたる獨立の紳士なりと信じたればなり。彼れの胸中に於て此感の如何に強かりしかは彼れが當時フリント氏に寄せたる書簡に於て最も明白に現はれたり。彼れ曰く

過日森公使がハーデイー氏に會見せられし時、今日迄予の教育のため消費したる費用の目錄を請はれしを以て或はハーデイー夫人に今日迄の予に對する失費を償還せらるゝ事なきかを懸念せり。予はハーデイー氏が其目錄を渡さるゝなからんことを希望す。若し一朝公使の手より凡ての失費を支辨せらるゝが如きことあらば予は日本政府の束縛を免るゝ能はざるに至らん。予は自由なる日本平民として主の御旨をなさんが爲めに一身を献げまつらんのみ。故にハーデイー氏に一刻も早く會見し此事情を陳せんことを希ふ。予は主が此問題に對して賢明慎重なる判斷力を我等に授け玉はんことを祈る。

とを祈る。

米國的自由獨立の精神が深く彼れを感化したること察すべきなり。

彼れは斯の如き素養と斯の如き抱負とを以て絶えて久しき故國を訪ひぬ。

(明治三十九年七月出版「基督教評論」)

平政子論

(一) 歴史研究の必用

今の世に人類學として土の中より腐りたる骨瓦のカケなどを掘出し、是はコロボツクルのもの、是はアイヌのもの、是は日本人種のものなど、吟味する學問あり。成程面白きことにて、歴史以前の人類は土中の遺器腐骨にて其差別を批判する外はあるべからず。さりながら眞の人類學と云ふべきものは歴史なり。人間の記録を丁寧な讀めば其癖は善く分り、其素性も争へぬものなり。たとへば今の佛蘭西人は昔はゴール人と云ひたり。羅馬の歴史にて其頃のゴール人の氣質を按ずるに全く今の佛人に似たり。鶯の子が鶯になり、雀の子が雀になるは進化論の原則にて國民とても此理にははづれぬものよ。されば支那人はどんな人種、日本人はどんな人種と云ふことが一番善く分るは歴史の詮議なり。先日も徳富氏の話に湖南の風俗は今も慄悍にして氣早なり、是は左傳時代の楚人なればなるべ

し、楚人が氣早にして戦争に強く、やゝもすれば敵陣に馳突し、うまく行かねば大將自ら劔を引て自殺するの風ありしは左傳に記したり、今の湖南人も之に似たり、血筋は争へぬものなりとのことなり。我等も同感なり。腐骨や、土器のカケも人類を研究するには妙なるべけれども萬一左様の詮議のみにて人間の癖を極め盡したりと思ふ人あらば笑止のことなり。先日我等日漢文明異同論と云ふを國民新聞に出したるとき或人類學者冷笑ひて山路も歴史の論ならば格別、人種の論などをするは身の程を知らぬものなりと云ひたりとてわざ／＼知らせてくれたる人あり。我等の書棄しものを左様に注意して批判を加へられし其學者の好意は感謝すべけれども、愚案はいさ／＼か相違せり。我等は歴史を見ねば人種の癖は分らぬことゝ存するなり。歴史以前の人種ならば成程土中の遺物を詮議せねばならぬとなるべけれども、歴史以後の人種は左様の詮議よりも歴史の詮議が大切なり。されば我等も物の數ならぬ史學ながら猶ほ其専門上より人種論に立入ることを得べしとは存するなり。是は餘談ながら史學と人種論の關係に就て申すなり。それにつきて我等の常に笑止に存するは西洋人の亞細亞婦人論なり。西洋人は亞細亞にては婦人は奴隸同様の取扱を受く、亞細亞の婦人は無智、卑屈にして男の機嫌を取る計なりなどと云へり。西洋人が左様に言ふは例の旅人の早合點と云ふものにて勘忍もなるべけれども、日本人の耶蘇坊主などが西洋人の口眞似をするは馬鹿馬鹿しきことなり。朝鮮も支那も其實はなか／＼女の威張る國なり。五雜俎に女房を恐れし有名の人物を記したる其中には心學の祖、王陽明先

生などもあり。さりながら是れは其人々に限らず、内を畏るゝは支那人の癖なり。女房と疊は新らしきが善しなどと云ふ江戸兒流儀は支那人の夢にも知らぬことなり。朝鮮にて女房に權あることは我等一昨年京城にてくはしく聞きたれども此には述べず。先年死なれたる同國の王妃が王と共に政治に口を出し殆んど日月を雙べ懸けて乾坤を照すとも申すべき程の威力ありしも畢竟國風故とは存するなり。但し西洋人には耶蘇の教ありて男子の他淫を禁じ、表向だけ一夫一婦の制を嚴守し、支那には妾を置くことを許す習なれば此段は亞細亞の女がいくぢの無きやうなれども、支那にては妾を置くものは少數の貴族のみにて平民は大抵一夫一婦なり。されば儒書にも庶人は一夫一婦たるべしとあり。其上妾多き貴族の家にては本妻は次妻以下に對して威力あり、主婦の權中々に強し。殊に士大夫の家に至りては主婦は主人と對等の品格を保ち、諸妾は其支配を受く。されば妻は齊なり、齊きなり、夫と對等なりと字引にも記したり。左様の詮議もせず、内幕に入らず、たゞ上面を一寸見たるのみにて亞細亞の女はどうかの斯うのと大膽なる批判をする西洋人の觀察は笑止の至りと云ふべし。くれぐれも人種の特質を知らなく思はゞ歴史を詮議せねば分らぬことなり。我等が此文にて頼朝の妻女平政子の事を記すも、獨り昔話をして讀む人の願を解かんとするには非ず。日本の女の癖とてもやはり日本の歴史を知らねば分らぬこと故、日本の女の中にて殊に目立ちたる一人物を捕へて横からも堅からも、其人と爲りを批判し、日本の女は如何なるものなりやと云ふ問題の一端を解釋せんが爲めなり。高き山

も其根は平地に在り。日本の女が奮發すれば何處まで往けると云ふ詮議は日本の名高かりし女性を研究するに如くは無し。

(二) 政子の教育

頼朝の妻女平政子は伊豆の豪傑北條四郎時政の長女なり。歴史の詮議には地理の研究が大切の事に、我等も政子を論せんとするからは實は北條の古跡なりとも見物して、其後に筆を着けたきことと思ひたれども、多忙の身はそれもならねば書物の上の想像にてすますなり。伊豆の國三島の驛より南に折れ田方郡の内市ヶ谷村、中原、中島村、間宮、野中、茨木村など云ふ村を過ぐ。此道大凡二里餘なり。それより四日町村、寺家村、中條村の三ヶ村を土俗北條と呼ぶ。中條村の右の方に竹一叢あり。北條時政の住みし所なりと云ふ。我等の問題たる平政子の生れたるは此處なるべし。是れは徳川時代の状況なり。大抵今の三島より修善寺まで行く鐵道の線路に當れば何處かの停車場に下りたらば近處に必ず其地あらん。好事の人は尋ねらるべし。政子は嘉祿元年六十九歳にて歿したりと吾妻鏡脱漏の卷に見えたるを眞なりとすれば後白河天皇保元二年の誕生なり。然らば父時政二十の時の初子にして此時未來の所天たる頼朝は九歳の少年なりき。忒斯様の邊土に育ちたる女なれば必ず無教育のものなるべしと頭から政子の人と爲りを下墨む例の高慢なる現代女學生諸君もあるべけれども、それは誤解なり。政子の父時政は伊豆にては屈指の豪傑なり。莊園許多領して一方に雄視し、系圖は桓武の御

末、鎮守府將軍貞盛より時政に至りて七代の相傳を誇り、祖父時方は伊豆介たり、父時家は從五位に叙し、名家の譽高し。其女子たるもの全く無教育の田夫野人たるべきや。左様の道理なきこと固よりなり。或は時政固より伊豆の英雄には相違なけれども、畢竟するに今の世の大地主に過ぎず。徳川時代の田舎にては相應の山持、田地持の息女にても目に一丁字なきが多かりき、まして鎌倉時代の昔なり、政子の無教育たること勿論なりと物知顔するものもあらん。是亦時世を知らぬ僻論なり。徳川時代は大名各一方に割據し、江戸に參勤交代する外、百姓などは互に境を隔て、も相交はらざりし習なりしかば大百姓の娘なども井の中の蛙大海を知らざる譬の通り、無學文盲のもの多かしなり。然るに政子の生れたる時代は左様なるものに非ず。日本國中は随分人の往來繁かりしなり。先づ番役とて田舎武士の時を定めて京都に祇候したるをば諸書に記るせり。東國の住人畠山庄司重能、小山田別當有重、宇都宮左衛門朝綱大番役にて在京すと平家物語にもあれば伊豆の住人として固より此數に漏るべき筈も無ければ時政なども必ず數ば上京したることなるべき歟。是れは公けの事なれども私の往來は猶ほ多かりしと見えたり。仔細は其頃京家も武家も莊園と云ふもの諸國に持ちたれば乃貢など取集むる爲めに其筋の人の往來繁かりしならん。是れ一。(台記には頼長が莊園の奥州に在りしに人を遣りて乃貢を催促せしめたることを記せり。是其例なり。)又熊野詣、高野詣其外都近きは伊勢、天王寺、高野、金峰山、遠きは宇佐、鹿島、香取などに參詣する俗人の宗教的巡禮も其頃は多かりき。先頃九歳

の少女、大阪より富士詣したりとて例の新聞紙などにて大騒ぎをしたれども是れは汽車の便あれば何の造作も無きことなり。汽車もなき政子の時代にも上野國の住人大窪太郎が娘は十三の歳、熊野詣を志したりと記されたり。斯様に旅行の多かりし世には必ず文明の傳播と云ふことはあるものなり。是れ二つ。其頃は宿々に遊君と云ふもの多かりき。しばらく伊豆に近きものゝみを擧ぐるも黄瀬川宿にもあり、足柄山の下なる關の下宿にもあり、大磯にも勿論ありき。海道の往來繁からざらんには斯様の渡世はなるまじきなり。平家に加賀より京に上りて白拍子をするものありと記したれば浮きたる稼業の女なども京田舎を廻り歩きける歟。何さま人の往來相應に多かりしと見えたり。是れ三。頼朝石橋山の戦敗れしとき時政は相模より山臥の巡路を経て甲斐に赴き、其國の源氏を語りたり。かく山臥など云ひて役の行者の流を對むものは諸國の山々に分け入りて自ら往來の途を開きたるなるべし。或は陸奥の童巫の叡山、八王寺の社に參殿として祈請を凝したるもあり。東國、西國の修行を心掛くる雲水の僧もありし。是も亦自ら文明の普及を助くべきものなり。是れ四。其頃は船の通ひも随分大膽にて、諸國に行交ひたり。伊豆の流人を伊勢國阿能の津より船にて下し、遠江國天龍灘にて大風に逢ひしと云ふこと歴史記にも見へたれば日本第一の難所と聞へたる遠江灘も其頃既に舟は通ひけるなり。但元物語には商人船の伊豆大島に通ふ由記したり。されば今の七島なども亦全く知らぬ里には非りけめ。殊に西國は船には善く訓練し、九州の商人船は鬼界ヶ島に至り硫黄を買ひ、又四月五月に唐船の

鏡を解き貿易も行はれたり。吾妻鏡に範頼九州より頼朝に献じたる品の目録を記したる内に唐錦、唐綾、唐墨、唐筵などあるを見ても時の情を察すべし。されば海路の往來も思の外疎からず、従つて京と田舎の心も早く相通ひける歟。是れ五。殊に驚くべきは其頃の世に馬の多かりしことなり。神社の幣に物馬を献じ其外祝儀事に馬を贈りしは常の習にて日本紀要に永延二年攝政兼家新に二條京極の第を造り、公卿以下を會して落成の賀宴を張りしとき、源頼光馬三十匹を贈りて賓客に分ちたりと記し、吾妻鏡に壽永元年若君誕生の時、源家の家人馬三百餘疋を献じたりと云へるを見るも馬の多かりし事を想ふべし。今も大刀馬代など云ふ詞の残れるは其頃の世の餘波なり。馬は屈竟なる交通機關にして、極端に其馳驅の力を假りたらんには京より鎌倉に消息するに三日あらば足りなん。さらば馬の多きは是れ則ち交通機關の完備なりとも謂つべし。交通機關の完備せる世になど文明の都にのみとどこほることのあるべき。田舎も必ず其恩澤を蒙るべき筈なり。是れ六。此六ヶ條の道理に依りて我等は伊豆の北條に育ちたる女なる故、政子はさつと無學文盲なりしなるべしと大束ねに極めてかゝるべき道理なしと存ずるものなり。加之我等嘗て日蓮法師の立正安國論と云ふ書を読みしに法然の徒、其師の言を模に彫り之を海内に弘め、之を洛外に翫ぶと記るせり。其頃既に印刷の術あり、印刷物を諸國に廣むることの一端を知りし證據とすべきものなり。されば或は斯様の板なども諸國に傳はりしか、是れも亦必ず無しと斷ずべからず。所詮政子を以て無學なりとするは謂れなきことなるに似たり。猶は

政子が教育ありし女性なりしことの一證あり。即ち吾妻鏡に走湯山伊豆權現の尼法音は政子の經師なりと記したるのみならず、政子が年老いたる後麻訶止觀の講釋を聞きたる由をも載せたることなり。經師とは其名の如く經の師なり。政子に經讀むことを教へたるなるべし。其頃は宗教の盛んなる世にて、人々經を誦し或は之を寫すを功德としたり。賴朝さへ伊豆に居りし時は毎日勸行怠なしとありて日々經を誦したるのみならず、平家を亡ぼすべき素願を立て、法華經千部を讀誦すべき由を誓ひたることもあり。(吾妻鏡)。保元物語に六條禪門爲義の妻女が三人の幼子を失はるゝことを清水觀音に向ひ泣きくどきたる文句あり。妾九つの時より月詣でを始めて十五になるまでは十八日毎に三十卷の普門品を讀み奉り、其年より毎月法華經三部を讀み奉りたり云々。其頃の女性が經讀む習ありしこと略ぼ察すべし。經師とは即ち女性の爲めに經讀むことを教へしものにて、今ならば家庭教師と云ふべきものならん。かゝるものゝ北條の屋敷に出入したることを考ふる時は政子は無教育なりとは如何にしても思はれぬことなり。其上天台の止觀と云ふは随分むづかしき哲學にて、今日の我等さへ讀めば頭の痛くなる程の書なり。其講釋を聞きて分る程の女ならば學問に掛けても心にくさ女なり。按ずるに政子の子息鎌倉の右大臣は日本一の歌人にて金槐集の一篇は千古に光れり。是れも政子の庭訓を依れる歟。凡そは政子と云ふ女は其時代の教育に於ては人に劣らぬ程の素養ありしこと全く疑ふべからず。これのみには非ず、政子の育ちたる北條の里を以て無下の邊土なりと思ふも亦誤解なり。第一北條の

里は伊豆の國府よりは僅に二里ばかりの處にて、而も其間は平地なり。國府には三島神社あり、神領も相應にある大社にて毎年八月十七日には神事あり、群衆の參詣衢に滿つ。(吾妻鏡)。其頃の坊主神主は智識の淵藪なれば本讀みなども多かりけん。さて三島より四里ばかり箱根山を上げれば名高き箱根權現あり。此は住侶殊に多く別當と云ふもの威權を揮ひ大名同様の勢あり。東關紀行に朱樓紫殿の雲にかさなれる粧、唐家の驪山宮かと驚かれ、巖室石龜の波に臨める影は錢塘の水心寺と謂つべしとあるにて其時代の盛なりし様子は察すべし。住侶も多く、房舎も立並びけん。是れ亦學問の一中心とすべし。又伊豆權現と云ふは世俗に伊豆の御山、椰の御山など云ひ熱海の近所に在り。今の里程にて三島より熱海までは六里餘なれば北條よりも其位なるべし。尤も其間には山あれども高山にあらず一里餘も歩るけば絶頂に達する位なれば、天城山を越へて下田に行くが如き難所に非ず、女の足にても随分歩き兼まじき所なり。此伊豆權現も亦衆徒多き道場なれば是亦文明の一中心なり。されば伊豆の國にて若し文明の化を被るに都合善き所あらば北條の里は則ち其地なりと申すべし。扱此等の事共を一束にして想像を廻らすに都の在番より歸りたる時政は、京女郎の學問盛んにして漢語を使ひて男をへこますものあり、今の女生が佛蘭西語など鼻聲にて語り男を煙に巻くものがあるが如く、昔の京女郎には漢語を使ひて高慢顔をしたるものあること源氏物語に出でたり、女ながらも色々の物語作りて作者の名高きものあり、今の時勢にては女なりとて油斷すべからずと息女の政子を教訓したることもあるべ

く、或は又師壇の契に依り箱根權現、伊豆權現などの住侶、北條の家に往來し、學問の詮議もあり、政子も利口者なれば自然見慣れ聞慣れ學問手習に志し、經師の尼の教訓にて相應の本讀みにはなりしならんと思ふも丸で跡方なき空想なりとは云ふべからざる歟。是れは政子の幼時につきて我等の想像したる所なり。

(三) 初戀

是れよりは政子の初戀を記すべし。其前に必ず政子の教育ある婦人なりしことを讀者に承知してもらひたし。無學文盲の女の戀物語は趣味もなければ勿論詩題にならず。女も男を理解するの力あり、男も女を理解するの力あり、双方相應に智識上の同情ありての戀ならねば語るに物うし。然るに此點に於ては其頃の女は徳川時代の女よりも却て近代式なるは面白し、書くにも張合あり。徳川時代の女は町家は別問題として士人の家にては眞に三界に家なしと云ふべき氣の毒の境界なりき。則ち女は獨立の財産と云ふものなく、實家に居る時も、嫁に行きたる時も、何時もかゝりうどの姿なり。然るに政子時代の女は左様のものに非ず。女も親の譲を受けて獨立の地主たることを得たり。或は夫死するときは後家分を貰ひて乏しからず暮すものあり。承久記に後鳥羽の寵女龜菊に攝州長江倉橋の兩莊を賜はりたること見えたるに依るも女性が獨立して地主たりし有様を察すべし。此習は足利の末まで續きたり。女性に學問あり、獨立の氣象ありしは一は之が爲めなるべし。扱又婚禮の習慣も其頃は却て歐羅

巴式なり。妻を娶ることは富くじを引くと同様にて見合の席に双方顔に紅葉をちらしたる計り、それにて直ぐ婿を明け千秋萬歳を契ると云ふやり方は徳川時代の式にして政子時代の流儀に非ず。政子時代はそれよりも餘程自然の人情に合ひしものなり。たとへば男若し見そめたる女房あれば、先づ歌を詠みて心の秘密をほめかし、數々の玉章を送りて切なる思を述べ。それにて女の心弱くなれば此處にて偕老同穴の契を結ぶ。源氏物語、平家物語の戀何れも同様なり。四角四面の儒者などは之を見てけしからぬ淫亂の風なりとて歎息するものありし様子なれども、斯様に男女自ら撰ぶからは男の方にては、女の方にては相應の分別をし、行末をも考へ、浮とは人に契らず、却つて情も深かるべき歟。其上男女斯く自ら撰ぶ時は進化論に云ふ雌雄淘汰法則にて人に好かれぬ男女の癖は自ら止み、やさしき優美の風をも長ずべし。日本美文の絶好模範とも申すべき源氏物語も實はかゝる時代の産物なり。かの侍従と云へる宮女が「まつよひの更け行く鐘の聲聞けばかへるあしたのとりはものかは」と云ふ名吟を世に残し、天下後世をあはれがらせたるも自由戀愛の結果なり。薩摩守忠度或る宮原の女房の許へ通はれけるが、或夜おはしたりけるに、此女房の局に、女客來居て歸らず、小夜もやうく深け行きたり、薩摩守休へ切れずなりて、軒端にたゞずみ扇を荒くつかはれければ彼女房、何氣なき様して野もせにすだく蟲の音よと優に口ずさみたれば、忠度扇を遣ひやめて歸りたり。斯様な風流は唯自由戀愛の結果なり。我等とても敢て自由戀愛の提灯を持たんとするには非ずと雖も、朱子學流の密閉主義が日本

固有の風儀なりなど云ふえせ國粹家あらんことを恐るゝが爲めに日本にも自由戀愛の時代ありしことを断はり置くものなり。扱政子の時代は斯様に男女の間の近かりしとして、其初戀の模様を案ずるに此處に前兵衛佐源頼朝と云ふものあり。去る平治二年十四歳にて此國に配流せらる。平治物語には蛭ヶ小島に流さるゝとあり。箱根より三島に下るものは今も親切なる農夫の鋤を止めて左の方に蛭ヶ小島見ゆると告ぐるに逢ふこともあるべし。北條よりも餘程三島の方に近く、下田街道よりはやゝ東に寄りたり。頼朝配流の時は政子未だ六歳の娘なれば双方に戀物語の成立すべき時期に非ず。たゞ此處に一寸断はり置きたきことあり。則ち流人たる頼朝の位置なり。世には流人と云ふ時は徳川時代に大島八丈島などに流されし流人の如く思ふものあり。かの關ヶ原役に西軍の大將たりし宇喜多中納言秀家が八丈島へ流され、あさまし氣なる蟹の苦屋に身を寄せて、後は山、前は海、磯の松風、波の音より外は問ふものなく、「藻鹽たき、うさめかる身は浦風のとふばかりにやわぶと答へん」と柱に書付けたりなど云ふ後の世の流人と頼朝時代の流人と同様なりと思ふは歴史を知らぬ人の早合點なり。左様に懲役人同様の境界ならば頼朝如何ほどの色男にても、まさか政子に惚れられまじきなり。吾妻鏡を按ずるに頼朝勅勘を蒙りて流人の身とはなりたれども勿論源家の正統にて累代の家人と稱して窃かに志を通ずるものなきに非ず、門下祇候の徒も少からず。工藤介茂光、土肥次郎實平、岡崎四郎義實、同與一義忠、宇佐美三郎助茂、天野遠内遠景、加藤次郎景廉など云ふ伊豆相模の住人ども經廻の

士と稱してしばしば安否を訪問したり。就中近江國の住人佐々木源三秀義は平治の時義朝の味方として戰場に兵略を盡くせしが頼朝伊豆に流されし後も舊好を忘れず、平家の權勢に諛はざりし故、相傳の地佐々木の庄を奪はれ、子息を相率ゝ姨母の夫秀衡を待まんとて奥州に赴く途中、相模の國に到りしに、澁谷庄司重國と云ふもの秀義の義氣に感じ留置きし間、當國に住する二十年に及び子息定綱、盛綱は常に頼朝の屋敷に伺候せり。又頼朝の乳母比企尼も夫掃部允と共に武藏國比企郡に歸り廿年の間訪問怠りなく、三浦、千葉なども時々消息を通じ、殊に乳母の妹の子散位康信は其身京都に在りながら毎度飛脚を飛ばして洛中の仔細を報じたり。此等の記事に依りて按ずるに流人に似合はぬ贅澤の暮しにて屋敷なども威めしく作りなして住ひたるものと見へたり。頼朝大庭三郎に追はれて土肥の杉山に通れしとき家義と云ふもの頼朝の念珠を拾ひたり。吾妻鏡に此念珠は武衛日頃持經たまふの間、狩倉邊に於て相模國の輩、多く以て之を見奉りしものと記したるに依るも流人ながら狩などにも出で伊豆、相模を歩るき廻りたるものと思はる。一概に流人と云ふ語に泥みて懲役人同様のものと思はゞ事の真相を見誤るべし。頼朝と同じ頃に伊豆國山本の郷に散位平兼隆と云ふものありき。吾妻鏡に平兼隆は伊豆の國の流人なり、父和泉守信兼の訴に依りて當國に配せらる、漸く年序を経るの後平相國禪門の權を假りて威を郡境に輝かす、是れ自ら平家一流の氏族たるに依りてなりとあり。流人と云ふものの如何なるものなりしかは是れにて察すべし。我等は是より政子の戀物語に移らん。頼朝は随分好

色の男にて密通の女も多かりし故政子と契りしが彼れの初戀なるべきや否やは疑問なり。源平盛衰記、曾我物語などには頼朝始め伊東祐親の家に居て其女に通じ子を生ませけるを、祐親平家の聞へを憚り其子を水に沈め、女を江間小四郎に嫁し、あまつさへ頼朝を殺さんとしたりしかば頼朝伊東に居たたまれず、北條に遁れて時政を恃みたり、政子の頼朝と契りたるは其後の事なりと記したり。二書ともに小説野乗の類にて深く信ずるには足らぬ書ながら、吾妻鏡にも安元元年伊東祐親法師、武衛を誅し奉らんと欲しけるに、祐親の子九郎此事を聞き竊に告げ申す間走湯山に遁れ玉ふと記したり。此時頼朝二十七歳、女さはぎの有りそなる年頃なれば伊東の女の事或は事實なるやも知るべからず。舊幕時代には伊豆の東海岸、和田村、新井村、湯川村、松原村、鎌田村、竹内村、岡村などの總名を伊東と云ふ。天城山の山脈西より迫り、細長き海岸の地にして熱海より五里ばかり南なり。鎌田村白坂と云ふ山の麓に祐親の屋敷あとしてあり。温泉場は和田村に近し。温泉場より南に日暮しの森、音無の杜あり。杜の後の小川をならずの瀬と云ふ。頼朝卿伊東祐親の女に通ひし處なりと土人は今も語るなり。せいひの低き大きな頭の色男が戀に身をやつして妹がり通ひし風情を想像したらば誰か抱腹絶倒せざらんや。英雄と雖も左様の弱點を考ふる時は並の人間なり。伊東にての騒ぎを頼朝二十七歳、政子十九歳の時の事とし、頼朝と政子と契りたるは其事ありし後とすれば曾我物語などに兩人戀の關係は頼朝二十九歳、政子二十一歳の時に始まりたりと記したると時日も合ふやうなり。さらば双方

共に蕾の花など、云ふ年齢に非ず。戀には寧ろ熟し過ぎたる位の年なり。さりながら或はそうでも無く、もつと早き戀中なりしも知るべからず。仔細は頼朝の長女大姫と云ふが木曾義仲の子義高の妻となり、義高頼朝に殺されしとき大姫愁傷して病を得、政子も大きに心配したること吾妻鏡元暦元年の條に在り。其文を虚心にて讀めば大姫はどうしても政子の實子としか思はれぬなり。政子果して大姫の實母ならば頼朝政子兩人の契はもつと若き時であるべき道理なり。即ち假に大姫愁傷の年を以て十三歳とする時は其誕生は承安四年にして政子十六の歳時なり。即ち何程遅く考へても頼朝政子の初契は頼朝二十三歳、政子十五歳の時としか思はれぬなり。其の頃は上流社會の早婚時代にて女も早くなま心のきたる様子なれば（平家物語、源平盛衰記に其證多し）大姫が十三歳にして婿を戀ひて精神的情死を遂げたるも、政子が十五歳にて頼朝と契りたるも怪しむに足らず。さらば盛衰記、曾我物語の記事は全く根もなき小説にして、安元元年、伊東が頼朝を殺さんとしたるは別の仔細あることなるべしとも思はる。尤も我等は此處に左様な面倒なる考證を爲さんとするにあらざれば、兩説のどちらにても宜しきことながら、浮か浮か書を読む人を驚かして、斯様な處から面白き事實も發見するものなりと云ふことの證據を示したるまでなり。そこで頼朝政子兩人の戀中は男二十三歳、女十五歳にて双方ともに恥かしき初戀なりしとするも、或ひは男二十七歳、女二十一歳、思慮分別の相應につきたる時の契なりとするも、そは讀者の判斷に任すべけれども、我等はどちらかと云へば頼朝も

初戀、政子も勿論顔に紅葉の初戀なりとする方が事實に近かるべしと想像するなり。そは頼朝の亭が始終蛭ヶ小島に在りたりとすれば伊東は中々路遠く、而も往來甚だ難儀なり。蛭ヶ小島より熱海まで山越六里、熱海より伊東まで海岸傳ひ五里半とすれば合計十一里半の道のりなり。或は蛭ヶ小島より北條まで一里半、それより今の太仁八幡に掛り、是れも嶮岨の山を越して伊東に出づる道はあれどもそれも十里に近し。其頃は男の方より女の方へ通ひたる世の中なり。惚れて通へば千里も一里と云ふ俗諺もあれども、さりとて餘り草臥れる戀路のやうなり。小説の作者は時間と空間の論は無用にて、何事も面白、可笑しく、人の心を動かす様に書けば善い譯故それにも不都合ならざるべけれども、すこし常識にはづれたる沙汰とは存するなり。それ故に男二十三歳、女十五、水の出ばなの初戀なるべしとして置くが善しと存するなり。此戀が其頃の風俗にて自由の契なりしは勿論なり。吾妻鏡に政子自身の惚氣を記して「君（頼朝を指す）流人となり、豆州におはし給ひし頃、吾に於て芳契ありと雖も、北條殿（時政を指す）時宜を怖れ潜かに引き籠められしを、猶ほ君に和順し、暗夜に迷ひ、深雨を凌ぎ君の所に至る」とあり。随分御安くない戀中と申すべし。其頃普通の手のつきより察するに先づ頼朝より艶書などを送り、それより政子の心解けたるならん。かくて兩人の戀漸く募りし時時政も覺り、世が世ならば勿論、親が取持ちて善きほどの婿なれども、平家世盛りの今日なり、それを流人の源氏と縁結びたりとありては祟も恐しとて親の威光にて生木をさかんとし政子を取籠めて頼朝に

會はさじとしたるなるべし。時政とて始めより頼朝を奇貨とし天下の執權たらんなど、云ふ野心ありしに非るべければ左様に思ひしも尤なり。然るに政子は親の威光に恐れず、此人ならでは一生を托すべからずと決心し、暗夜に迷ひ、深雨を凌ぎ、欠落して頼朝の屋敷ににげ込み、どうしても夫婦にならねば死ぬとでも云ひて強情を張りたるものと見へたり。是れが其儘にて平家の天下も長く續き、頼朝も一生流人にて終りたらば政子はいたづら娘の標本なり。然るに此色男、一旦風雲に際會して運命を開き六十六國總追捕使、總地頭となり、將軍政治の創業者となりたれば、さては政子は風塵中に英雄を鑑識したる間秀中の豪傑なりと云ふことにはなつたりけり。尤も英雄と云ふものは女に惚れられそうなものなり。女にても男にても、えらき奴は自然に鑑識の才あり、恰も犬が鼻にて主人の足跡をかぎ分るが如く英雄を鑑識するものなり。左様なる分別ある女ならば英雄に惚れるは當然なり。木下藤吉郎も未だ微祿なりし時に淺野の娘にはれられたり。大雅堂も貧書生なりしとき善き妻を得たり。女の中には随分かはり者ありて眼光早く英雄の心髓を射るものなきに非ず。無學文盲の町家の浮氣娘ならば役者に惚れることもあるべし。眞に思慮分別ある女ならば秀吉、頼朝などの人物はたしかに其戀を厭ぐるに足るべきものなり。畢竟誰れにも惚れられず、誰れにも好かれぬ奴は氣にはたらしのなき愚物鈍才ならんか。我等はそれ故に英雄は艶福多き道理なりと思ふ。紫は園にありても隠れなし。頼朝は裸體にしても頼朝なれば何處にか貫目もありしならん。それを見抜きて一生連れ添ふべしと決心した

る政子も恐ろしき女なり。頼朝もかゝる少女の深情に對しては蓋し感謝の念に堪へざりしなるべし。故田口鼎軒君、義經は鎌倉殿の前、大名小名の並居の真中にて靜御前に惚氣を歌はせたる程の艶福家なりと云ひたるが、艶福の程度は兄頼朝も弟九郎に譲らぬ様なり。抑も人間を動かすものは戀と功名と慾なり。其中殊に戀は罪のなきものなり。政子のやうな女に惚れられたらば男子の本懐之に過ぎずと云ふべし。左様な女に惚れられんとせば馬鹿では出来ぬことなり。此點より云へば戀は向上の道なり。感激鼓舞の動機なり。歴史の波も戀より動き始めたが多し。さりながら當節の戀の如く襟元につく戀、浮氣の戀、露骨の戀、現金の戀は埒もなきものなり。

(四) 嫉妬の辯

頼朝は密通の女少なからず、吾妻鏡に記したるもののみを擧ぐるも、(一)良橋太郎入道の息女龜の前は顔貌の濃かなるのみに非ず心操殊に柔和なるものなり。頼朝未だ豆州に在りし時より昵近したりしが養和元年の春より密通す。頼朝時に年三十三、女は勿論十代の處女なりしなるべし。(二)次には常陸介藤の時長の息女。是れは鎌倉に移りたる後殿中に祇候したるを頼朝例の色好みの癖にて密通に及びたるものにて文治元年二月二十六日男子を生みたり。頼朝時に年三十七。(三)丹後内侍。文治三年甘繩の家にて彼女病癒の時頼朝内々訪問すとあれば是れも戀の中なりしは言ふまでもなし。(四)伊達入道念西息女。是れは大進局たいしんくわのつぼねとして幕府の官女なり。頼朝之にも密通して子を生ませたり。此頃の頼朝

は既に四十を越へたる後と思はるれば若氣の無分別とも云ひ難し。その外吾妻鏡の記者はそれと明かには言はねど怪しき關係のもの猶ほ少からず。即ち(五)葛西三郎清重の妻。是れは治承四年十一月十日頼朝武藏國丸子庄を以て清重に賜ふ。其夜清重の宅に止宿したるに清重妻女をして頼朝の膳を備へしむ。但し妻女なる由を言はず、御給仕の爲めに他所より青女あせなを招くの由申したり云々と記したり。猫に鯉節なり。此夜頼朝手を出さずに置きたるや否やは疑問なり。(六)比企藤内朝宗息女。姫の前とて幕府の官女なり。殊に頼朝の意に叶ひ、容顏甚だ美麗なり。權威無雙の女房と稱せられき。是れも何だか知れたものに非ず。其外頼朝の遂げんと欲して遂げざりし戀にて單に意中人だけにて終りしものもあり。(七)新田冠者義重の息女なり。是れは頼朝の兄惡源太義平の後室なり。頼朝數ば艶書を通じたりと雖も承諾せず。天下の總追捕使も此戀だけは心に任せざりき。吾妻鏡をざつと見渡したる所にて頼朝のいたづらは此の如し。書物に傳はらぬ戀話は何程ありしや知れず。中々多情の人物なりと申すべし。さりながら此に一事の注意せねばならぬことあり。他なし、此戀が悉く文字通りの密通にして今の藝者狂、妾騒ぎの如く天下晴れての免許ならぬことなり。是亦吾妻鏡の證文歴然たり。則ち龜の前の事につきては頼朝、彼女を伏見冠者廣綱(此男頼朝の幫間にて數ば戀の取持をしたる善くない奴なり)の家に住まはせ時々通ひて樂みたりしを露顯して大騒ぎとなりたりと記し、丹後内侍の所へも潜かに通ひたるなりと記し、時長息女との戀も秘密なりしを事露顯して政子の憤る所となれり

と記るせり。歴史を讀むもの之を見て是れは政子の嫉妬甚しく、頼朝も閉口し、色好みながら成るべく内々に立廻はり諸事穩便にしたる故なり、即ち政子の焼餅やきたることを記したるものなりとするもの多し。大日本史にも「政子性妬忌、頼朝之を畏憚す」とあれば水戸の史家も同感なるべし。抑も女には焼餅やき少からず。徳川第二世將軍の室、崇源院殿の如きも名高き焼餅やきなりと聞へたれば政子が焼餅やきなりとて敢て怪むに足らず。吾妻鏡の記す所に依れば成程政子のやき方は随分念の入つたものなり。しばらく龜の前の事だけを以て例とするも、今ならば必ず新聞紙の三面種なり。則ち政子は頼朝が龜の前を廣綱の宅に隠し置くことを嗅ぎつけ瞋恚を焚し牧三郎宗親と云ふものに命じ、廣綱の宅を破却させたり。今の世に焼餅やきは多けれども亭主の隠し置く女房の宅を打毀すと云ふ高手の手段に出づるものは少かるべし。而もそれが日本一の武將鎌倉殿の妻女の業なりとすればいやはや沙汰の限とも申すべし。幫間の廣綱も此亂暴なる處置に驚き、辛くしてかの美人を伴ひ大多和五郎義久の鑑摺の宅に通れたり。是れは壽永元年十一月十日の事なり。翌十一日は何事もなし。同十二日は頼朝遊興に事寄せ、わざ／＼鑑摺まで出掛け（鎌倉逗子の間に鑑摺と云ふ所ありと記憶す、其處ならん、義久の亭に行き龜の前に逢ふ。多分龜の前より色々の愁歎話あり所謂梨花一枝春雨を帯ぶる美人の愁容は益々頼朝の心を惱ましたる事ならん。此時頼朝は牧三郎に伴をさせたり。三郎の迷惑察すべし。扱鑑摺に着きて廣綱を召し、三郎と廣綱の兩人を一所に集めて面を合はせさせ、一昨日の騒は

全體どうしたものぢやと對決に及ばれたり。三郎も此に至りては大に困却せざるを得ず。陳謝舌を巻き、面を泥沙に垂れ、誠にはや恐入て候とてさまざま陳謝に及ぶ。さりながら寵女に耻辱を被らせたる當人なれば其位の詫言にては頼朝の鬱憤容易に晴れず、手づから三郎の鬢を切りたり。しかし其の時も頼朝は政子の焼餅をやきたることを悪口せず、三郎に向ひ、汝が御臺所の事を重んじ奉るは最も神妙なり、それを悪しと云ふには非ず、但し常は何事も御臺所の仰に従ふべき筈なれども、かゝる事は内々吾に告げてくれても善ささうなものなるに、忽ちに耻辱を與へたるは甚だ奇怪なりと云ひたるのみなり。則ち政子の焼餅をやくは尤なり、汝が政子の命を守りたるも尤なり、しかし斯様の事は内々知らせてくれても善いぢやないかと怨みたるまでなり。然るに三郎は何とも面目なく思ひけるにや其儘逃亡したり。頼朝は其夜鑑摺の家に止宿す。冬の夜長に美人の怨語、嬌語を聞きたるならん。此騒動是にて静まらず。三郎は御臺所の仰を重んじて勤める所を勤めたるのみなるに、それを御勘發ありしは聞えぬことなりとて今度は政子の父時政がおこり出し、俄に豆州に進發したり。諺に云ふ子供の喧嘩に親が出でたるものにて騒は中々大きくなりたり。されど流石に頼朝なり。妻女に手をついて詫るやうなのさき事はせず、故らに何の構ふものかと云ふ態度を示し、御臺所の御氣色の恐ろしく候へば日頃の御契も是迄と思召し切らせ玉へとて龜の前の辭退するも聞かず、小中太光家の小坪の宅にかこひ置き寵愛日を追つて愈盛なりしが、それにも餘り政子の機嫌を損じてはならぬこともありと見

え、例の幫間の廣綱を遠江國に配流し、漸く政子の憤を散じ、事落着したり。是は頼朝の女騒ぎの一例なれども政子の焼き方の手きびしかりしこと是にて明白なり。さりながら此に一條の疑問あり。吾妻鏡は北條時代に出來たるものにて、作者の心、必しも時世に倣するとはあらねど自ら北條氏の爲めに忌むことありしは曲亭馬琴なども論じたり。(質屋の庫と雜著を見よ)。然るに政子の焼餅は随分ひどきものなるに、吾妻鏡の作者が更に筆に加減を加へず、無遠慮に書き立てたるには仔細あるべし。我等太平記を読みし時東國の女は一途に男を思込みて嫉妬深しと云ふ文ありしと記憶せり。若しくは其の頃東國の女は悉く男の愛に執着すること厚く焼餅をやくことは常の習なりしには非る歟。されば政子の嫉妬も吾妻鏡の作者の眼より見るときは東國女の常の習にて、其頃にては敢て恥づべきことに非ず、妻女は必ず相應に焼もちをやくべき筈のものなりとしたることなれば政子の嫉妬事件をも無遠慮に記したるには非るか。史を論ずるものは史家が心ありて書きたる褒貶よりも無心にて書きたる作者時代の習を察するが大切の事なり。抑も女は嫉妬すべからず、夫が何程多くの情婦を作りても、或は何程多数の妾を持ちても、それは男の働きなりとて美しく、黙つて濟すべし、夫が遊女町に通ふとて出行くときは妻女はいそ／＼として後から羽織を着せ、巾着には小判を澤山入れ、ニコリ笑つて出すべし、それが貞女と申すものなりなど、云ふ教訓は果して日本古代よりの流儀なりや否や、甚だ疑はし。我等などは斯様な非嫉妬論は日本にては徳川以後の産物にて昔は左様のものに非

ず、男女の愛情濃かなれば相應の程度まで嫉妬は許すべきものなりとしたるが、實は日本古代の流儀なるべしと信ずるものなり。天正の頃まで行はれし後妻打うしなひなどは殺風景のものなれども其頃の人情を知るに足れり。五雜俎に老て後妬婦の功を知ると云へり。女の焼餅は悪きことのやうなれども、愛情の濃かなるものが男の心の定まらぬを心配するは當然にして此愛情より出る防禦あればこそ男も身を過つことは少きなり。されば焼餅をやくことは必しも悪事とは云ひ難きとにて我等などは日本の女に今少し焼餅をやかせたく存する位なり。東國の女は情濃かにして身を思ふこと厚く、焼餅をやく代りに行儀も正しかりしかば従つて男の風俗も宜しく、さてこそ田舎より京都を制したるなるべけれ。それに戀と云ふもの、味は露骨ならざる所に在るべし。我等は不粹者にて戀の講釋を爲すべき資格なきものなれども、苟かに戀の興味は「忍ぶれど色に出づる」に在り、「人の知らぬに袖をうるほす」に在りと思へり。妾も天下晴れての妾、情婦も天下晴れての情婦、藝者狂も天下晴れての藝者狂にては犬猫の戀も同様にて全く獸的なり。人にかくれ、世に忍び、密かに通ずるならば稍人間らしき所もあり。密通を善しと云ふには非ず。公然にても、秘密にても女狂は宜しきことならねども密通ならば猶は妻女の權威も立つことなり。何れにしても政子を嫉妬深き女なりとて譏るは徳川時代を以て鎌倉時代を批判する時代相違の杓子定規と云ふものなり。嫉妬は必ずしも悪徳に非ず。

(五) 武士道と政子

東國の人氣は昔より格別に「神護景雲三年朝廷警衛の爲め東人を召させ給ひし時の詔にも東人は常に額に箭は立つとも背に箭は立てじ」といひて君を一心をもて護るものぞとあり。是れは東國は蝦夷との境にて人種の生存競争激しく戦争なども多かりし故、自ら健氣の風をも養成したるならん。蝦夷の叛亂聞へずなりし後も天慶には平將門の事あり、天曆には坂丸の事あり、長元には平忠常の事あり、永承康平の間には前九年の役あり、寛治には後三年の役あり、承久には武藏國横山黨の亂あり、其外遠國故王化も及ばざる所多く大名小名の私闘少なからず人氣自ら上國に殊なり、武士道と云ふものも生じたり。武士道と云ふものは如何なるものぞや。一定の釋義を下すはむづかしきことなれども先づは武士の間に自ら生じたる面目律とも云ふべきものなり。されば武士道にて第一に禁句とする所は臆病なり。頼朝は石橋山の厄難の時日頃髻の中に隠し置きたる觀音の像を取出し、我首若し大庭等の手に渡らん時髻中に此本尊あるを見れば源氏の大将の所爲に似ずとて嘲らるべし、それが口惜しければ斯くは取出し奉るものなりと云へり（吾妻鏡）。崇徳上皇、爲義を白河殿に召させ玉ひし時爲義、昨夜の凶夢を陳べて御味方たるべき仰をいなまんとしたるに使の殿上人、武將の身として夢見、物忌などは餘りに後れたる沙汰に候と云はれしかば爲義げにもとて參殿に及びたり。（保元物語）。宗旨も信仰も武士に取りては常の事なり、一旦非常に臨んでは唯何事も逃げず、突進するが武士道の極意なり。されば保元の亂に重盛は勅命を蒙つて罷り向ひたるものが敵陣強しとて引き返すべき様やあるといきまき

（保元物語）、平治の亂に義朝は義平の敗軍を見て義平が河より西へ引きつるは家の疵と覺ゆるぞ今は何をか期すべき、討死せんのみと云ひて敵陣に馳突したり。（平治物語）。臆病は弓箭の疵となるべきものなれば寧ろ死ぬとも卑怯の振舞すべからずとは武士道の第一義にして神護景雲の詔に額に箭は立つとも背に箭は立てじと云ふものと同義なり。如何なる場合にも逃げたりなど云はれんは口惜し。侍程の者、一度申さじと思ひ切りしことをたとひ拷問せられたればとて申すべきやうなしと云ふが如く何事も思切つて悪るびれぬを武士の魂とす。（平家物語）。次に其頃の武士道にて宗と重んじたるは志の專一なることなり。尤も大名は草の靡きと云ふ諺は其頃よりあり。（承久繪物語）。強そなる方に加擔して所領を安堵するは一般の習なりしかども、さりとして輿論は左様なる意氣地なきを善しとせしには非ず、主従の義を重んじ志を主人の家に盡すを以て眞の武士の面目とし、殊に主人の盛衰に従つて向背の態度を變ずるを以て醜事としたり。されば源氏に従ふ武士は「源氏に二人の主とることなければ宣旨なりとて得こそ内裏へは參るまじけれ」と云ひしものもあり、「源氏の習ひ、心かはりやあるべき」とて肩を怒らせしものもあり、「凡そ武士には二心を恥とす、殊に源氏の習は左様に候」と力みしものもあり。（平家物語）平家に従ふ武士も忠盛の家の子には主君を辱めらるゝ時は至尊の御堂近くなりとして遠慮すべからず、必ず殿上までも切り入らんと決心したるものもあり。（平家物語）。平宗清は頼朝の恩人にて頼朝より關東に來らば善く扶持せんと云送りけれども平家零落の後、頼朝に參向す

るの條、尤も耻ぢ存じ候と云ひ、直ちに屋島の内府に参り、運命を主家と共にし、(吾妻鏡)、齋藤別當實盛は吉についてあなたへ参り、こなたへ参らんは見苦し、今は源氏の世盛りとなりたりとも我は平家の味方となりて打死せんとて黒く染めたる白髪首を木曾義仲の士に取らせたり。(平家物語)。斯く臆病を惡み、主人に忠志の專一ならんことを宗としたる武士道が其結果として死生を度外に置きたるは當然なり。東國武士が平家を西海に伐ちし時、病身ながら天下の重事なり、坐視すべきに非ず、とても死ぬ身ならば戰場に死なんとて出陣したることは吾妻鏡にも見えたり。事あらば最先かけて命を主君に奉らん、弓矢取る身は死すべき處を通れぬれば中々最期の恥あるなりとて腹搔き切つて死にたるは其頃の武士の習なれば義朝も合戦の場に罷出で、何ぞ生命を存せんと云へり。(保元物語)。されば頼朝が十四歳にして父撃たると聞きながら自害をもせず池の禪尼にすがりてかひなき生命を助かりしを時の人は善くも言はざりしなり。此外其頃の武士道にて殊に著るしき一個條は人々互に功名を競ひたることにて爲朝が白河殿にて我れは親にも連れまじ、兄にも具すまじ、功名不覺も紛れぬ様に唯一人いかに強からん方へ差向け給へ、敵たとひ千騎もあり、萬騎もありとも一方は射拂はんずるなりと廣言したるは(保元物語)最も善く武士の氣習を言現はしたるものにて、佐々木、梶原の宇治川先陣なども其の一例なり。但し弓矢の道と云ひ、武士の道と云ふものも畢竟自然に生じたる武士の面目律にて多くは無意識の間に發達したるものなれば此處までが武士道、此處までが武士道に非ずと、棒

杭を立て得べきものに非ず、勿論井上哲次郎氏の言ひしやうに山鹿甚五左衛門の著書は武士道の經典なり、それを讀まねば武士道は分らぬものなりと云ふが如き窮屈なるものにも非ず、先づばつとしたるものなるが、さりとて其面目律の制裁は政子時代にも中々嚴重にして武士道に外れたるものは武士の間には生きて居られぬ程なりき。たとへば平治の亂に源氏の士、藤原信頼を見限り、此殿は人に類を打たれて返事をだにしたまはねば侍の主には叶ひ難しと云ひしが如く(平治物語)、大將若し武士道の心得なければ士卒つかず、侍若し名を惜まず卑怯の振舞あれば士林に齒せられざりき。此武士道東國に盛んにして都に流行らず、都は柔弱者の寄合となりし故、天下の勢つひに上軽く、下重くなりて日本未曾有の大改革とはなりたるなり。保元物語に阪東武者の習ひ、大將軍の前にては親死に子撃たるゝとも顧みず、彌が上に重なつて戦ふとぞ聞くとあり。平家物語に齋藤實盛の詞とて實盛の弓は纒に十三束を射候、實盛程射候ものは八個國にいくらも候ふ、大矢と申す定の者の十五束に劣りて引くは候はず、弓の強さもしたゝかなる者の五六人して張り候、かやうの精兵等が射候へば鎧の二三領は容易うかけず射透し候とあるも關東の武道盛んなるを云ひたるなり。さりながら東國の武士が天下の主人となりたるは獨り武士道の盛んなりしが爲めには非ず、保元以來都に兵事多く京洛の客、往々四方に散じ天下經營の智識に東國の武力を合併したるが故なり。近き世の薩摩の事も之に似たり。薩藩は武道の盛んなる所にして百二都城の健兒は勇氣に於ては天下無比なりしかども、それだけにては天

下に功を立つることも成らざりしに、島津齊彬の祖父重豪、隱居して榮翁と稱せし人、薩摩の邊土にて武士の片意氣なることを憂ひ、天下の形勢をも知らしめんとし、勉めて上國の風を移せしより、薩藩固有の武士形氣と、上國の智識とは此に相合して薩人始めて眼を天下の形勢に開くに至れり。東國の強きのみにては未だ天下を圖り難し。頼朝は北條、三浦、千葉、小山など云ふ東國武士の力を假りたりと共に大江廣元、三好善信など云ふ京洛の客を愛し其經綸の智識を用ゐたり。武士道も開化せざれば唯強きのみなり。天下の形勢を辨へ知る智識と武士道との二味が調合して始めて武士道も役に立ちしなり。我等つらく政子の傳記を按ずるに此人、女ながらもたしかに時代の絶頂に立ちたるものにて、開化したる武士道の標本なり。吾妻鏡を見るに建保六年政子鎌倉より京都を廻ぐり熊野詣したることを記す。此時政子は六十三歳の高齢なり。先頃日本婦人矯風會頭矢島かぢ子は七十餘歳にて太平洋を越え亞米利加に赴きたりとして荆妻などは其元氣の盛んなるに舌を捲き居れども、政子時代に鎌倉よりの熊野詣はそれよりも難儀なる大旅行なり。それを日本に二となき貴女の身にて輕々と出で立ちたること流石は東國育ちの身體強健なるを察するに足れり。それも其善なり。政子の父時政は七十八まで生きたる頑骨なり。其子なれば左様あるべき善なり。さりながら、それよりも猶ほ膽をつぶすべきは其旅の目的なり。其頃都には法皇、主上關東の專横を憤らせ玉ひ内々御謀叛の企てありなどよくも聞えたり。實朝もそれをうき事に思ひ

山はさけ海はあせん世なりとも君にふたこゝろわれあらめやも

と讀まれしとなむ。後に承久の役と云ひし大騒ぎは此頃より既に其兆ありしなり。されば政子の熊野詣も唯信心の爲めには非ず、實は都の人心を静めん爲めの示威運動とも見るべし。六十三の老尼、敵地にもひとしき都に入りて關東の爲めに示威運動を試む。頼朝の妻女にして此人あり。鬼の女房に鬼神とも云ふべし。扱京都に立寄りて從三位に叙せられしも參内して恩を謝しまいらせしにもあらず、仙洞より御對面あるべきの由仰せ下されしと雖も、邊鄙の老尼、龍顏に咫尺すること其益なし、然るべからざるの旨申切り、諸寺禮拜の志を抛ち即時下向したり。(吾妻鏡)。是れ實に示威運動の大上乘、公家の膽を冷すに餘ありと謂つべし。其後承久の亂になりても一刻も猶豫せず直ちに東兵を西上せしめ、我より先んじて敵の計を破るべき大計を決せしものは政子にして關東將軍の威嚴を保ちしものは實に尼御臺の御前にて決したる議に依れり。此段は諸書に詳なれば此には云はず。政子の如きは開化せる武士道の化身にして頼朝の事業を大成したる女政治家とも云ふべき歟。關東武士の渴仰尊敬したるも宜なり。日本の女は政治的能力なしなど云ふものは此人あることを知りて其説の過てることを白狀せざるべからず。

(六) 佳人成長の地果して如何

富士の白雪、三島に落ち、三島女郎衆の化粧の水となるとは我等が駿河に住みし時、土人の子と共に

歌ひし所なり。政子時代の北條の里は三島に近く風情多き所なりしなるべし。前には箱根眉端に迫り、右には日金いと高く、左の方には遙かに富士の裾野を見る。其頃の富士は煙立ちて風になびき今とは趣を異にせり。此あたり東北の風を山にて防ぎ、西は駿河灣の暖流を受けたれば氣候もいと暖かなるべき歟。我等未だ實地を履まねば唯佳人生長の地果して如何と想像するのみなり。狩野川の水は清く、城山の月は白し。故人見るべからず、人をして哀ましむ。

(明治三十九年九月中央公論)

豊太閤論

(一) 豊太閤は好運兒なり

人間の成功は半は人に在り、半は天に在り。智將は福將に如かず。運悪くば麒麟も槽下に老死すべし。豊太閤があれ程の出世は史上の珍品なれども、彼れあれ程に龍飛したる故、日本には其頃あれ程の人物、別に無かりしとするは愚論なり。一根に養はれたるすら南枝は日あたり善き故に早く花を着け、北枝は蔭になる故實も結ばずして老ゆるぞかし。十室の邑にも忠信孔子に等しき人はあらん。豊太閤とて鬼神に非ず。あれ程の人物は其頃の日本國中をさがしたらばいくらもありしに相違なし。深山に沙あり。沙の中に金あり。偶然人に知られたるものは其光輝を以て玉樓をも飾るべけれども、人に知られず千年萬年も泥中に埋るゝものも亦なきにはあらず。材料が善くとも下手の大工に掛りては廟

廊を飾るものにはなり難し。材料が善く其上好運と云ふ上手の大工の手にかゝりて始めて歴史を飾る逸品ともなるなり。されば未製品の英雄もあり、粗製の英雄もあり、天時、人事、二ながら彼れを助けてあつばれ精製の英雄となりしものもあり。豊太閤の如きものは則ち福運に寵せられたる英雄なりと知るべし。斯様に心得ねば太閤を論ずるも無益なり。太閤と云ふ男は日本にたつた一人の珍品ならば、それを論じたる所にて唯一人の噂に止まるなり。されど太閤ほどの材料は日本にいくらもあり、たゞ太閤は左様の材料の内にて精製を経たるものなりとする時は、太閤を論ずるは則ち日本人民を論ずる所以にして論題始めて廣く、直ちに日本人民の血液と關係す。此論を讀まん人此心ありて可なり。

(二) 英雄は英雄の面魂あり

太閤の風采は甫庵太閤記につらがまへは猿に似たりとあり。太閤素生記にも容貌、猿に似たりと記し、明人の記事には左頬の上に黒痣數點あり、面、犬の形に似たりと云ひ、朝鮮人は秀吉容貌矮陋、面色黎黑、異表なし、但だ徹しく目光閃々人を射るを覺ゆと記せり。明韓人の記事は太閤老年の頃を恐るゝちよつと見たるもの、言ひ傳へに過ぎざれば當になるものに非ず。面の猿に似たりと云ふもそれにて直ちにいやな顔と云ふ譯には非ず。太閤素生記の方には松下嘉兵衛、遠州引馬の町はづれにて少年に逢ひたるに見苦しき態にて猿に似たりしも、屋敷に連れ行きて介抱したれば奇麗になりたりと

の趣を記したれば是は顔が猿に似たりと云ふよりは、きたなさが猿に似たりしと云ふ迄なり。太閤記の猿に似たりと云ふは、氣輕の顔つきを形容したるに過ぎず。是れ亦それ丈にては直ちに其醜醜かりきとは斷ずべからず。畢竟世に有りふれたる書物だけにては太閤の容貌は判斷すべからず。美醜何れにても人々の想像に任する計なり。さりながら容貌も精神も畢竟は一原より出でたるものなれば、馬鹿は馬鹿な顔あり、利口は利口の顔あり、英雄は英雄の顔あり、太閤如何ほどまづき面貌なりとも見る人に見せたらば其胸中の光は自然に外に映りて見ゆべし。信長が一見して彼は心の輕き敏捷のものなりと鑑識したる上は、他人の容喙はいらぬ事なり。太閤の顔はやはり英雄の顔なり。

(三) 太閤の出世は人生の理法に合す

此英雄其始は土民より出でたり。太閤の若き時は、泥鰌賣りの與助と云はれたることありと或本に記せり。明人の記事には初め魚を販すとあり。多分日本に来て同じ傳説を聞きしものならん。朝鮮人の記事には薪を負うて生を爲すとあり。何れにしても微賤の出身たるは論なし。其微賤の人物が後には位人臣を極めたることは不思議の様なれども人生の理法より見れば敢て珍しとするに足らず。成程太閤の事のみ見れば泥鰌賣りの與助が關白になりしは不思議の様なれども信長の家とても尾州の小身者なり。尾州の小身の筋が信秀の時になりて家運漸く榮へ其子の信長は右大臣にまでなりたれば是れ亦太閤同様の事なり。松永彈正は壯年に至るまで世網にかゝづらひて身を立つることも無かりしに、行

年三十四五より手習など物し、三好が右筆に勞し、計策を以て時めき出で、後は畿内の棟梁たり。美濃の國主齋藤道三は其初め油賣にして、關東の北條氏是一個の冒險なる青年武士より出でたり。斯様の例を挙げれば太閤が尾張の國中村より出で、後には天下を取りたりとも何ぞ珍とするに足らん。我等其頃の歴史を讀むに亡びたるものは多く大身の舊家なり。今川、武田、土岐、大内、何れも家柄なり。家運盛んなるものは多くは新興の家なり。織田、毛利、徳川、長曾我部を初め何れも小身より出でたり。天に不思議の律法あり。人生の幸福は私のなり難きものと見え、下なるものは必ず上る勢あり、上なるものは必ず下る理あり、斯くて運命は循環す。所謂天下はまはり持なるものなり。さりながら或る時期にはしばらく人為を以て此の循環の作用を中止したる様に見ゆることなきに非ず。たとへば武家諸法度にて天下を大名のものにし、其世襲の權を確保し、しばらく自然の競争を抑ゆるが如し。一寸見ればそれにて循環作用は已みたる様なれども、家老馬鹿にならば實權、用人に移り、用人馬鹿にならば實權右筆に移り、かはらぬものは外形のみにて、如何なる所にも人を廻す奴は依然として人を廻し人に廻さるゝ奴は依然として人に廻さるゝなり。其上人才の循環作用、此所に止む時は彼所に起る。武家の競争しばらく止めば町人の競争となる。元龜天正の六雄八將時代は徳川氏の威力に依りて、しばらく泰平の世界にかはりたれども、其代り町人の六雄八將時代となり、徒手空拳を揮つて陶朱猗頓の富を積みたる十露盤の豪傑起りき。されば靜かに人間を観察すれば循環作用は何時の

世にも行はるゝものなり。是れ則ち人間の靈妙なる活物たる所以にして今の世にても泥鰌賣りの關白たるべき勢ありと知るべし。それで無くては豊太閤論も今の世に縁なきものとなりて面白からず。

(四) 大なる人物

世に大きな人物と小さな人物と云ふことあり。如何なるものが大きくして、如何なるものが小さきやと科學的に説明するは難儀なれども兎に角大きなものと、小さきものゝあることは勿論なり。豊太閤は其中にて殊に大きな人物と見えたり。太閤小田原征伐の後奥州に下向せんとて途中にて佐野天徳寺を招き、信玄、謙信の様子を聞き、左様にはかをやらざる小刀利の武道にては天下に思ひ掛ることは中々思寄らざる事たるべきなり、此者など早く相果て外聞をば失ひ申さず候、其故は只今迄之あるに於ては秀吉が草履取に遣ふべき者なりと云ひたりと云ふ。小刀利の一句、信玄、謙信の事業を評し得て骨髓に達したりと云ふべし。二家ともに兵法に掛けては比類なき英雄ながら力の入れ所が小き所に局したる故に小刀利なり。太閤は左様に小さき所に力瘤を入れず、恰も大風の吹くやうにばつとしたる行方なり。甫庵太閤記に天正十五年島津征伐の時、太閤既に肥後國八代まで進みたる事を記し、扱入代にて太閤一夜沈思しけるは遠國のはてまでも毫髪も残さず退治せんと思ふは小志なり、残る城々をば免しおき、急ぎ歸陣し、四方泰平の謀計に及ぶべしとて或は一揆、或は仁俠せし僧坊、残さず御免なざる、條、罷出で安堵の御禮申候へと高札を立てしかば、是は寛宥の御下知かなと悦びあへりつ

、方々よりあつまり來り、御禮申上げんとて門前市をなす事、恰も朝禮の如しと書きたり。萬事はかの行くことを主とし、荒ごなしにこなし付けて、更に小事に拘泥せず、大體より片付くるは太閤の筆法にして是れ則ち其大きな人物たる所以なり。大斧にて大割すべきものあり、小刀にて彫刻すべきものあり。小刀の彫刻は如何ほど精妙にても大木は斬り倒せぬものなり。信玄などの行き方を見るに國の仕置も巧にして兵法も鋭けれども、精力を用うる所、所謂片はしより堅めて行くと云ふ流儀なれば人生五十の短生涯にては兎ても天下は望むべからず。太閤は之に反し、寛濶粗大、萬事急ごしらへの普請なれども其骨組は日本國を狭しとす。何物にも拘泥せず、何物にも頓着せず、怨を忘れ、仇を思はず、人を嫉まず、人を恐れず、直截簡明、唯大きな所より手を付け大きな事を做すのみ。是れ其一代に卓絶して善く群雄を駕御したる所以なり。剛情者の徳川家を色々の手段にてとう／＼京都に招きたる十月廿四日家康入洛と云ふ其夜自身旅館を訪ひ、黃門兼て知り給ふ如く秀吉今官位人臣を極め、兵威四海を席卷すといへども、もと松下某が草履とりて跟随せし奴僕とは誰か知らざらむ、やう／＼織田殿に見立てられ武士の交を得たる身なれば、天下の諸侯陽に畏服するが如しといへども、心より實に歸順する者なし、今被官となりし者ども元は同僚傍輩なれば實の主君とは思はず、願はくは近日表立たしく對面をせし時に其心して給はるべし、秀吉に天下を取らせらるゝも失はしめらるゝも卿の御心一にあり、此事頼み奉りたくて、かく上洛をば勧め進らせたりとて徳川殿の春をたゝきた

りと云ふ。徳川家も此裸體的の眞率なる白狀に對しては唯依頼に應ずる外はあるべからず。他人ならば千里も迂廻して行く道を、太閤は極めて短き直線を取つて進む。禮儀も、作法も、遠慮も、人前も彼が突進する脚下に蹂躪せらる。此時に方りては赤心ありて權略なく、裸體ありて衣粧なく、眞實ありて繩墨なし。規律に拘はらず、早く埒の明くを旨とす。左様にせんとて、わざと爲したりとて人爲の跡見えて却て滑稽に類すれども、此人は自然に斯様の大きな性格を備へたれば群雄も遂に其下に屈したり。人間は平等にあらず。人間が平等にては誰も尊敬すべきものなく、誰もえらきものなければ、たとへば代議政治にても行はるべからず。我れ既に尊敬する人なければ、投票の動機、何を以て生せん、投票の動機なくんば何ぞ代議政體あらん。結局唯凡人の堆積を見るのみにて政治もなく、節度も無く、人類共存の幸福なきに終らん。幸ひにして人間は砂礫の平等海に非ず。人間の内には英雄崇拜心あり。眞主に逢へば必ず謳歌して之を中心的人物と仰ぎ其周圍に集りて共同生活を作る。是れ人類の人類たる所以なり。是れ人類が共同の生活を爲し、共存の社會を作る所以なり。元龜天正の時に當りて天下は正に英雄に饑えたり。社會は共存の中心を失ひしかば、何人か出で、秦平を開かんことを望みたり。されば小早川隆景が「本朝の兵革、頻りに動きて、こゝに百餘年、天下の亂、既に極りぬ、世また秦平に屬すべき期、やゝ近きにあり、此時に當つて自ら天下の權を握り、海内の亂を攘ふべき人などか無かるべき」と云ひたるは此の崇拜心の渴望を正直に言ひ現はしたるものなり。然る

にかゝる崇拜心の前に秀吉と云ふ大きな人物現れたり。彼は自然に偉大なり。彼の前に出づれば群雄は小兒の如し。

太閤、氏郷を會津に封じて後出仕す。太閤他事を問はずして云ふ。汝手を能く書けり、謠の本を一冊書いて呉れよとて紙硯を持參れとのたまふとぞ。

太閤或時宇喜多殿にて能を見物し給ふ。庭に下り玉ふ時に東照宮下りて履を正しくし玉ふ。太閤手を以て肩を押へて徳川殿に履をなほさせ申すことよと宣ふ。(以上老人物語)

秀吉の風采は此眞率なる傳説に盡きたり。人を人臭く思はず、恰も天の容れざる所なく、地の載せざる所なきが如し。諸家は各自ら他人と短長を較するの意あり、獨り秀吉は眼古今を曠ふせり。天下是に於て自ら彼を謳歌せざるを得ず。

(五) 繩墨の破毀者

秀吉が成功の秘訣はナポレオンのそれと殊ならず。二人を併せ論ずるときは大に英雄の眞髓を發揮すべし。ナポレオンのえらき所は典故にも支配せられず、學問上の形式にも拘泥せず唯自己の善しと思ひたることを斷行したるに在り。されば獨逸の大將はナポレオンを指して無學にて熱き頭の青年、軍法も知らず、無鐵砲を事とする亂暴人と呼べり。ナポレオンは兵學の愚なることを知り、所謂戰略上の規律なるもの、其實軍人を拘束する無益の繩墨に過ぎざることを知り、併せて深く戰爭の目的は勝

利を得るに在りて兵法に縛らるゝにあらぬを知れり。是れ彼の兵法を破りて却つて兵法に合したる所以なり。彼は又此行方にて學者が非難したるアルプスの山越を斷行して成功したり。人間は規則の主人にして、規則は人間の主人に非ず、頼むべきものは唯眞實の事實にして期する所は目的を達するに在りとはナポレオンの信仰個條なり。此點に於て太閤はナポレオンと同じ流儀なり。秀吉が母の杉原氏（大政所なり）を徳川家に質に出したる時自ら昔が今に至る迄先例なきことを仕置き日本の後紀に留むべきぞやと云ひたり。其頃秀吉に隨ふ國は三十國、徳川家に従ふものは四ヶ國なり。常人の考にては三十國の大身より母を四ヶ國の小身に人質に出すと云ふが如きは固より思設けぬことなり。されど目的の前には方法を撰ぶべからず、典故も習慣も顧みずといふ流儀なれば先例なきことを斷行して念とせざりき。老人雜話に

太閤萬事早速なり。醍醐の醜の字を忘る。太閤指を以て地に大の字を書して云ふ、汝知らざるか、此の如く書くべしとぞ。又高麗の軍中に奉書など下さるゝにも、繼いだる紙に書き又は惡き所は墨にて消し是もて往けとて遣はさるゝとぞ。

目的と手段を轉倒し、重箱の詮議にのみ目をくらして中身の好惡を忘るゝは太閤流に非ず。たとへば文章の用は唯讀む人を感動さするに在り。人を感動さするの道は外ならず、唯自ら感動したる所を正直に寫せば感動の波は自から此より彼に傳はるなり。然るに自ら感動せざることを字句の精練と文法

の巧妙とて書き列ねたりとて、必竟火の書となりて活火とはならざるべし。用さへ足りれば醜にても大にても頓着なく、繼ぎたる紙にても消しだらけの感狀にても差別なし。末に拘泥して本が埒明かねばつまらぬことなりとは太閤の心に刻みたる法則ならん。或は此式の事は誰も氣の付くべきことにナポレオン、太閤を待たざるも分り切つたることなりとの論もあるべけれども、實際は然らず、何時にても十の七八までは無益の繩墨が人間を支配し居るなり。たとへば足利の末の世に出來たる武家の禮儀などと云ふものは多くはたわいも無きものなれども、天下久しくそれに支配せられて背くこと能はざりしが如し。是れ末が本を支配したるものなり。太閤はかゝる世の中に生れて而も世に泥まらず、何處までも人間は法則の主人にして法則は人間の主人に非ざることを實行に於て現はしたり。此點より云へば彼はナポレオンと同じく無益の繩墨、不急の典故に縛られたる人心を解放したるものなりと謂つべし

(六) 人の善に服す

太閤とナポレオンの相似たる他の一個條は人才に對する同情の厚かりしことなり。ナポレオンは自ら余は泥土より大將を作れりと云ひたる如く、寒徹の中より多くの人才を見出して之に適當の位置を與へたり。其撰抜によりて普通の兵士より、王、元帥、公、大將等十七人の豪傑は擧げられぬ。されば家系を尊び門閥を重んじたるルイ第十六世の世の中はナポレオンに至つて全く顛覆し、眞智實才あるも

のみ彼の保護に依りて世に出でたり。太閤の爲す所、此點に於ても全くナポレオンに同じ。太閤の親臣多くは寒微の出なり。尤も是は太閤に限りたることに非ず、信長は殊に微賤より人才を拔擢したる人にて、其取立の大名は、徳川時代になりても大身のもの多く詩人をして陳王將帥盡諸侯と歌はしめたる位なるが、太閤も信長同様人材の取立に於ては深く意を用ひたり。是れしかしながら、故意とはならぬことにて天性人の長所に服し、人の善に感ずる美質ありしに依れり。世には英雄とは獨り自ら善がるものゝ事にて他人には感服せぬものなり、英雄は他人に崇拜せらるゝのみにて、他人を崇拜せぬものなりと誤解するものなきに非ず。さりながら、其實は英雄は最も同情の深きものにして、他人の美質に對しては殊の外感動するものなるが如し。太閤は大人物にて群雄を見ること小兒の如くなりしかども、他人の美質を認むるに至つては感情甚だ猛烈なりき。たとへば岡江雪齋は北條氏の士なり。天正十七年使者となりて上京し豊臣北條兩家の和談を結ぶ。既にして北條氏約を背きて奈久留美城攻の事あり。同十八年秀吉遂に小田原を攻む。戰果て、氏直降参の時、江雪齋氏直に従ひ再び秀吉に謁す。秀吉自身に對面し汝去年の約を變じ氏政父子に國を失はしむ、但し汝の過に非ず氏政父子の表裏か、答ふる所、僞あらんに於ては忽ちに首切つて不忠の徒を懲戒せんと云ふ。江雪自若として敢て恐るゝ氣色もなく、奈久留美を攻取り候ひしは邊鄙の田舎侍の仕わざにて氏政父子の表裏には候はず、北條五代の家、一朝に亡滅いたしたるは天運の然らしむる所、如何ともすべからず、但殿下の敵とし天下

の大軍を引受けて五ヶ月の間、堅固に城を落されず控へ候事、天下後世に至るまで氏政父子の規模とする所に候ひなん、此外申上ぐべき詞もなし、唯某が首を刎ね玉へと云ふ。秀吉彼の健氣なる振舞に感じ、忽ち威を霽らし、汝實に罪あれば我始めは汝を磔にせんと思ひたり、されど汝は大丈夫の膽ありて死を恐れざる氣象は愛すべし、今より我に昵近せよとて其儘近臣としたり。長湫の役に本多忠勝を殺さざりしも同様にて、秀吉の胸中に人の善に感動する熱き同情ありし證據なり。弘前の人話に同藩にては、諸國の例に倣ひ城中に東照宮を安置し、毎年四月十七日には城中の士擧つて参詣す。然るに別に藩主のみ代々拜む祠あり。其祭る所の何者たるは藩士の知らざる所なりしに、維新の時、開きて之を見れば豊太閤神としたるものなりしと云ふ。是れ太閤が津輕氏の祖先に恩を被せたることありて祖先の感謝の念に堪へざりしかば徳川の世盛りになりても子孫に遺言して祀らせたるものなるべしとぞ。斯様に群雄に思付かるゝこと畢竟人才に對する同情厚かりし故なり。小田原陣の前に關東の地圖を開きて軍議あり。眞田昌幸其時末席にありしを秀吉呼出し、安房、(昌幸は安房守と稱す)來りて圖を見よ、汝を中山道の先手に云付けると云ふ。昌幸は家康と同輩に呼ばれ、圖を見せられしは國郡を何程拜領したらんよりも忝かりしと云ひ、是より豊臣家に對して忠義を盡くしたり。是れ亦同一の筆法にして知行の廣狹、家の大小に依りて人を見ず、直ちに赤心を人の腹中に置き一視同仁の同情を以て人才を愛したれば昌幸も心より服したり。かく太閤の人才に於ける同情は甚だ廣く、獨り其臣下

のみならず、敵國の家來に及び、猶ほ陪臣にも及びたり。石田の臣島左近の事は特別の例なればしばらく之を論ぜざるも、細川の士澤村才八の如きも美濃國加賀井城攻に功ありとて其稱讃を受けたり。人才を知り、人才を愛し、人才と交り、世に不平の士、用ゐざるの才あらせじとしたるが、是れ則ち太閤の秘訣にして群雄の思付きたる所以なり。されば蒲生氏郷は太閤に抜かれて勢州松島十二萬石より一躍して會津百萬石の大身となり、堀秀政は深く太閤に愛せられ、其身は早世したれども其子は越後の國主にせられ、仙石權兵衛は讃岐を受け、蜂須賀小六は阿波を與へられ、木村彌右衛門は大崎三十萬石の大身となれり。此男は物の役に立つものなりと見抜く時は大封大祿を與へて毫も吝惜の色なし。天下の人才何ぞ其鼓舞激勵を蒙らざるを得ん。太閤とナポレオンとは共に泥土より英雄を作りしものなり。

(七)軍人としての豊太閤

ナポレオンと豊太閤と相似たるは獨り此點に止まらず、軍人としての兩人を比較する時は更に兩者の類似少からざるを認む。ナポレオンの戰術は攻撃の點に向つて勢力を集中するを秘訣とす。戰場に敵より多くの勢力を集むるはナポレオンが百戰百勝したる所以にして、かく爲さんには急速なる運動と開展とを連続せざるべからずとは蓋し彼の信ずる所なり。太閤も亦此理を解するものなり。その一代の最大賭博なりし山崎會戰の始終を見るに如何なる手段を用ゐても敵より多數の兵を戰場に出さる

べからずと決心したるが如し。されば其居城姫路の如きは殆んど一兵を留めず、全く空虚にして戰場に向へり。其時姫路の天守に存したる銀七百五十貫目、金八百枚、米八萬五千石あり、西國陣の使餘り銀十貫目、金四百六十枚あり。太閤悉く之を其士に散じて一物を残さず、更に籠城の用意に及ばず、六月八日の四つ頃(今の午前十時)に西國陣より姫路に着し、其夜直ちに出兵し、いそぎ山崎に驅附けて合戰を遂げたり。其軍令の如きは風呂に入りながら發したるものなりと云ふ。其運動の神速にして勢力の集中に勉めたること見るべし。さればこそ流石の明智も忽ち敗軍したるなれ。英雄の行爲符節を合はするが如しと謂つべし。其上ナポレオンも太閤も共に戰爭の心理學を解せり。ナポレオン曰く、最も勇悍なる軍隊も苦戰惡戰の後には自ら恐怖の念を生じ遁足になりたがるものなり、是れ攻撃の材料に缺乏を來たすが爲に非ず、自己の勇氣を信ぜざるより起る、かゝる時には必ず些細の機會ありて味方の自信力を恢復すべき楔子となるものあり、此楔子を發見し神速に之を利用するが即ち大將の一技術なり、アトラテの戰爭の時、余は僅に二十五騎を利用して勝利を得たることあり、そは此戰兩軍既に疲勞して敵若し敗走せずば味方却て敗走すべき勢となれり、余は是に於て彼の二十五騎に令し各ラッパを吹奏せしめたり、案の如く此ラッパは我が軍隊に自信力を與へ、敵をして心膽を寒からしめ、余は終に勝利を得たり、卿は兩軍相會する時は各敵陣に恐慌を生せしめんと勉むるものなることを知らん、かゝる恐慌の起りたる瞬間こそ、即ち之を機會として有利なる状態に變化せしむべ

き時なれと。此語は戦争の勝敗は機械の利鈍よりは寧ろ心理の變化に基くものにして大將の要は味方の心をして常に靈活ならしむるに在りて存することを説くなり。彼は又或時其秘書官に向ひ夜に入らば余が室に入ること勿れ、余に告ぐべきこと若し吉報ならば余を覺ますこと勿れ、若し凶報なれば直ちに余を覺ませ、かゝる時は瞬間も失ふ能はざるものなりと云ひたり。太閤、柳ヶ瀬の合戦に北國勢の勝誇りたるを聞き忽ちに濃州より引返し殆ど迅雷耳を掩ふに暇あらざる勢を以て直ちに敵の疲勞を衝きたるは即ち此術にして凶報の達したる瞬間の機會を失はざりしものなり。長湫にても此手にて殆んど成功せんとしたりしかど是は相手が家康と云ふ名將なれば甘く行かざりき。但し兩軍既に相戦ひたる上にてはナポレオンに比すれば太閤は多智多算なりとは云ふべからず。其手段も大略限ありてナポレオンの如く、無數多様の掛引に富まざりしが如し。之を詩人に例するにナポレオンの戦争は杜甫の如く、一題は一題の趣向あり境に従つて情も亦變じ、智略の湧き出づること泉の如くなれども太閤の戦争は李白の如く、數個條の慣用手段ありて、如何なる題目にも此手段を應用し、其軍略の種類頗る制限せられたるもの、如し。要するに戦争の上より云へばナポレオンに酷似したるものは家康にして秀吉に非ずと云ふべし。されば太閤の手段は同時代の人にも、それを見抜きしもの多かりき。即ち急速は兵家たる太閤の一術にして小牧陣の時、先手より出馬を促したるに、太閤折しも伏見にて利休が茶の會にありしが、其儘路次より出て尻をまくり、えい／＼と云つて直ちに陣したるは其例な

り。扱て戦に及んでは前に記したる如く敵の一たび勝つて疲れたるに乘じ、更に新銳の兵を放つて其情氣を撃つ、是れ亦其慣用手段なり。或は敵城を圍みて容易に落ちざれば地利を相して水攻めの手段を用ふ。太閤の水攻と云へば殊に名高きものにて備中高松の城、濃洲竹ヶ鼻の城、紀州太田村の城、皆太閤の水攻にて落ちたり。されば瀧川雄親、織田信雄の爲に伊勢松ヶ崎の城を守りし時、大船を城中に引入れたり。太閤後に雄親を家人となし、其仔細を尋ねしにさればにて候、君若し我城を水攻にし給はん時の料に候ひきと申せしかば太閤大に感じたりと云ふ。それに就きて一説あれば記すべし。毛利輝元が吉田の古城を去りて廣島に城きたるは太閤の命に依りしことにて毛利家中の好む所に非ず。其頃の説に秀吉は水攻が上手なれば萬一の時、毛利氏を攻め易からんが爲にわざと水利よき廣島に城作らせたるなりと云ふ。然らば徳川家を勸めて江戸に城作らせたるも同じ趣向なりと邪推せられざるに非ず。そは何れにしても太閤が水攻の上手なりしは勿論なり。我等の見る所に依れば太閤の軍の手段は大抵此様のものにて種類甚だ多からずと覺ゆ。之をナポレオンが手を換へ品を換へ、百の状態に百の手段を出したるに比すれば手段の數に於ては眞に貧しき者と謂ふべし。さりながら手段の數に於て貧しきもの必ずしも手段の應用に於ても亦貧しと云ふべからず。詩を作るものが韻字の數を知ると少く、辭句に富まざるとも其貧しき材料を巧に應用して却て學問に富み、多く文字を知れるものに舌を捲かすことあり。將棋をさすに中飛車を好むものあり、端よりくづすを以て長所とするものあり。何

れも癖になりて其用うる手段は千篇一律なれども、手段の應用に至りては癖となりたる程のものなれば變化の妙あり、それにて敵を突きくづすこと多し。長技は即ち癖にして、其手段は偏なれども其用は廣し。ナポレオンはたとへば槍にても、長刀にても、劍にても、ピストルにても、武器と材料とは撰ぶ所にあらず、何を取りても精妙を極めざることなき武人の如し。豊太閤は纔に太刀打の名人と云ふ迄なり。太閤の手段少きは氣の毒なれどもさりとして太刀を取りて立つ時は、槍も、長刀も、劍も、ピストルも容易に敵し難き時は是れ亦侮るべき敵に非ざらん。李白の詩、趣向の數甚だ少しと雖も、猶ほ杜甫と文壇の雄を争ふものは亦唯其長技に於て絶類超群の才あればなり。殊に太閤の軍人として驚怖すべきは戦場の働きよりも寧ろ高く自ら地歩を占めて敵を威壓し戦はずして先づ其膽を破るに在り。是れ所謂位詰なるものにして、流石の徳川家も此手段の爲に遂に下手に廻りたり。南海道紀の記者は太閤に此手段あることを看破せしものと見え、總じて秀吉公は謀を隠さず、敵方に告げて兵威を以て敵を壓し玉ふ、伯王の兵と謂つべしと云へり。太閤島津征伐の時、天正十五年三月朔京都を出づ。其日の装束には緋威の鎧、鍬形打つたる甲を猪首に着なし、赤地の錦の直垂、いとほなやかに出立つ。天正十八年三月十九日、小田原征伐の爲、都を出でし時は作り髻にかね黒なり。太刀差添などことごとくしく鮮かに粧ひ、伽衆、傍衆など云ふものに異形の出立を爲さしむ。一寸考ふれば眞に小兒の戯の如くなれども是れ則ち自身出征の事直ちに敵國に響くべき示威的手段にして所謂位詰の一方便たるに過

ぎず。相手が家康の如き無感覺の者ばかりなれば此方便は無効に歸すれども百人の内九十九人までは斯様におどされては戦はざる内に先づおち氣を生せざるを得ず。剛情我慢の三河武士も遂には我を折り家康の長臣石川伯耆守親族水野和泉守先づ屈して上方に奔り一藩漸く動搖し徳川氏は遂に甲を脱ぎたり。何さま虚聲を張りて人を畏す卑劣の手段の如くなれども、元來虚聲の爲に動かさるゝが人情なれば其虚聲を利用し敵を屈服せしむることは是れ亦兵家者流の術と云ふべく、太閤は此術に於て殆んど非凡の技倆ありしが如し。何れの點より見るも太閤は戦争の術よりも、寧ろ戦時に於ける人心を捕捉し之れを自家の利運に驅用するの手段に於ては史上稀有の技術家なり。此點に至つてはナポレオンと雖も蓋し三舍を避くべき歟。甫庵太閤記に小田原城攻を記して曰く、

五月雨は日をかさね止もやらず、總陣何共なく困れ果てたるやうに秀吉公等の聞給うて早歌をうたひ、おどりをかけ引きつし給しかば上下の氣うさやかに新しく成て、幾年を経るともいかでか勞せんとこゝかしこのゝしり出にけり。或時はすきやをあらましう、かこひなし、橋立の御壺、玉堂の御茶入をかざり、家康卿を請ひ入れ、相客に細川玄旨齋、由古法橋、利久居士、或時は信雄卿、忠興卿、景勝、羽柴下總守などに前波半入をくはへ、御茶を賜りしが、十六七歳二十計なる青女房にきうじをせさせ、種々の名酒を以て數興をつくし、右のわかき女ばうに杓をとらせつゝこうたを所望せよかしと宣ひしを幸に半入さし出、一ふし望み侍りしに聲うるはしくうたひ出しかば満座一